

福寺遺跡

埋蔵金貨及び渡来銭貨発見地点の発掘調査報告書

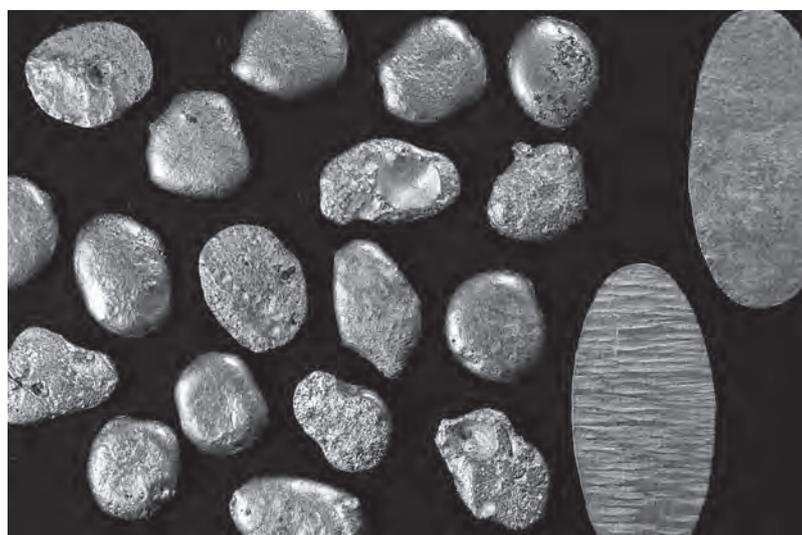




写真1 福寺遺跡遠景



写真2 福寺遺跡と勝沼氏館跡



01



02



03



04



05



06



07



08



09



10



11



12



13



14



15



16



17



18



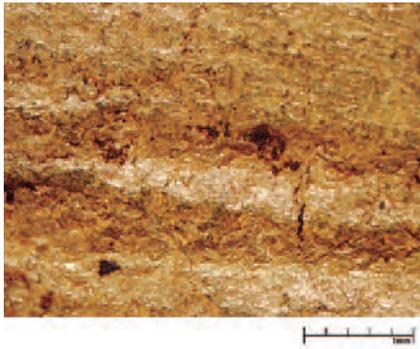
19



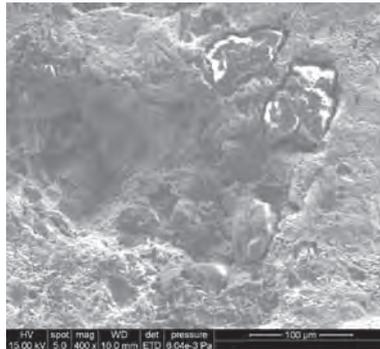
20

写真3 福寺遺跡1971年出土金貨

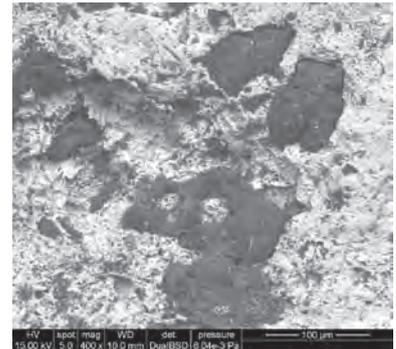
原寸大



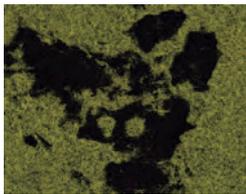
(a) 顕微鏡画像



(b) 二次電子像



(c) 反射電子像



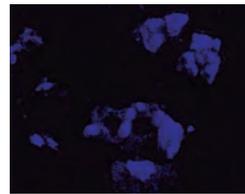
Au



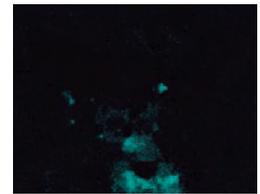
Ag



Cu



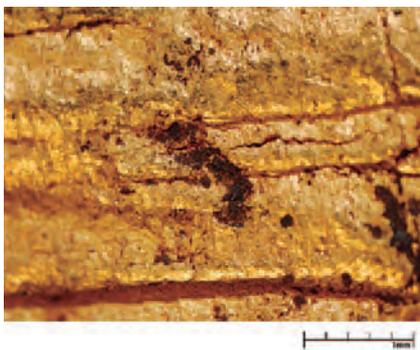
Si



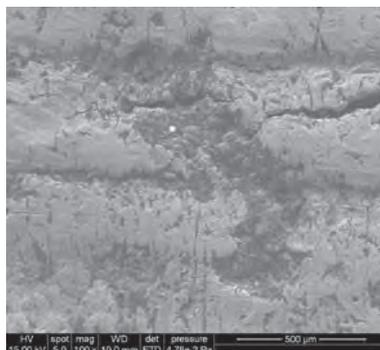
Fe

(d) EDXマッピング

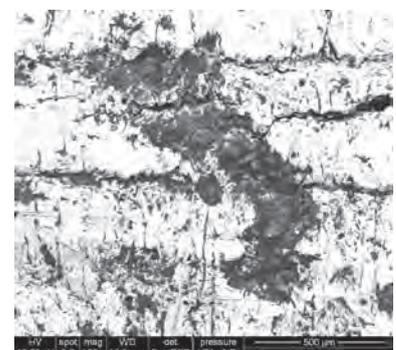
写真4 資料01不純物周辺の顕微鏡画像とSEM像（二次電子、反射電子）、EDXマッピング



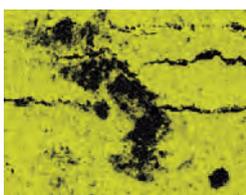
(a) 顕微鏡画像



(b) 二次電子像



(c) 反射電子像



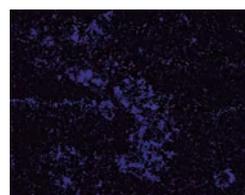
Au



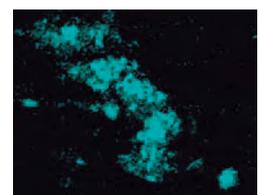
Ag



Cu



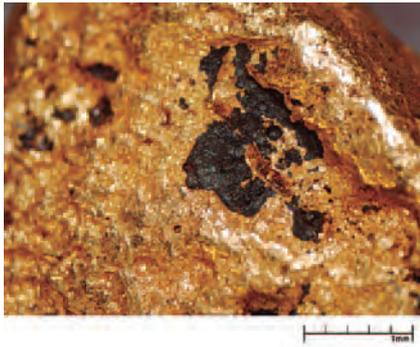
Si



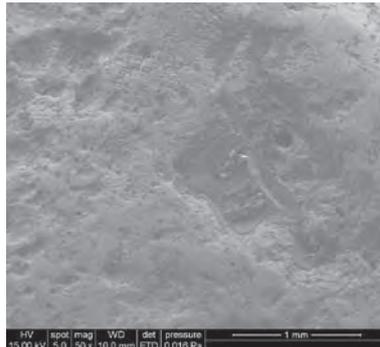
Fe

(d) EDXマッピング

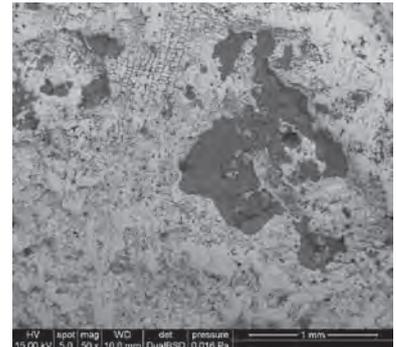
写真5 資料02不純物周辺の顕微鏡画像とSEM像（二次電子、反射電子）、EDXマッピング



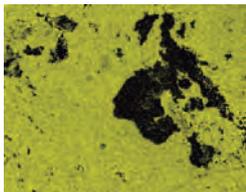
(a) 顕微鏡画像



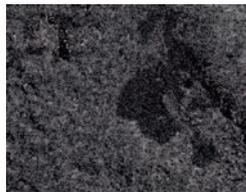
(b) 二次電子像



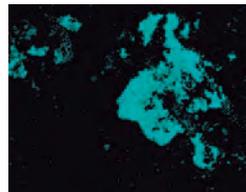
(c) 反射電子像



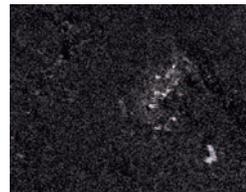
Au



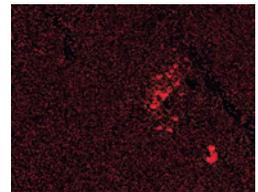
Ag



Fe



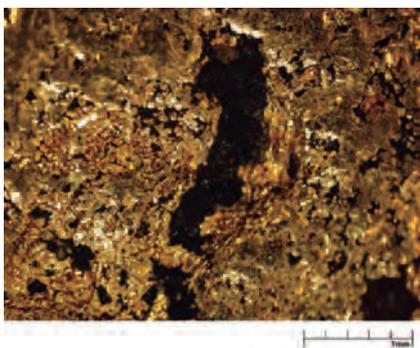
Ca



W

(d) EDXマッピング

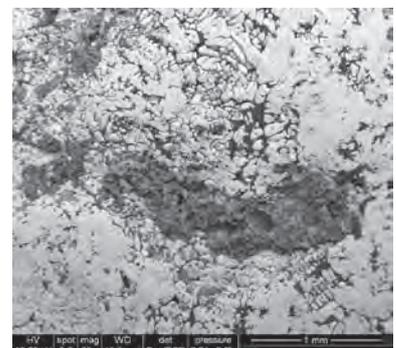
写真6 資料03不純物周辺の顕微鏡画像とSEM像（二次電子、反射電子）、EDXマッピング



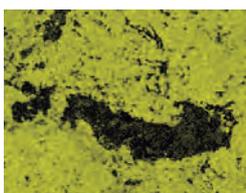
(a) 顕微鏡画像



(b) 二次電子像



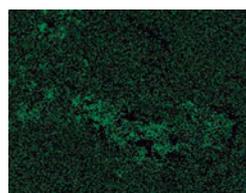
(c) 反射電子像



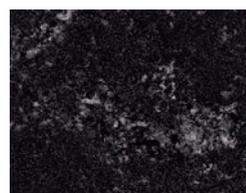
Au



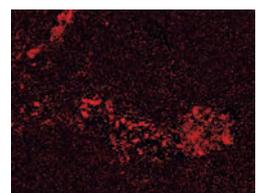
Ag



Bi



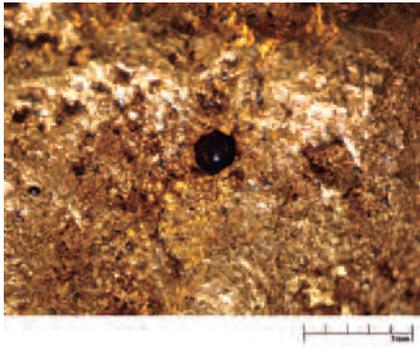
Ca



W

(d) EDXマッピング

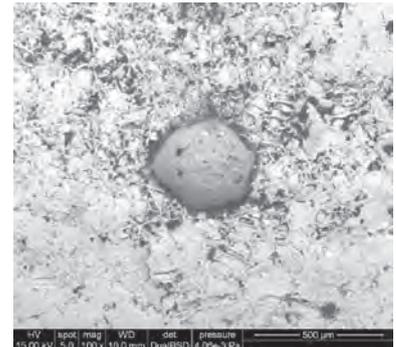
写真7 資料04不純物周辺の顕微鏡画像とSEM像（二次電子、反射電子）、EDXマッピング



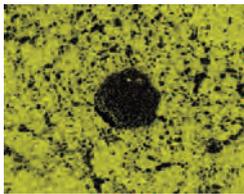
(a) 顕微鏡画像



(b) 二次電子像



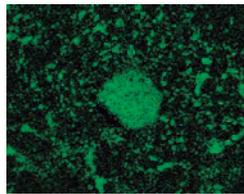
(c) 反射電子像



Au



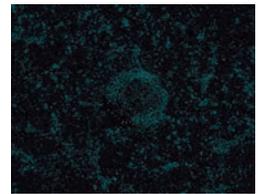
Ag



Bi



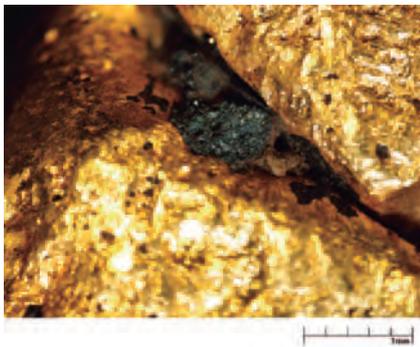
Si



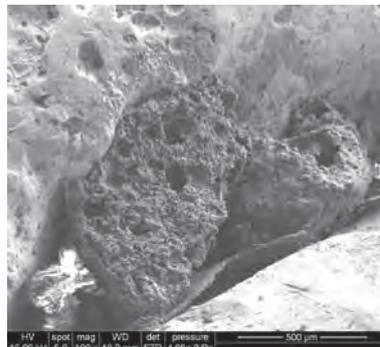
Te

(d) EDXマッピング

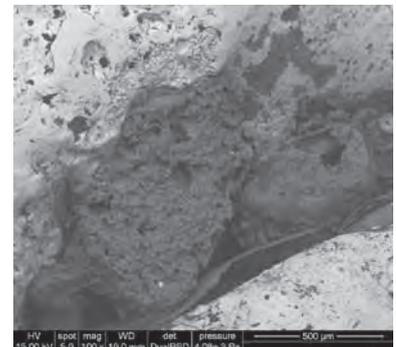
写真8 資料05不純物周辺の顕微鏡画像とSEM像（二次電子、反射電子）、EDXマッピング



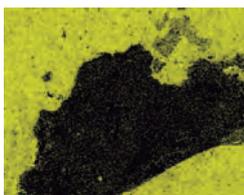
(a) 顕微鏡画像



(b) 二次電子像



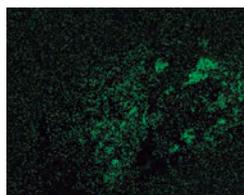
(c) 反射電子像



Au



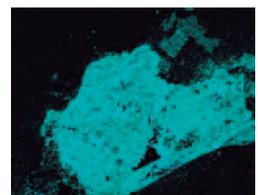
Ag



As



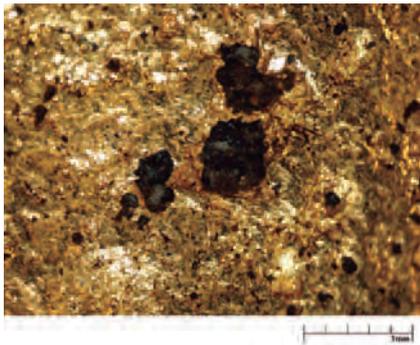
Si



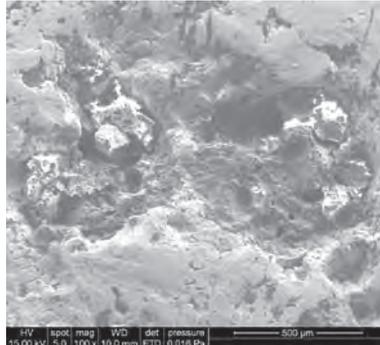
Fe

(d) EDXマッピング

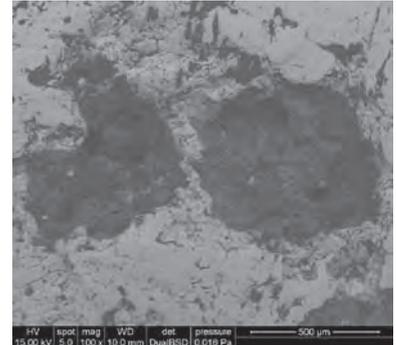
写真9 資料06不純物周辺の顕微鏡画像とSEM像（二次電子、反射電子）、EDXマッピング



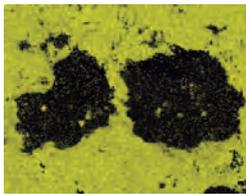
(a) 顕微鏡画像



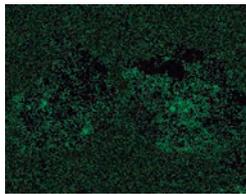
(b) 二次電子像



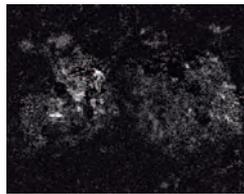
(c) 反射電子像



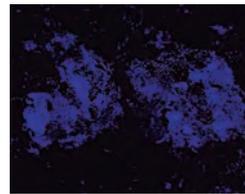
Au



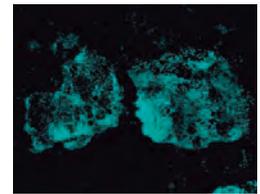
Bi



Ca



Si



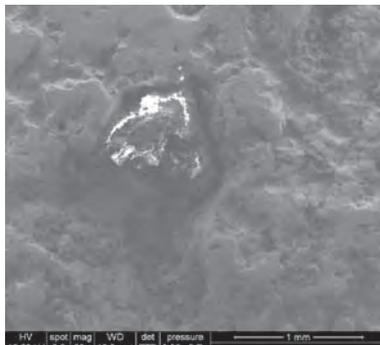
Fe

(d) EDXマッピング

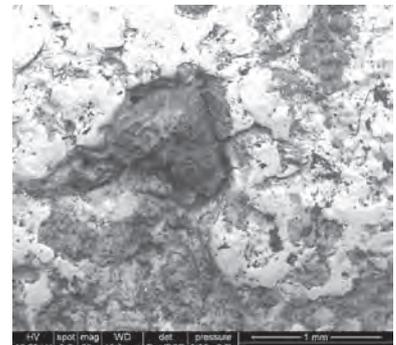
写真10 資料07不純物周辺の顕微鏡画像とSEM像（二次電子、反射電子）、EDXマッピング



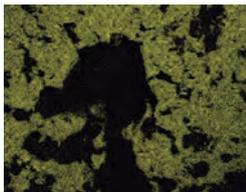
(a) 顕微鏡画像



(b) 二次電子像



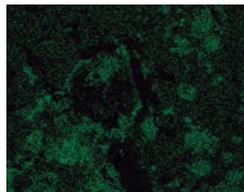
(c) 反射電子像



Au



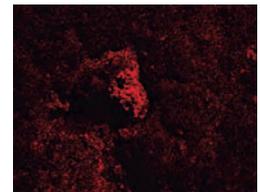
Ag



Bi



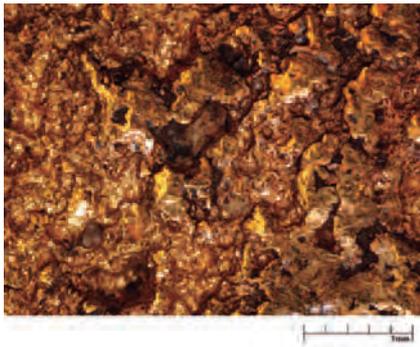
Si



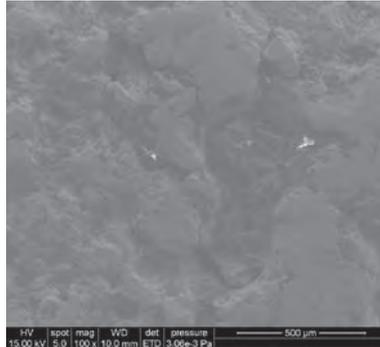
Al

(d) EDXマッピング

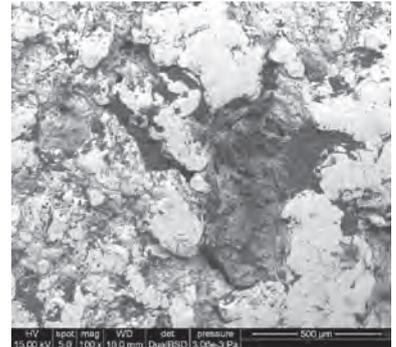
写真11 資料08不純物周辺の顕微鏡画像とSEM像（二次電子、反射電子）、EDXマッピング



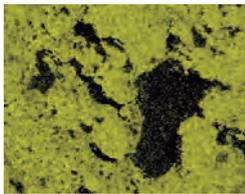
(a) 顕微鏡画像



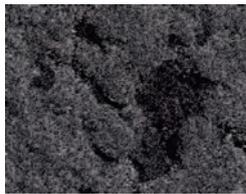
(b) 二次電子像



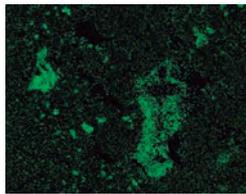
(c) 反射電子像



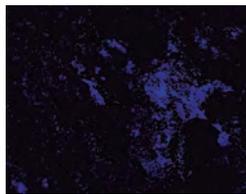
Au



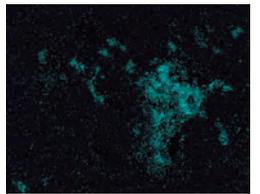
Ag



Bi



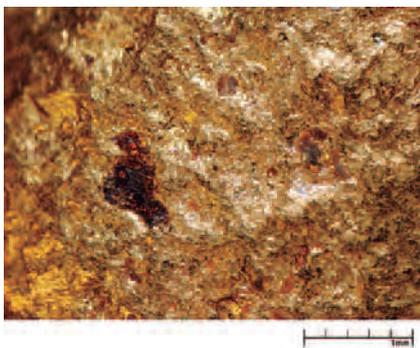
Si



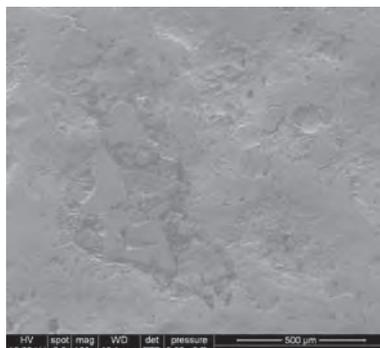
Fe

(d) EDXマッピング

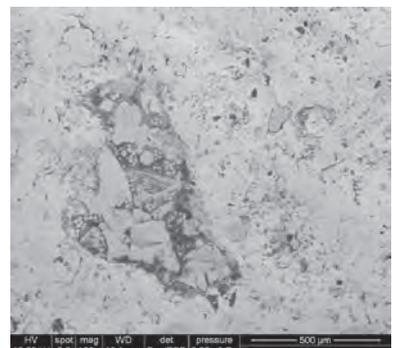
写真12 資料09不純物周辺の顕微鏡画像とSEM像（二次電子、反射電子）、EDXマッピング



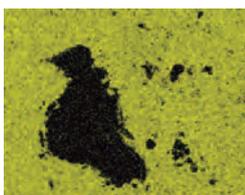
(a) 顕微鏡画像



(b) 二次電子像



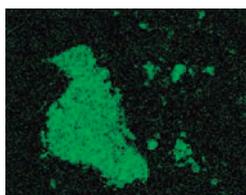
(c) 反射電子像



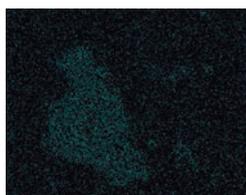
Au



Ag



Bi



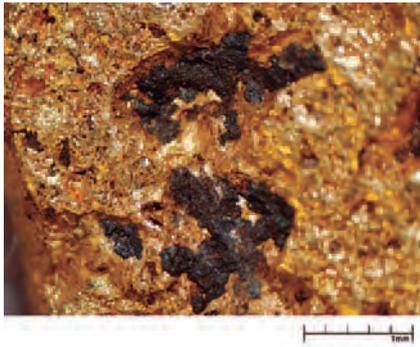
Pb



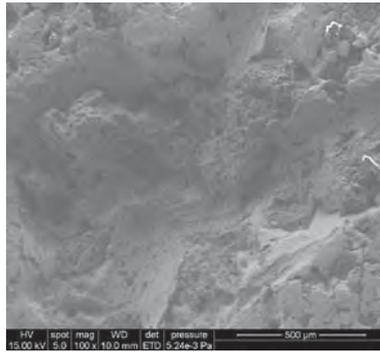
Fe

(d) EDXマッピング

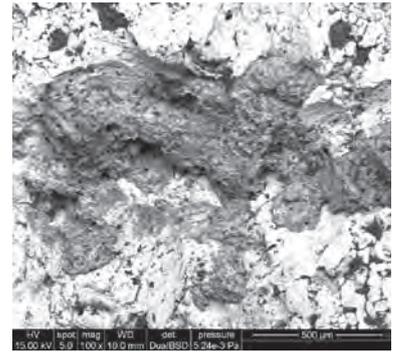
写真13 資料10不純物周辺の顕微鏡画像とSEM像（二次電子、反射電子）、EDXマッピング



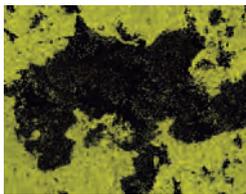
(a) 顕微鏡画像



(b) 二次電子像



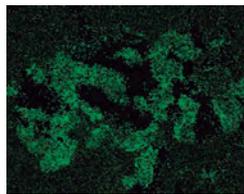
(c) 反射電子像



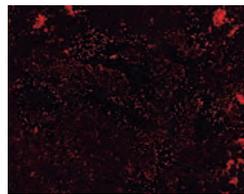
Au



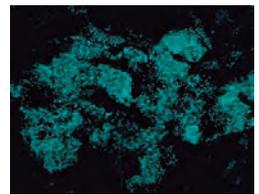
Ag



Bi



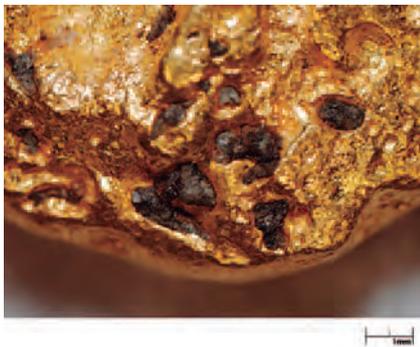
Al



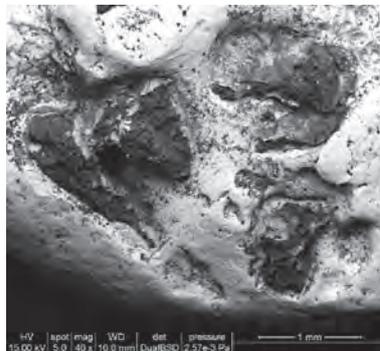
Fe

(d) EDXマッピング

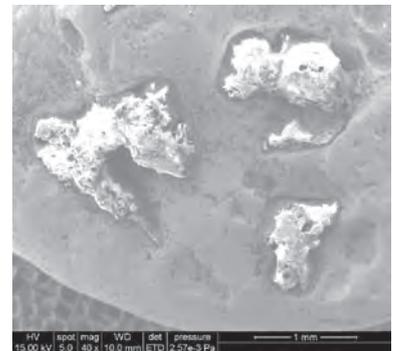
写真14 資料11不純物周辺の顕微鏡画像とSEM像（二次電子、反射電子）、EDXマッピング



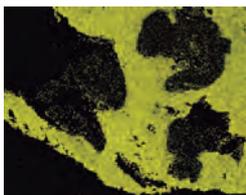
(a) 顕微鏡画像



(b) 二次電子像



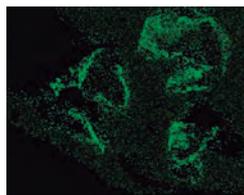
(c) 反射電子像



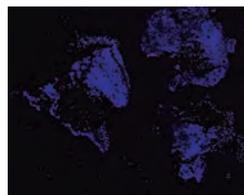
Au



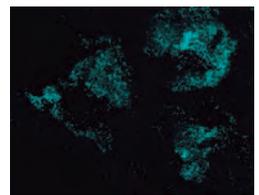
Ag



Bi



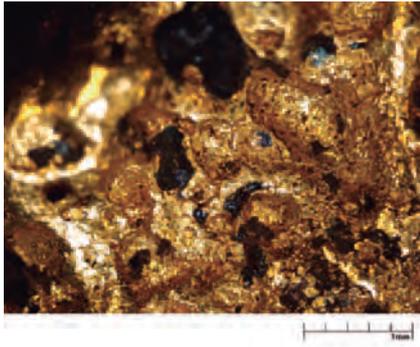
Si



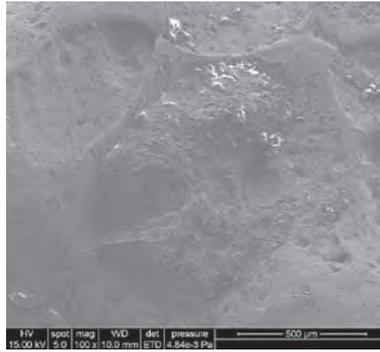
Fe

(d) EDXマッピング

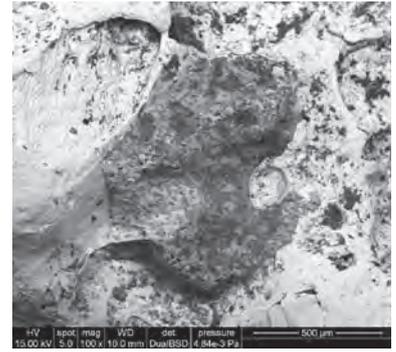
写真15 資料12不純物周辺の顕微鏡画像とSEM像（二次電子、反射電子）、EDXマッピング



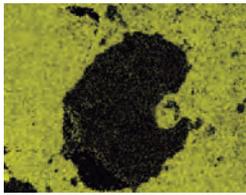
(a) 顕微鏡画像



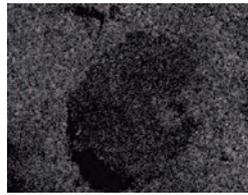
(b) 二次電子像



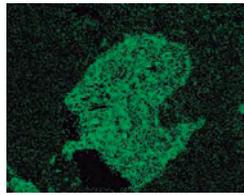
(c) 反射電子像



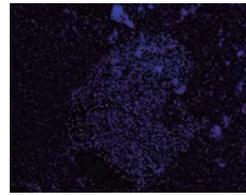
Au



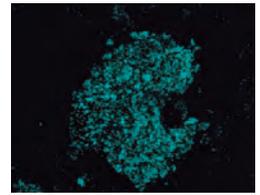
Ag



Bi



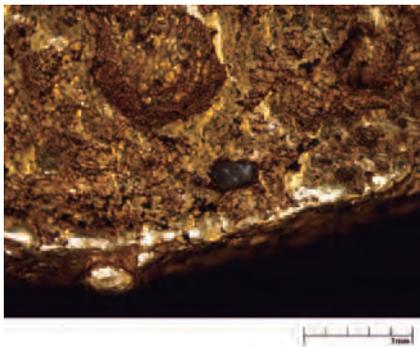
Si



Fe

(d) EDXマッピング

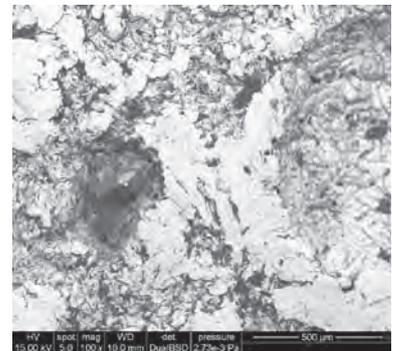
写真16 資料13不純物周辺の顕微鏡画像とSEM像（二次電子、反射電子）、EDXマッピング



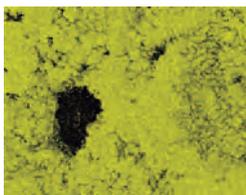
(a) 顕微鏡画像



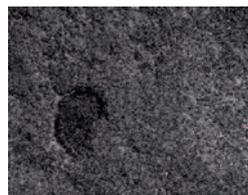
(b) 二次電子像



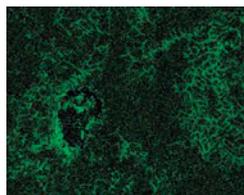
(c) 反射電子像



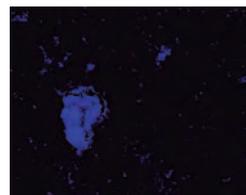
Au



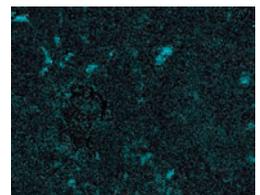
Ag



Bi



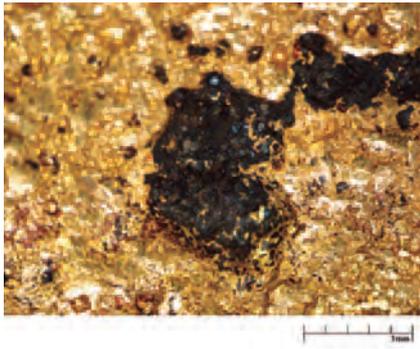
Si



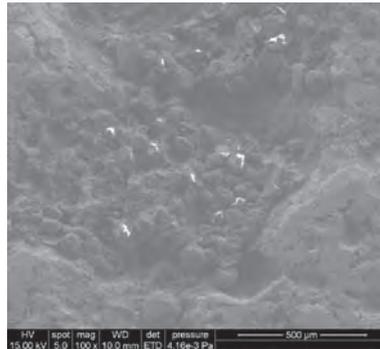
Fe

(d) EDXマッピング

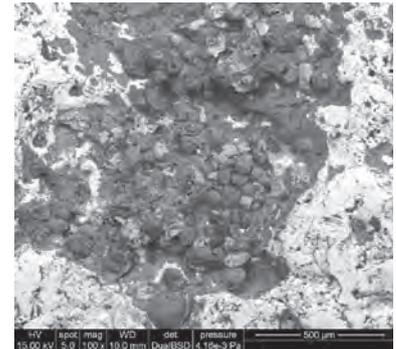
写真17 資料14不純物周辺の顕微鏡画像とSEM像（二次電子、反射電子）、EDXマッピング



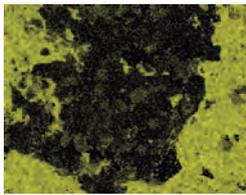
(a) 顕微鏡画像



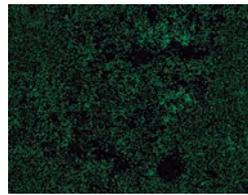
(b) 二次電子像



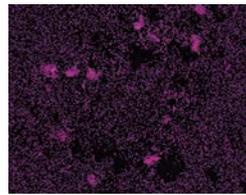
(c) 反射電子像



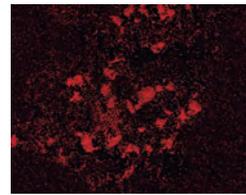
Au



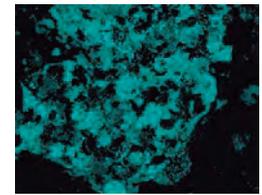
Bi



Th



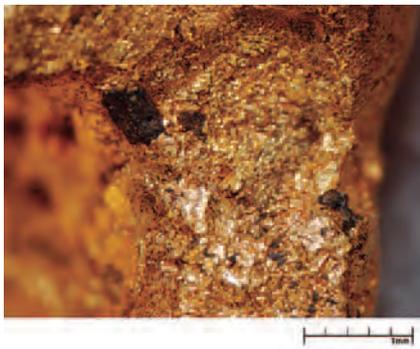
W



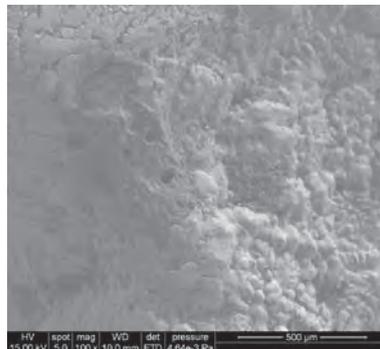
Fe

(d) EDXマッピング

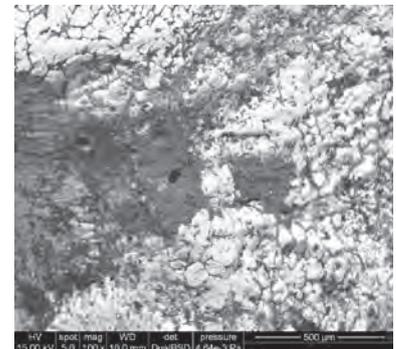
写真18 資料15不純物周辺の顕微鏡画像とSEM像（二次電子、反射電子）、EDXマッピング



(a) 顕微鏡画像



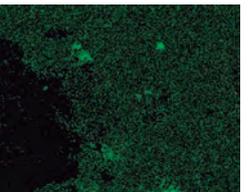
(b) 二次電子像



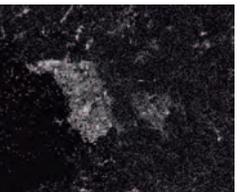
(c) 反射電子像



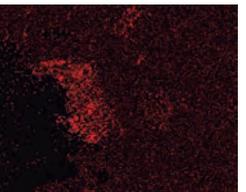
Au



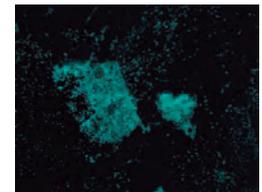
Bi



Ca



W



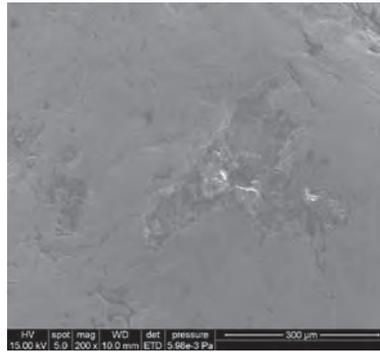
Fe

(d) EDXマッピング

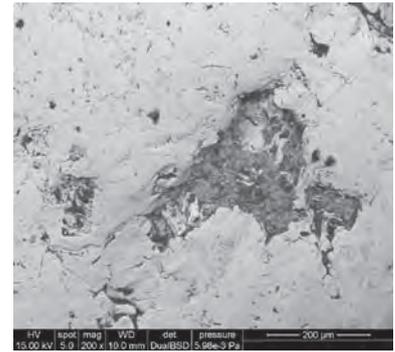
写真19 資料16不純物周辺の顕微鏡画像とSEM像（二次電子、反射電子）、EDXマッピング



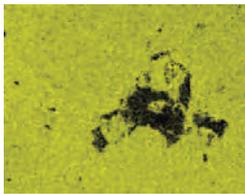
(a) 顕微鏡画像



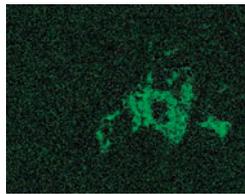
(b) 二次電子像



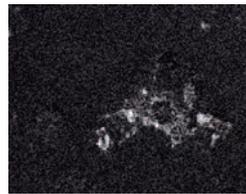
(c) 反射電子像



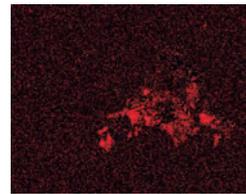
Au



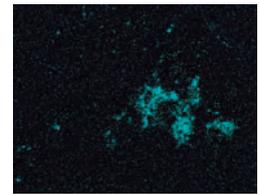
Bi



Ca



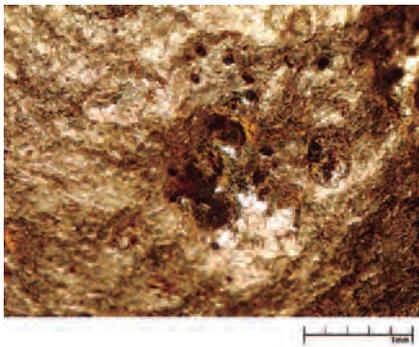
W



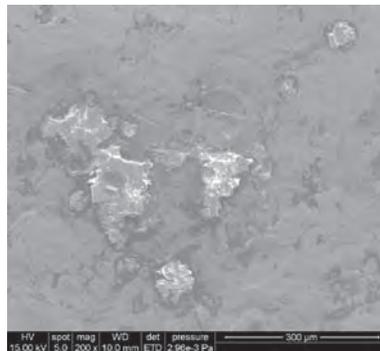
Fe

(d) EDXマッピング

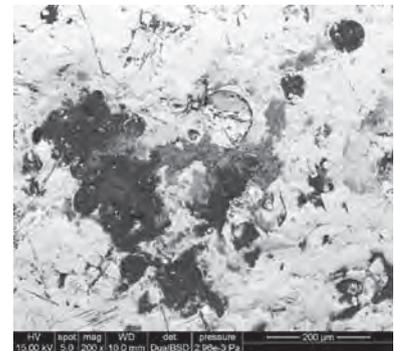
写真20 資料17不純物周辺の顕微鏡画像とSEM像（二次電子、反射電子）、EDXマッピング



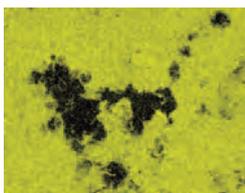
(a) 顕微鏡画像



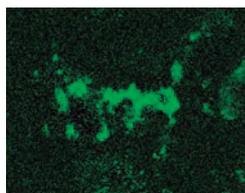
(b) 二次電子像



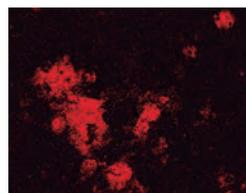
(c) 反射電子像



Au



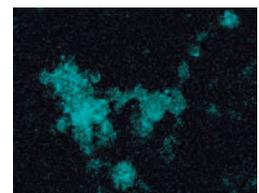
Bi



Al



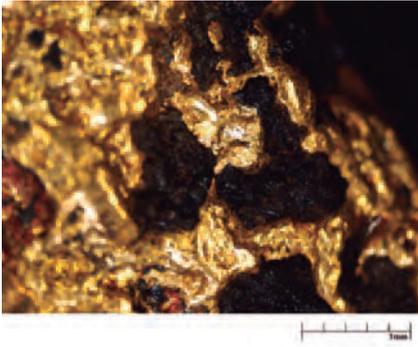
Si



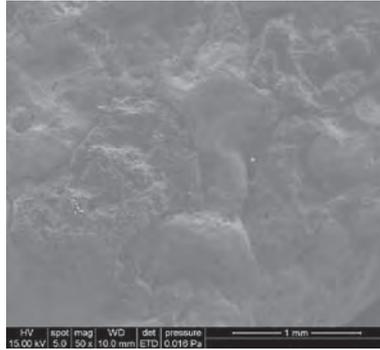
Fe

(d) EDXマッピング

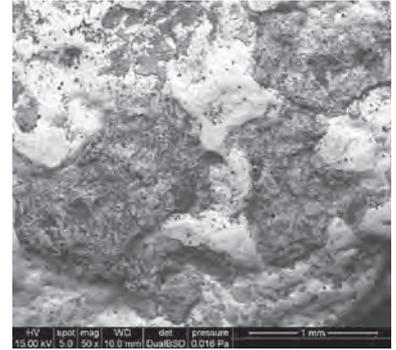
写真21 資料18不純物周辺の顕微鏡画像とSEM像（二次電子、反射電子）、EDXマッピング



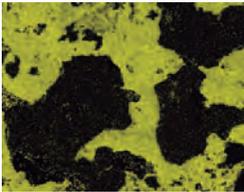
(a) 顕微鏡画像



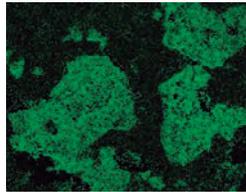
(b) 二次電子像



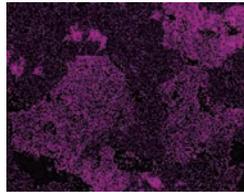
(c) 反射電子像



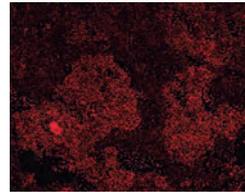
Au



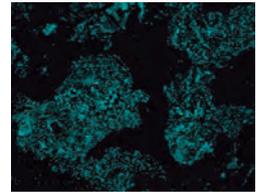
Bi



Pb



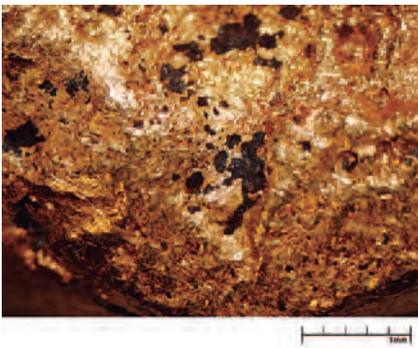
Te



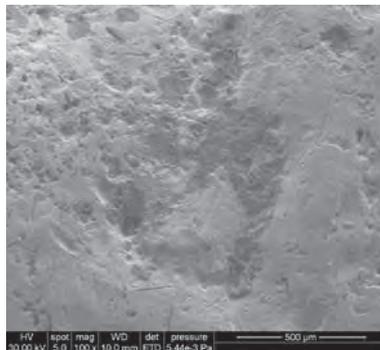
Fe

(d) EDXマッピング

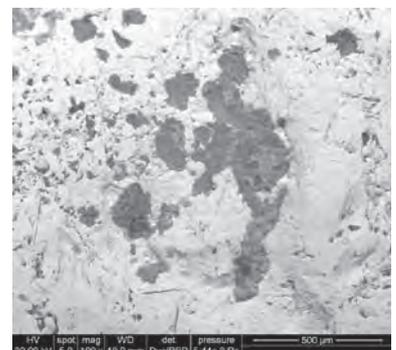
写真22 資料19不純物周辺の顕微鏡画像とSEM像（二次電子、反射電子）、EDXマッピング



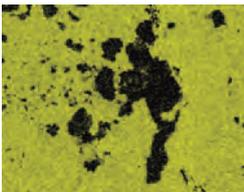
(a) 顕微鏡画像



(b) 二次電子像



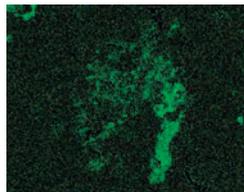
(c) 反射電子像



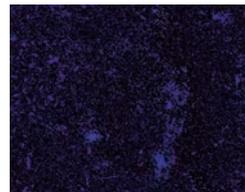
Au



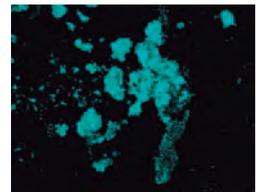
Ag



Bi



Si



Fe

(d) EDXマッピング

写真23 資料20不純物周辺の顕微鏡画像とSEM像（二次電子、反射電子）、EDXマッピング

序 文

甲州金は、江戸時代の貨幣制度にも大きな影響を与えると同時に、甲斐国独自の貨幣制度として江戸期を通して継承されました。この貨幣制度の基盤は、戦国期における武田氏の時代までさかのぼると言われております。特に黒川金山や中山金山などの山金の採掘、加工は、当時の大名の領国経営においても、欠くことのできない重要施策であったに違いありません。しかし、戦国期における金の採掘から生産、金貨や金製品の製作までの過程は、いまだに断片的な情報に限られ、その実態はまだ十分に解明されておられません。福寺遺跡は、これらの歴史的課題を解明する意味で、日本国内においても極めて重要な遺跡と考えられます。

福寺遺跡は、昭和46（1971）年に畑の耕作中に偶然発見された20点の金貨と6千枚もの渡来銭貨によってにわかに注目を集めた遺跡です。その後、出土品は長らく大切に保管されてきました。山梨県立博物館では、平成21（2009）年の企画展『黄金の国ジパングと甲斐金山』展の開催にあたり、所蔵者から公開のご理解をいただき、はじめて広く県内外の方々にこれらの資料を紹介することができました。また、それがご縁となり、それらを山梨県立博物館の歴史資料として譲渡いただくことができました。

本調査は、この埋蔵銭貨の出土地点や出土状況を再確認するため、平成24年度～25年度の国宝重要文化財等整備費補助金の交付を受けて実施したものであります。調査の結果、埋蔵銭貨の出土地点や層位などに関する情報が得られ、部分的ながら遺跡の様相が明らかになった点は、一つの成果と言えます。

この調査成果が、多くの方々に活用され、新たな歴史像の構築に寄与することができれば幸甚です。最後に本調査に御協力をいただきました金井正美氏に厚く御礼を申し上げます。

山梨県立博物館

館長 平川 南

例 言

1. 本書は、山梨県甲州市勝沼町上岩崎662に所在する福寺遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、昭和46年に発見された埋蔵金貨及び渡来銭貨の発見場所の状況確認を行うための学術調査であり、平成24年度～25年度の国宝重要文化財等整備費補助金を受けて、山梨県立博物館が発掘調査及び整理作業にあたった。
3. 調査の期間及び面積、整理期間は以下の通りである。
調査期間 平成24年11月15日～12月15日
調査面積 70㎡
整理期間 平成25年2月9日～3月24日
平成25年6月1日～平成26年2月27日 遺物・遺構の整理作業の実施
4. 本書の編集は中山誠二が行い、執筆は第1章～第5章、第7章を中山、第6章を沓名貴彦が行った。
5. 調査に伴う基準点測量および設置はシン技術コンサルに委託した。
6. 本書に関わる記録図面、写真、出土遺物等は、山梨県立博物館が保管している。
7. 本遺跡の発掘調査および整理作業にあたっては、以下の諸機関、各位からご指導・ご協力をいただいた。ここに記して感謝の意を表する。
甲州市教育委員会、山梨県埋蔵文化財センター、網倉邦生、飯島泉、入江俊行、小野正文、金井正美、谷口一夫、萩原三雄、室伏徹、森原明廣

凡 例

1. 遺跡全体におけるX・Y座標は、世界測地系第Ⅷ系の $X = -37900.00$ 、 $Y = 20800.00$ （北緯35度39分29秒、東経138度43分47秒）を基点（ $X = 0$ 、 $Y = 0$ ）とした座標値である。グリッドの基点は北西端部にあり、北から南にアルファベットA～O、西から東に数字1～25を付してグリッド番号とする。調査区は、A～J-010～021グリッドの範囲に入る。
2. 遺構・遺物の縮尺は、原則として以下の通りである。
遺構 ピット、土坑 1/30
遺物 土器・陶磁器 1/3
石製品 1/3 及び1/2
金貨 2/3
埋蔵銭貨 1/2
3. 遺構図版中の色調名は、農林水産省水産技術会議事務局監修 1990『新版 標準土色帖』による。

目 次

序文

例言

目次

第1章 遺跡の立地と環境	7
第2章 調査の概要	8
第3章 遺構	11
第4章 出土遺物	20
第5章 既存の福寺遺跡出土銭貨	25
第6章 蛭藻金、碁石金の科学調査	55
第7章 まとめ	60
図版	63

第1章 遺跡の立地と環境

福寺遺跡は山梨県甲州市勝沼町上岩崎地内に所在する遺跡である（第1図）。

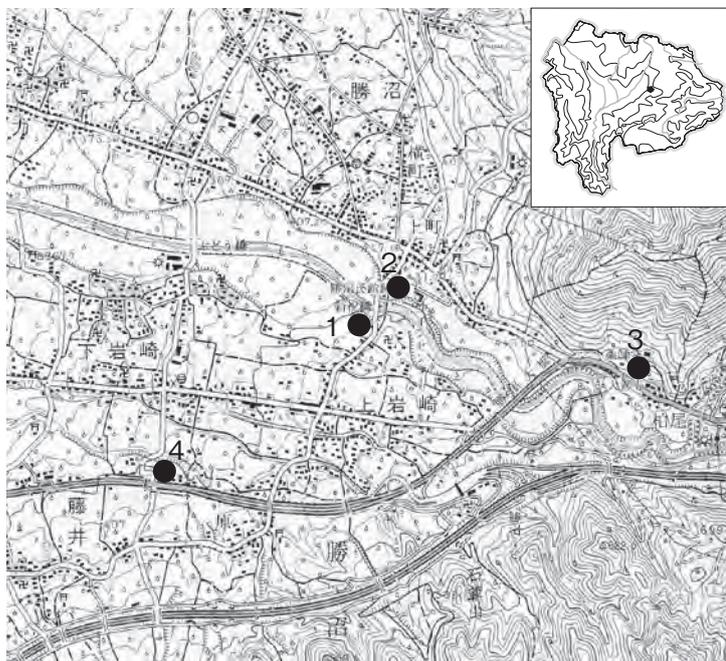
周辺地域は甲府盆地東端部にあたり、東に秩父山地、南に御坂山地の峰々が連なる山岳地帯が迫る。また、大菩薩峠に源を発する日川が西流して甲府盆地へと流れ出て、扇状地を形成している。日川扇状地は大善寺の西付近を頂点とし、南は甲州市勝沼町下岩崎、上岩崎の坂下川を挟み京戸川扇状地と接し、北は勝沼町小佐手、休息の田草川を挟み鬢櫛川扇状地と接している。遺跡はこの日川左岸の河岸段丘面に位置し、標高410メートルの地点に立地する。この地は古くから交通の要衝とされ、近世の甲州道中もこの地域を通り、笹子峠を越えて、大月や関東方面へと繋がっていた。

日川を挟んで遺跡の対岸には、国史跡勝沼氏館跡が位置する。この館跡は戦国時代に武田信虎の弟にあたる勝沼五郎信友によって営まれた館跡で、堀と土塁によって囲まれた内郭部とその外側の外郭部によって構成される。内郭の規模は、東西90m、南北70mで、南面と西面は日川の急崖、東面と北面は土塁と堀によって区画されている。勝沼氏館は信友の息子信元の段階で終焉を迎えており、戦国期のごく短期間に営まれた館の構造を知ることができる遺跡として、国史跡に指定されている。

日川扇状地の扇頂部にある大善寺は、弘安9（1285）年立柱の本堂建築をもつ。寺の創建は古く、建久八年（1197）十月の柏尾大衆等解案では「（当寺）伽藍者、創建以来三百余歳」、嘉禄二年（1226）の関東下知状案では「当寺建立之後、経四百歳」と記載され、平安時代前期の九世紀にまでさかのぼると考えられている。本堂内部の厨子内には、平安時代前期の薬師三尊像が本尊として安置される。古代の柏尾山寺の規模は不明であるが、文永七年（1270）、建武三年（1336）の火災で、大善寺をはじめ、常行堂、浄瑠璃寺、如法道場、五智如来塔、鐘楼堂、三重大塔、二階楼門、一切経宝蔵、去垢屋、温室、鎮守五所権現宝殿・拜殿などが焼失していることから、山内に多くの伽藍が立ち並んでいたことが知られる。

福寺遺跡の南西にある岩崎には、武田信光の子信隆を祖とし、寛正2（1461）年跡部氏との戦いで滅んだとされる岩崎氏館跡がある。坂下川を北の守りとし、三方に二重堀を巡らした方1町ほどの館である。

以上のように中世においては、甲府盆地の東を守護する要の地として、寺院や館などが造営された重要な地域である。



- 1 福寺遺跡
- 2 勝沼氏館跡
- 3 大善寺
- 4 岩崎氏館跡

第1図 遺跡の位置図（1/25000）

第2章 調査の概要

第1節 遺跡発見から調査に至る経緯

本遺跡は、昭和46（1971）年に勝沼町上岩崎地内の葡萄畑から金貨と渡来銭が発見されたことで、注目された。発見の経緯は、葡萄園経営者が葡萄の深耕法栽培のために土中にタコツボを掘り、有機質を入れる作業中のこととされる。同年4月1日に深さ1メートルから古銭約6千枚が出土し、さらに5月5日に直径2cmの金塊18個と、長さ5cm、幅2.3cmの小判型の金2枚が発見された。この時の概要は、5月9日（日曜日）版の山梨日日新聞で記事が掲載されている（第2図）。

金貨の出土地点の周囲からは石列が見られることから、建物の礎石などが想定されていた。また、古銭は金貨から2～3m離れた場所から出土し、千枚ずつ一列に並べられていたという。

県埋蔵文化財センターが、平成13～15（2001～2003）年度の3年間に渡り「埋蔵銭貨出土遺跡詳細分布調査」を実施した際に、本遺跡から出土した古銭の一部が調査されている。

その後、県立博物館において当該資料の購入に向けて所蔵者と交渉を行い、平成23（2011）年7月28日の県立博物館第13回資料情報委員会において付議したところ、資料取得の答申がなされた。さらに、同年の9月県議会に購入案件として掲げ、10月7日付けで購入が可決され、同博物館で取得を行った。

その後、同資料の出土地点と出土状況などを再確認するため、文化庁に国宝重要文化財等整備費補助金の交付申請を行い、平成24～25年度において発掘調査が認められた。

第2節 調査手続き

平成24年11月12日 文化財保護法99条第1項により、発掘調査に関する報告を甲州市教育委員会、県教育委員会に提出

平成24年11月15日～12月15日 発掘調査の実施

平成24年12月20日 埋蔵文化財の発見届けを提出

平成24年12月25日 発掘調査の終了報告を県教育長、甲州市教育委員会に提出

平成25年2月9日～3月24日 遺構・遺物の整理作業

平成25年3月24日 実績報告書を県教育委員会に提出

平成25年6月1日～平成26年2月27日 遺物・遺構の整理作業の実施

第3節 調査体制

調査主体 山梨県立博物館

調査担当者 中山誠二(山梨県立博物館学芸課長)、高野玄明(企画交流課長)、植月 学(学芸員)

発掘調査参加者 調査員 坂本美夫

作業員 栗原礼子、佐藤正和、土屋晴子、萩原里江子、深沢茂子

整理作業員 梶原初美、望月厚子、斉藤律子、栗原礼子、正木なつ子

第4節 調査の方法

調査対象区内に4カ所トレンチを設定して調査を行った（第3図）。調査区全域が個人宅の葡萄畑の中

第3章 遺構

(1) 第1トレンチ (第4図)

調査区の西側のD-014～E-014グリッドに長さ3.3m、幅2.9mのトレンチを設定した。地表下40cmで、花崗岩の巨礫を含む地山層が確認された。また、トレンチ東側に直径1mほどの攪乱坑が認められた。

(2) 第2トレンチ (第5・6図)

調査区中央部のF-017～G-017グリッドに長さ4.5m、幅3.8mのトレンチを設定した。

第2トレンチでは、耕作土の下層に暗褐色砂質土が30cmほどの厚さで堆積し、さらに下層に明黄褐色の粗砂及び巨礫が混在する層が認められる。第2トレンチの土層観察では、第2層からピットが掘り込まれ7層上面で検出ができることから、第2層が中世以降の遺物包含層、第7層は自然堆積層であると考えられる。第2層下に遺構が掘り込まれる。

① SK 1

トレンチの北西で確認された。長さ110cm、幅85cmの楕円形の土坑で、地表面から深さ65cmの掘り込みが認められる。内部からは自然木の断片や焼土が確認され、土坑内で葡萄の木などを燃焼して埋めた攪乱坑と考えられる。

② SK 2

トレンチの北東隅で確認された。現存長130cm、幅120cmの楕円形の土坑で、地表面から深さ80cmの掘り込みが認められる。SK1同様に下部から焼土を含む炭化物層が認められた。

③ SK 3

トレンチの南西隅で確認された。現存部で直径120cmの円形に近い土坑で、地表面から深さ70cmの掘り込みが認められる。

④ SK 4

トレンチの南側で確認された。長さ270cmの不整楕円形を呈し、地表から70cmほどの掘り込みが認められた。内部から空き缶やビニール類が検出された。

⑤ Pit. 1

トレンチの東側中央部で確認された。直径30cm、深さ20cmほどの小ピットである。

⑥ Pit. 2

トレンチの中央部よりやや東側で確認された。直径30cm、深さ30cmほどの小ピットである。

⑦ Pit. 3

トレンチの中央部よりやや西側で確認された。長さ50cm、幅25cmのひさご形を呈し、深さ28cmである。

⑧ Pit. 4

Pit.3の西側から検出された。直径20cm、深さ17cmほどの小ピットである。

⑨ Pit. 5

Pit.3の北側から検出された。直径15cm、深さ15cmほどの小ピットである。

⑩ Pit. 6

トレンチ北西部から検出された。長さ50cm、幅30cm、深さ35cmの不整楕円形の小穴である。

⑪ Pit. 7

Pit.6の南側から検出された。推定長約50cm、幅35cm、深さ30cmの楕円形の小穴である。2層下面から掘り込まれ、黒褐色土と暗褐色砂質土がピットを埋めている。

⑫ Pit. 8

トレンチ北東部から検出された。直径20cm、深さ25cmの小穴である。

⑬ Pit. 9

Pit.8に接して検出された。直径20cm、深さ25cmの小穴である。

⑭ Pit.10

トレンチ北側から検出された。直径10cm、深さ15cmの小穴である。

⑮ Pit.11

Pit.8、Pit.9に重複して確認された。長さ60cm、幅50cm、深さ20cmの小穴である。2層下面から掘り込まれ、黒褐色土と暗褐色砂質土がピットを埋めている。

以上のように、SK 1～SK 4は表土直下から掘り込まれる攪乱坑で、Pit.1～5、8～10は植物根跡または植物擾乱と考えられる。

トレンチ北側から検出されたPit.6、7、11は、断面観察では2層下面から掘り込まれ、黒褐色土と暗褐色砂質土がピットを埋めている。しかし、これらの遺構としての性格は不明である。

(3) 第3トレンチ (第7図)

D-020グリッドに長さ270cm、幅110cmのトレンチを設定した。地表下40cmで、地山層から突出した花崗岩の巨礫が認められる。遺構は検出されなかった。

(4) 第4トレンチ (第8～10図)

B-19・20グリッド、C-20グリッドに渡りL字型のトレンチを設定した。トレンチからは土坑3カ所、ピット2カ所が検出された。第1層～2層は、耕作のための客土層と考えられる。

① SK 1

トレンチ南西部に認められた長さ214cm、幅100cm、深さ42cmの隅丸長方形の土坑で、調査区西側にさらに続く。第2層下面から掘り込まれ第5～6層中におよぶ。土坑内部からビニールやガラスが認められることから、攪乱坑と判断される。

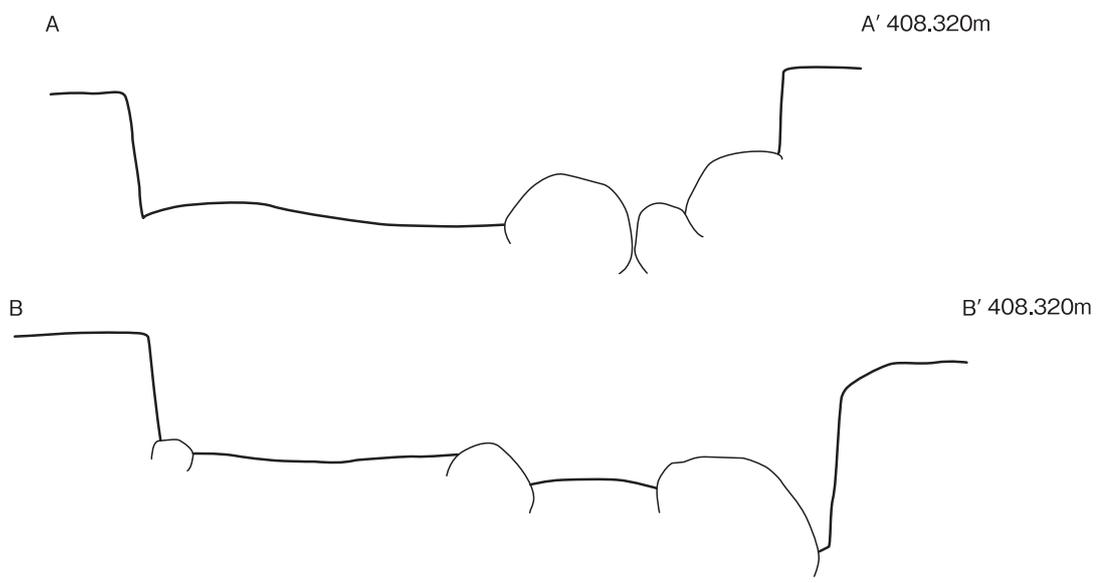
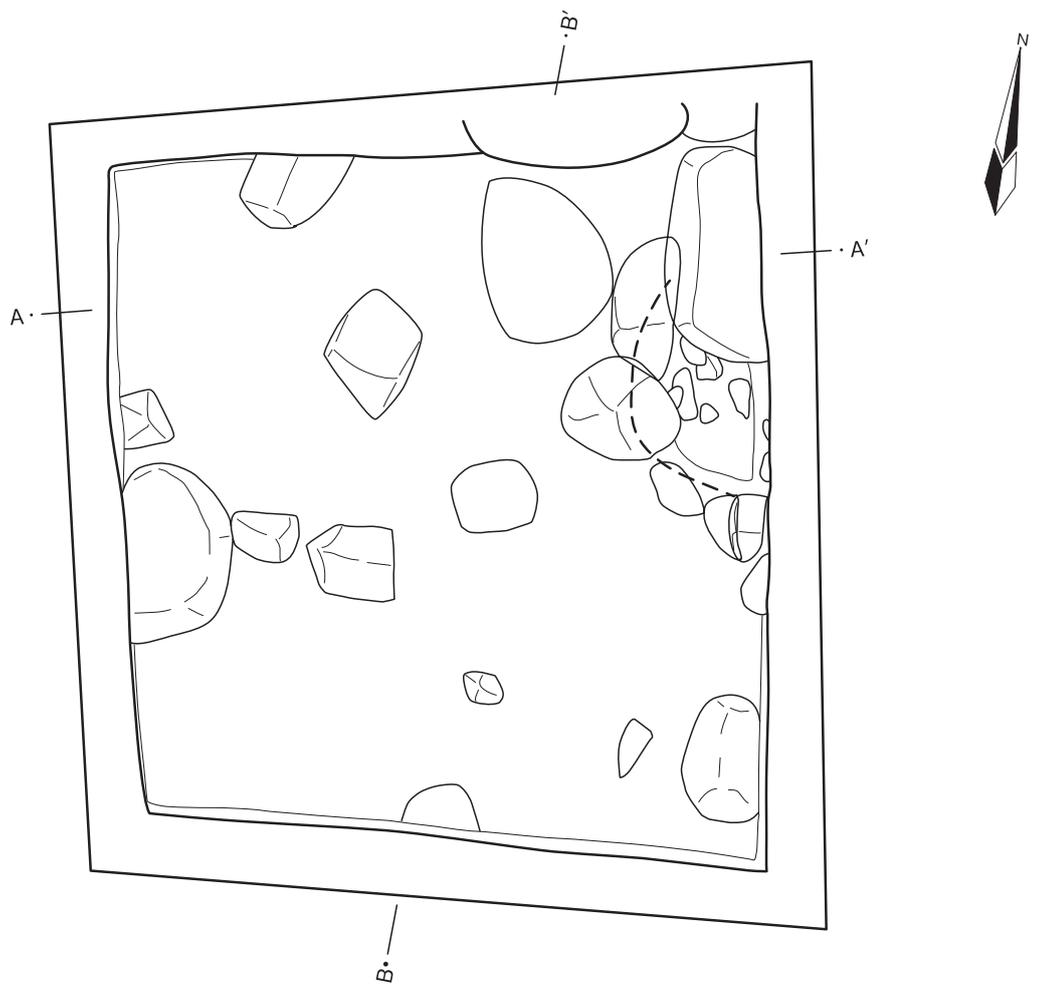
② SK 2

トレンチ東側にある長さ150cm、幅約100cmの楕円形を呈する土坑で、さらに断面東側に展開している。表土直下から85cm程度の掘り込みが認められ、土坑底面からガラス製瓶などが出土している。断面観察から2回にわたって掘削された攪乱坑と見られる。土坑上面から渡来銭貨が1点出土していることから、昭和46(1971)年に古銭が出土した地点またはそれに近接する地点と判断される(第2図)。

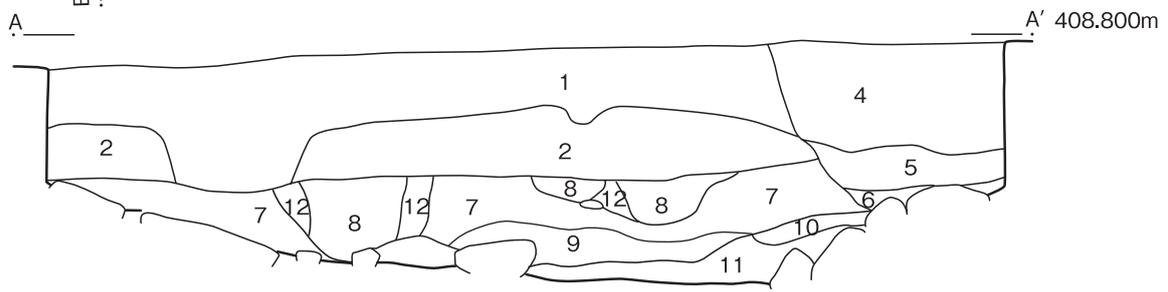
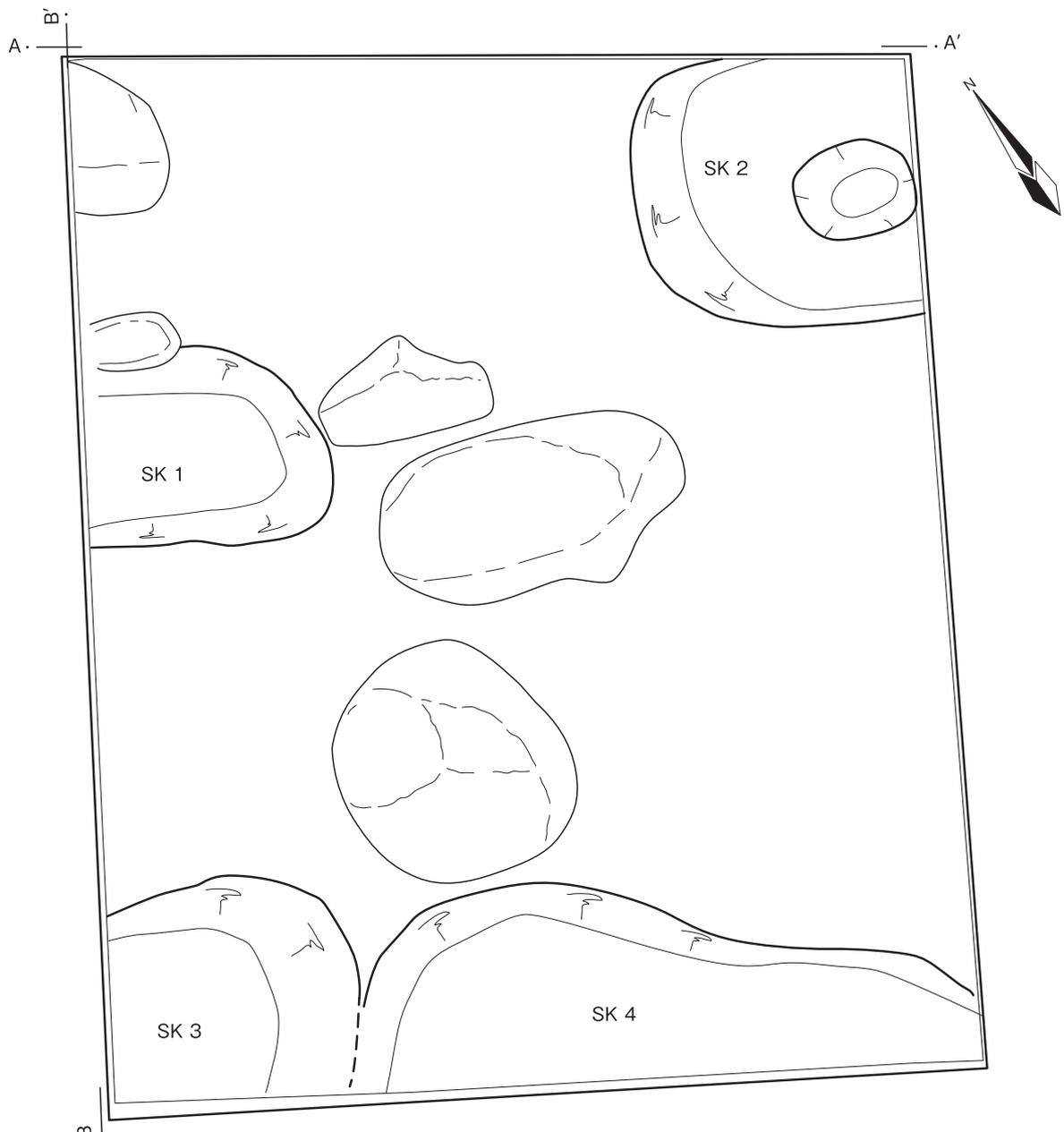
③ SK 3

トレンチ北西部に一辺100cm、地表からの深さ120cmほどの隅丸の土坑が確認された。第6層下部から大小の礫が多量に認められ、その下層には黒色砂質土が堆積する。土坑の西から南の側面にかけては直径5～20cmほどの礫が巡り、南東隅には長さ100cmほどの花崗岩の巨礫が横たわる。土坑底面はやや北側に向けて低く傾斜している。

この地点は1971年に金貨が出土したとされ、発見当時は黒色土の中に石列のような部分があったと



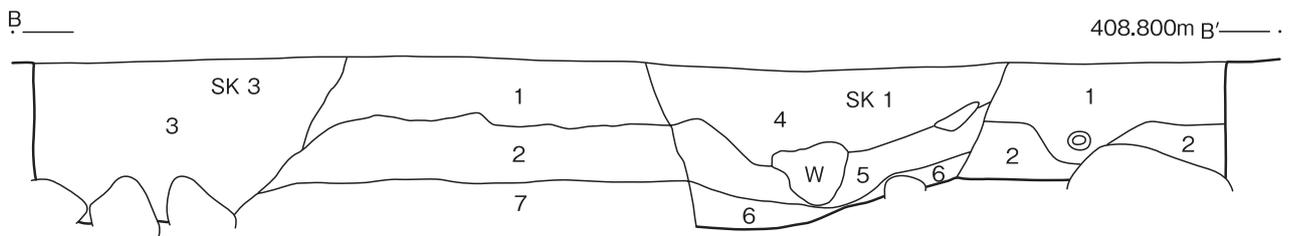
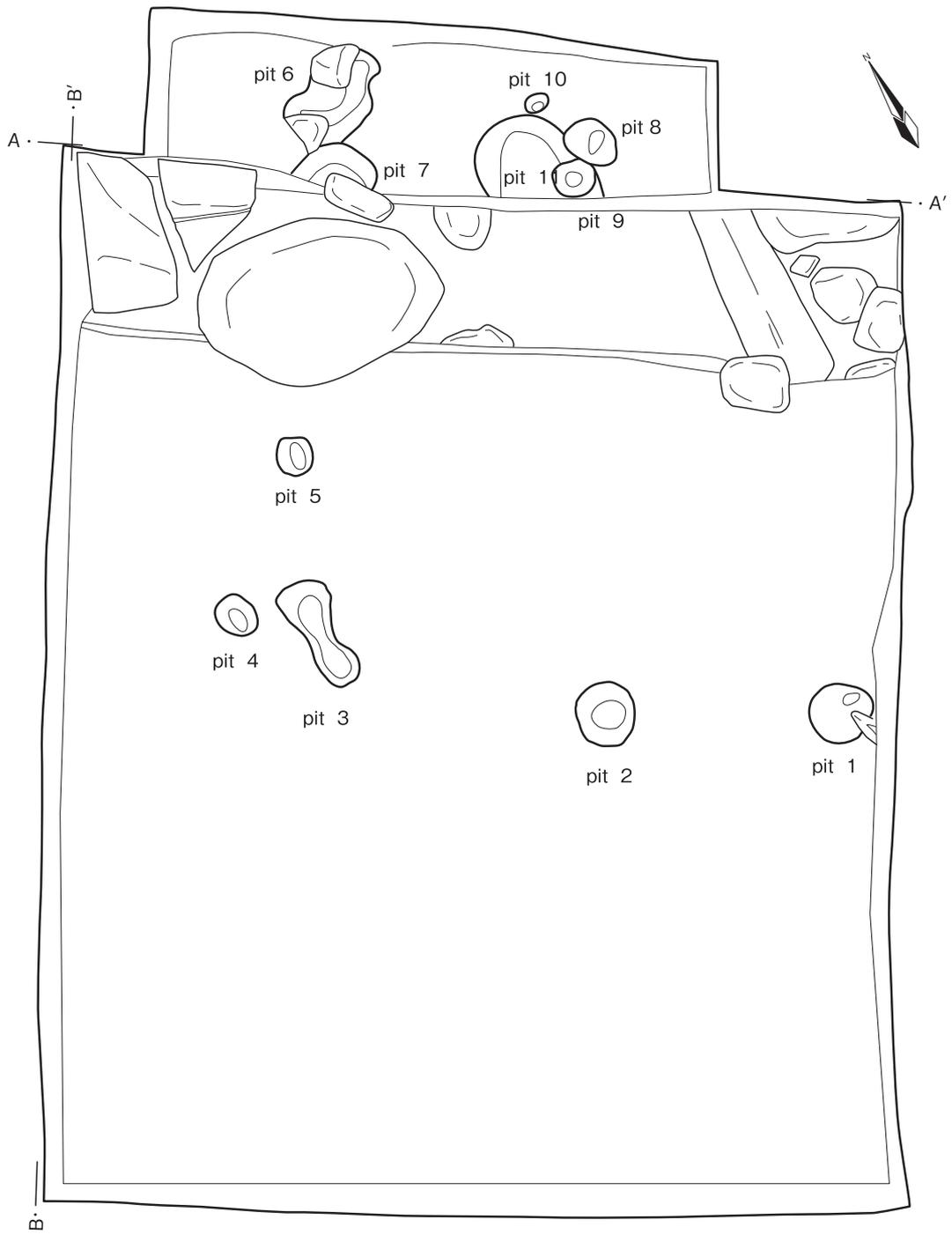
第4図 第1トレンチ



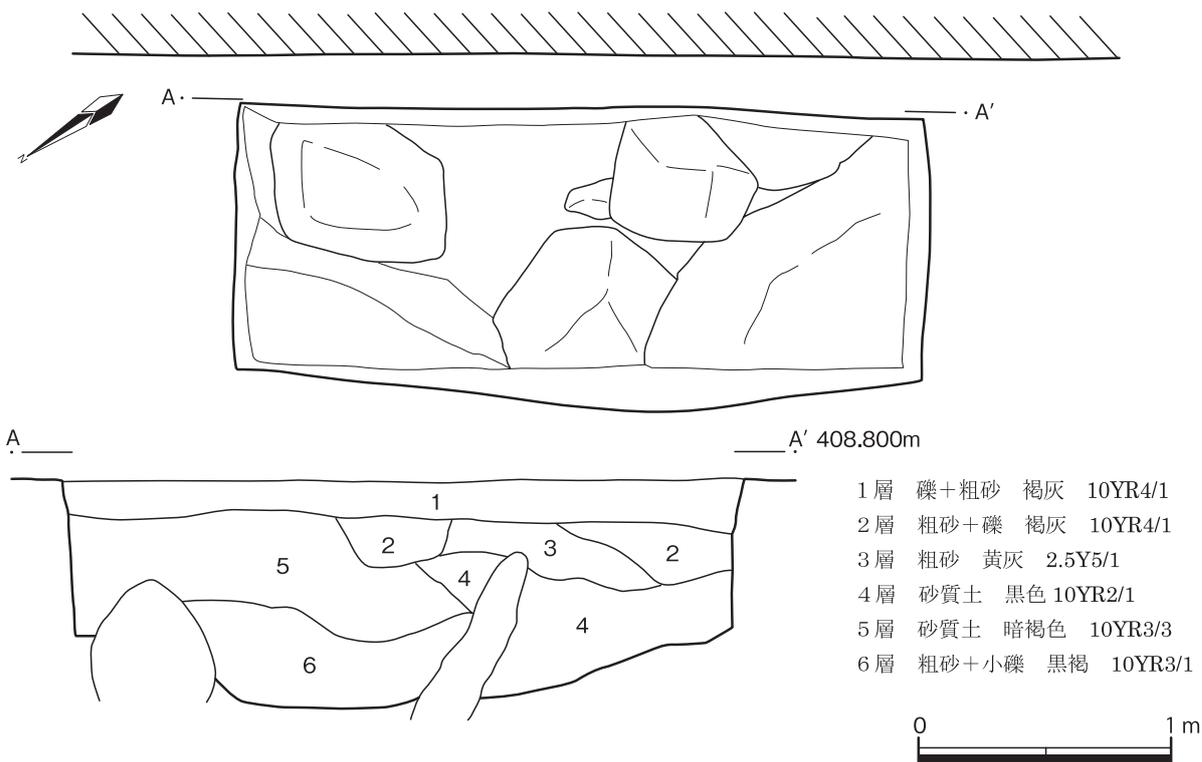
- | | |
|---------------------------------|--------------------------------|
| 1層 中砂+細礫 (耕作土) 褐灰 10YR4/1 | 7層 粗砂+花崗岩巨礫 明黄褐 2.5Y6/6 |
| 2層 砂質土 暗褐色 10YR3/3 | 8層 砂質土 黒褐色+黄褐色 2.5Y3/3+2.5Y5/4 |
| 3層 粗砂+小礫 黒褐色 10YR3/1 | 9層 粗砂 オリーブ褐 2.5Y4/3 |
| 4層 粗砂 灰褐色 10YR4/2 | 10層 粗砂 暗黄褐色 2.5Y4/3 |
| 5層 炭化層 焼土を含む | 11層 砂礫 明黄褐色 2.5Y6/6 |
| 6層 粗砂 明黄褐色+褐灰 2.5Y6/6 + 10YR4/2 | 12層 砂質土 暗褐色 10YR3/3 |

第5図 第2トレンチ





第6図 第2トレンチ



第7図 第3トレンチ

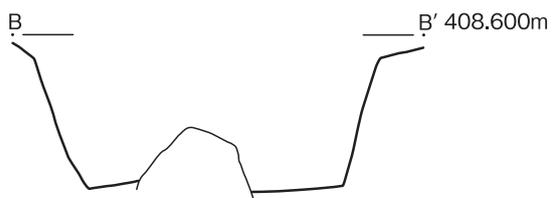
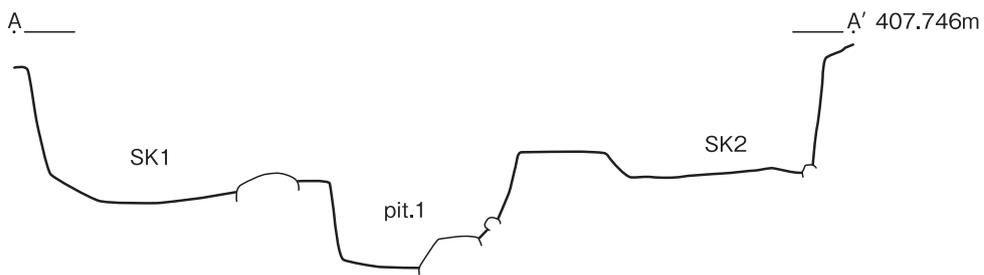
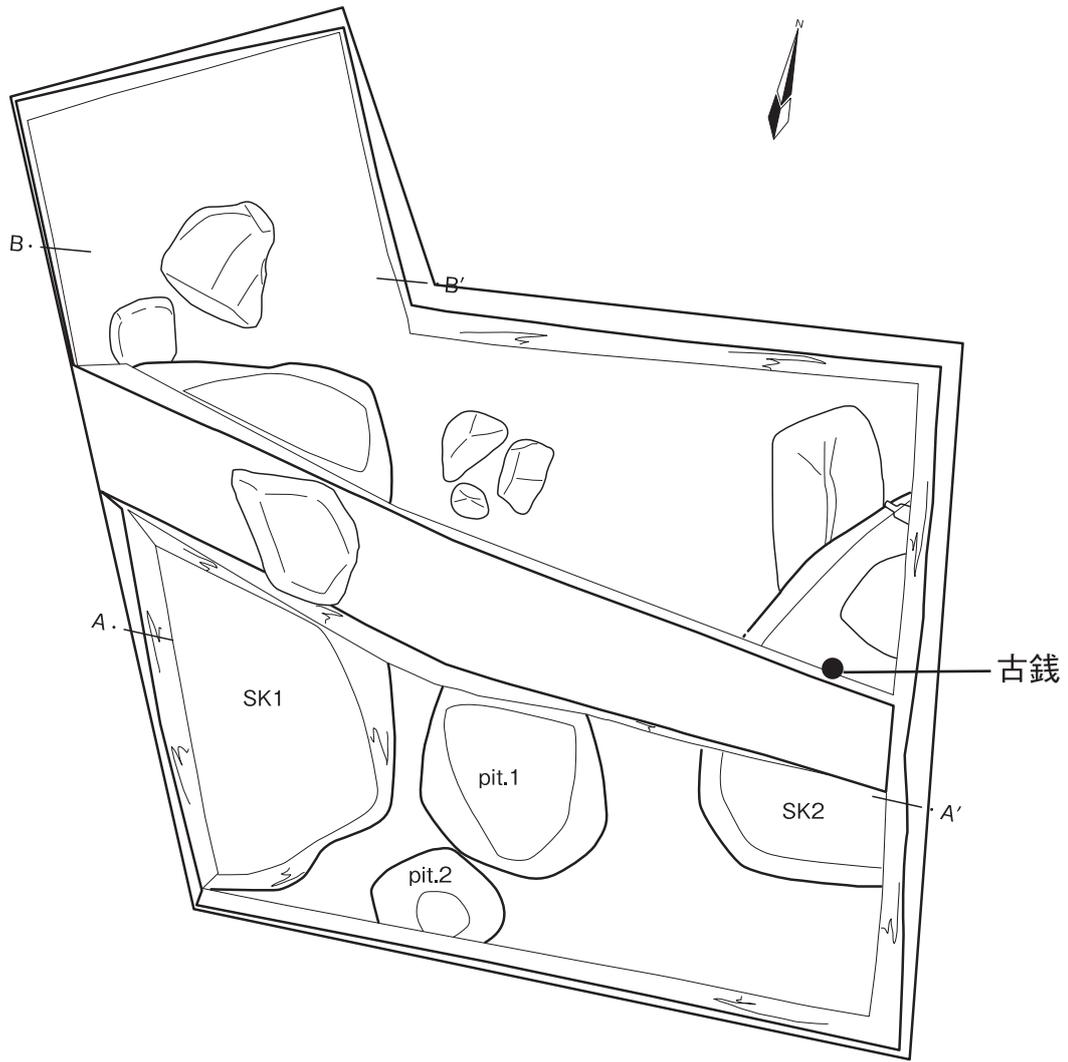
する発見者の証言と状況的には一致する。また、古銭出土地点から2～3mほど離れて金貨が発見されたということから、SK 2付近で古銭が出土したとすれば、SK 1またはSK 3付近で金貨が出土した可能性が高いと判断した。ただし、第7層中には全体的に小礫が多く含まれ、この地点のみの特徴ではない。また、部分的な調査であるため遺構の性格を明らかにすることができなかった。

④ Pit. 1

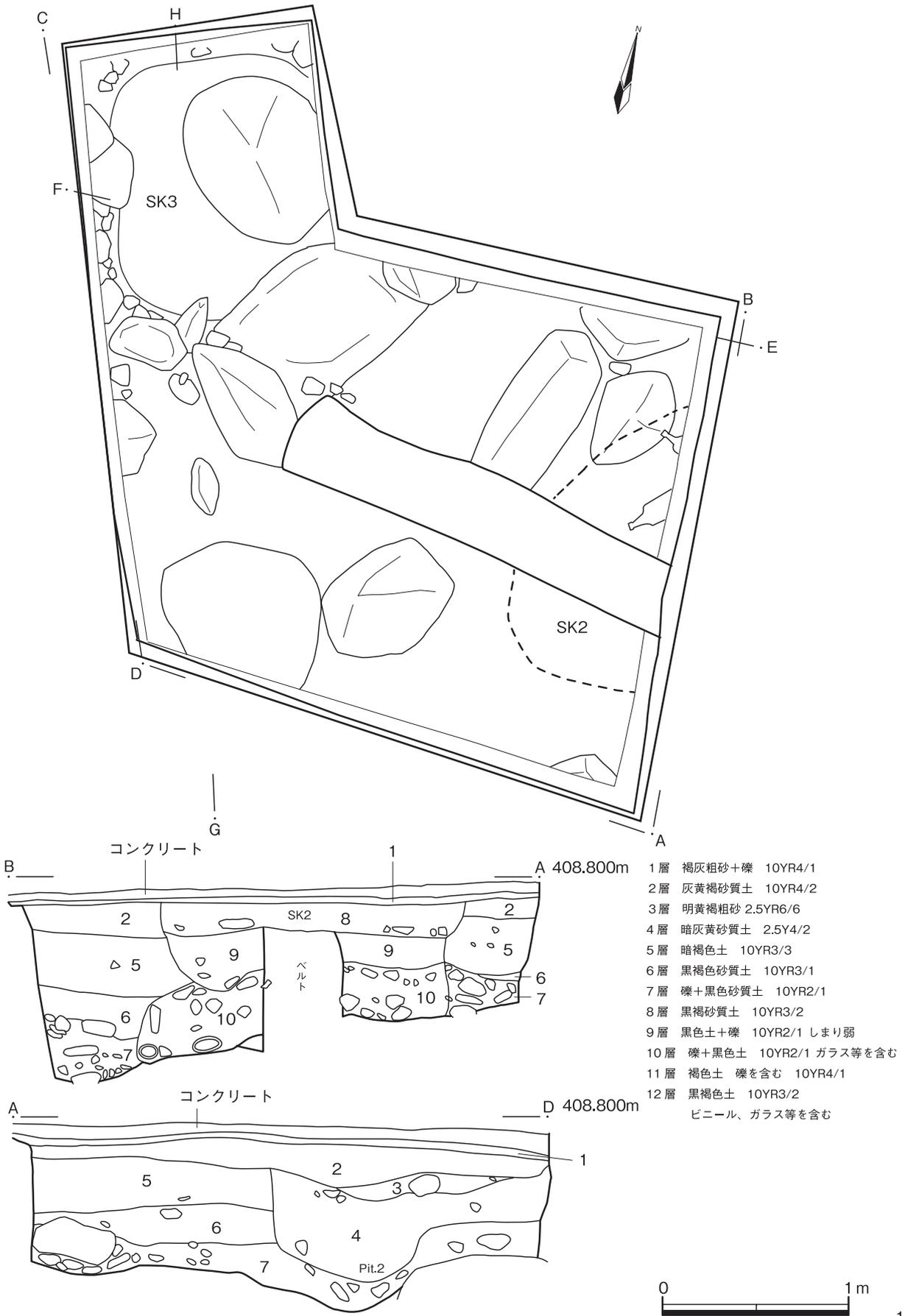
直径70cm、深さ40cmほどの不整円形の小ピットで、第7層に掘り込まれている。

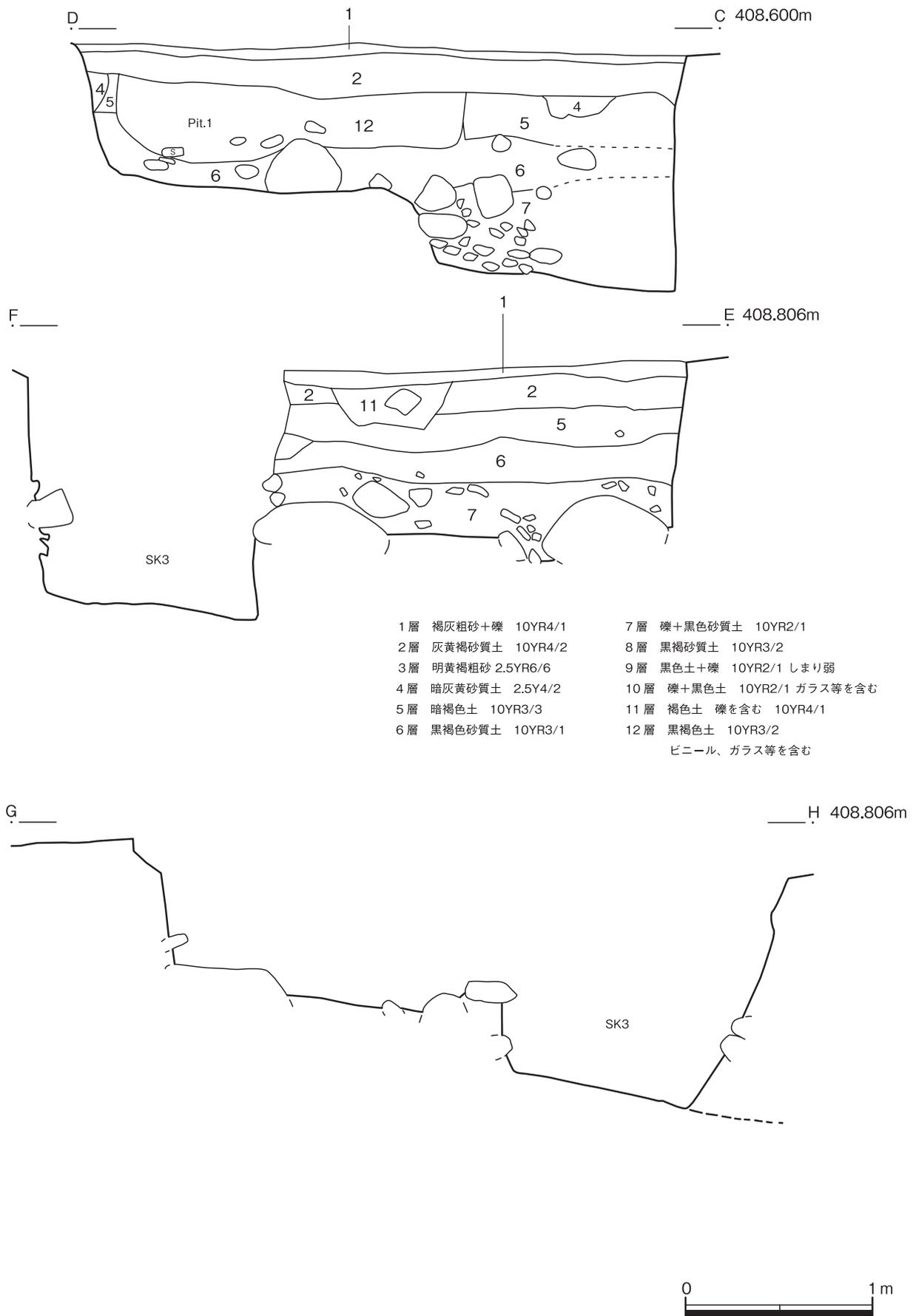
④ Pit. 2

7層上面では直径50cmほどの円形のピットとして確認される。南側のセクションでは第2層直下から掘り込まれる深さ50cmほどのピットである。



第8図 第4トレンチ





第10図 第4トレンチ

第4章 出土遺物

(1) 第1トレンチ (第11図)

トレンチ内から縄文土器片1点、土師質土器片1点が出土している。

1は無文の縄文時代の深鉢形土器胴部片で、中期～後期初頭の土器片と判断される。2は土師質土器底部高台部分の破片で、内面底部が黒色となる。中世～近世土師質と考えられる。

(2) 第2トレンチ (第11図)

縄文土器片2点、陶磁器2点の他、攪乱坑からは現代の生活雑器が多量に出土している。

3は沈線をもち、4は無文の縄文中期の土器片と考えられる。

陶磁器は、5が口縁部に2重の平行線と胴部に円形のマークが緑色で描かれ、全体を釉薬がかけられる。6は、一合徳利で、胴部に青色で「Ko八景園」と表記される。いずれも昭和期の陶磁器である。

(3) 第3トレンチ (第11図、第14図)

①土器

第11図7～14は、縄文や沈線文を施す深鉢形土器片で、縄文時代後期に比定される。

15、16は中世の土師質土器底面で、回転糸切り痕が認められる。17は、瓦質の鉢形土器で内面に横方向の刷毛目調整が見られる。

②陶磁器

18はしのぎ蓮弁文を持つ舶載の青磁碗の胴部破片で、15～16世紀代の製品である。

19、20は藍色の呉須絵を持つ碗や徳利の破片、21はタコ唐草文を特徴とする肥前系の染付瓶子で、18世紀～19世紀の肥前系の磁器である。22は外面に青色の草花文を施した肥前の碗で19世紀以降の製品である。

23は現存長2.2cm、幅1.9cm方形の白磁紅皿で、瀬戸美濃産と推定される。

③石製品

第14図96は、長さ3.4cm、幅1.4cmの黒曜石製の剥片である。102は、長さ3.1cm、幅1.2cm、厚さ0.6cmの両刃を持つ小形磨製石斧である。いずれも、縄文時代の土器に共伴するものと推定される。

(4) 第4トレンチ (第12図、第13図)

①土器

第12図24～30は隆帯、縄文、並行沈線を地文とする曽利式土器片である。31～36は隆帯または沈線による区画内を縄文で充填する文様を特徴とする称名寺式の深鉢形土器である。37～54は時期不明の縄文土器。55、56は口縁下部に太い沈線を巡らす氷I式の深鉢、57は同時期の浅鉢底部と考えられる。58～64は、細密条痕文を地文とする氷I式の甕胴部破片である。

65～68は、口縁部に細かい縄文をもつ弥生時代前期後葉～中期初頭の土器と判断される。

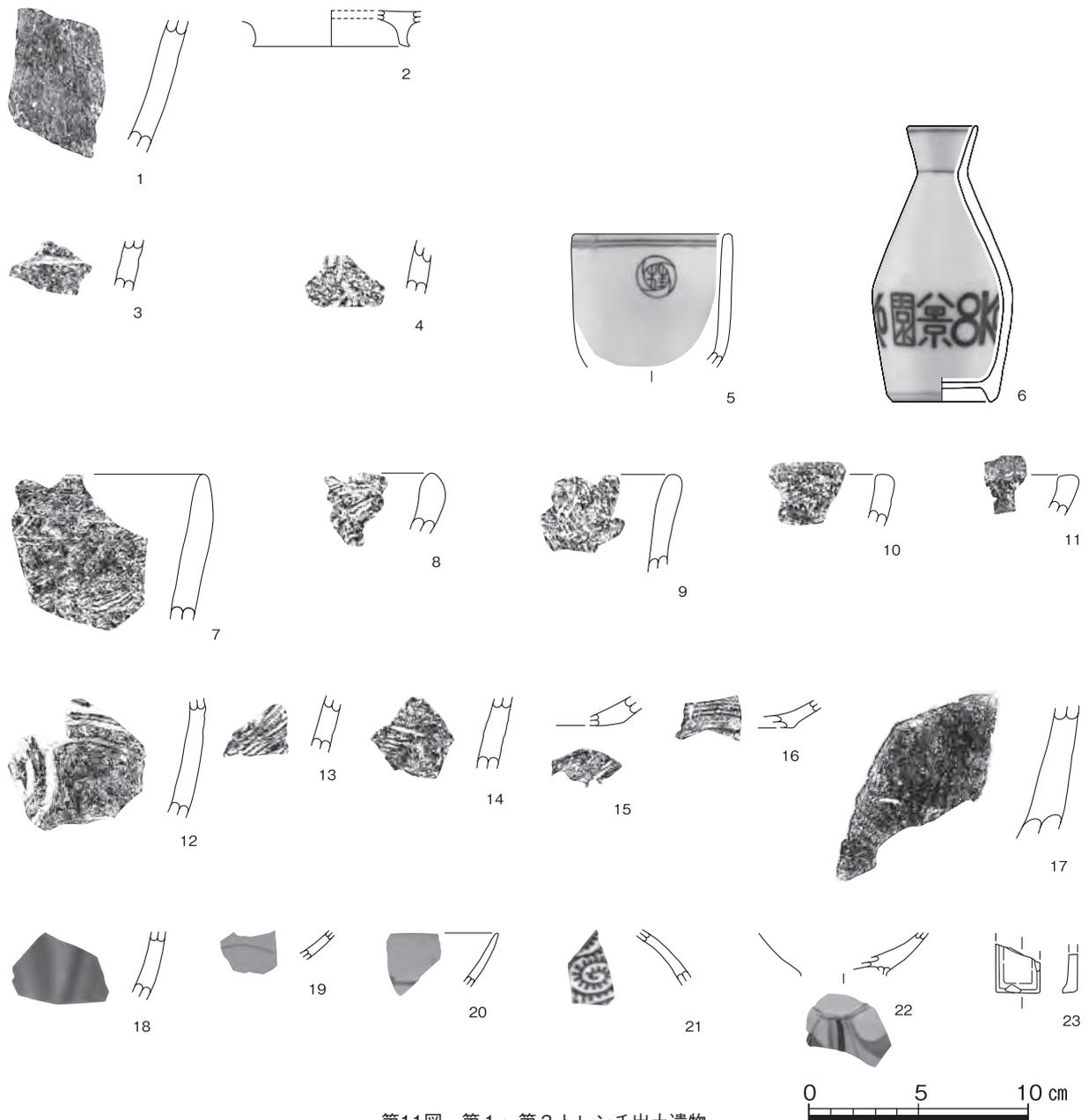
69～75は、中世の土師質土器の坏で、口縁部はやや内湾し、底部に回転糸切り痕が認められる。

②陶磁器

第3図76～88、90は、肥前、瀬戸美濃、京焼系の磁器で、呉須絵を特徴とする碗、皿、猪口などが見られる。これらは、18世紀後半～20世紀代の製品である。89は、西洋陶器で、外面にアルファベットで「Fra」の文字が図案化されているが、磁器は不明である。

表1 福寺遺跡出土土器観察表

番号	図版	トレンチ	種類	器形	部位	時期	文様等
1	第11図	第1トレンチ	土器	深鉢	胴部	縄文時代	無文の深鉢
2	第11図		土器	高台付皿	底部・高台	時期不明	高台裾が開く。みこみ内面は黒色処理
3	第11図		土器	深鉢	胴部	縄文時代	沈線下に縄文を施す
4	第11図		土器	深鉢	胴部	縄文時代	無文
5	第11図	第2トレンチ	磁器(産地不明)	碗(筒碗)	体部	昭和	緑色釉薬。口縁直下に二重圏線、体部に円形文。円形文の内部に記号あり。
6	第11図		磁器	徳利	体部	昭和	「八景園」「SKo」の印。文様は型紙刷り
7	第11図	第3トレンチ	土器	深鉢	口縁部	縄文時代中期～後期	胴部に条痕を施す
8	第11図		土器	深鉢	口縁部	縄文時代中期～後期	外面に条痕を施す
9	第11図		土器	深鉢	口縁部	縄文時代中期～後期	外面に条痕を施す
10	第11図		土器	深鉢	口縁部	縄文時代中期～後期	外面に条痕を施す
11	第11図		土器	深鉢	口縁部	縄文時代中期～後期	外面に条痕を施す
12	第11図		土器	浅鉢	胴部	縄文時代後期(堀之内式)	曲線的な並行沈線文を施す
13	第11図		土器	深鉢	胴部	縄文時代晩期終末	外面に植物系の条痕文を施す
14	第11図		土器	深鉢	胴部	縄文時代晩期終末	外面に植物系の条痕文を施す
15	第11図		土師質土器	皿	体部～底部	16世紀代?	底部条切り痕
16	第11図		土師質土器	皿	体部～底部	時期不明	やや硬質で薄手
17	第11図		土師質土器	鉢(火鉢か?)	体部の下部		外面の吸炭が著しい
18	第11図		青磁(舶載陶器)	碗	体部	15～16世紀代	しのぎ連弁文
19	第11図		磁器(肥前)	徳利?	体部	18世紀後半～19世紀	呉須絵(外面のみ柳文か?)。内面は無釉。
20	第11図		磁器(肥前)	碗	口辺部	不明	呉須絵(外面のみ)。文様は不明
21	第11図		磁器(肥前)	碗(筒碗?)	体部	18世紀後半～19世紀	呉須絵(外面タコ唐草文)
22	第11図		磁器(肥前)	碗	底部・高台	19世紀以降	呉須絵(外面草花文)
23	第11図	磁器(瀬戸美濃)	紅皿	体部	不明	底面以外に釉薬	
24	第12図	第4トレンチ	土器	深鉢	胴部	縄文時代中期	隆帯をもつ
25	第12図		土器	深鉢	胴部	縄文時代中期	無文
26	第12図		土器	深鉢	胴部	縄文時代中期	無文
27	第12図		土器	深鉢	胴部	縄文時代中期後葉(曾利式)	外面に並行沈線を施す
28	第12図		土器	深鉢	胴部	縄文時代中期後葉(曾利式)	外面に並行沈線を施す
29	第12図		土器	深鉢	胴部	縄文時代中期後葉(曾利V式)	幅広隆帯内部に縄文を充填
30	第12図		土器	深鉢	胴部	縄文時代中期後葉(曾利V式)	幅広隆帯内部に縄文を充填
31	第12図		土器	深鉢	胴部	縄文時代後期前葉(称名寺式)	曲線的な沈線区画内に縄文を充填
32	第12図		土器	深鉢	口縁部	縄文時代後期前葉(称名寺式)	曲線的な沈線区画内に縄文を充填
33	第12図		土器	深鉢	胴部	縄文時代後期前葉(称名寺式)	曲線的な沈線区画内に縄文を充填
34	第12図		土器	深鉢	胴部	縄文時代後期前葉(称名寺式)	曲線的な沈線区画内に縄文を充填
35	第12図		土器	深鉢	胴部	縄文時代後期前葉(称名寺式)	曲線的な沈線区画内に縄文を充填
36	第12図		土器	深鉢	胴部	縄文時代中期	縄文を地文とする
37	第12図		土器	深鉢	胴部	縄文時代	並行沈線文を持つ
38	第12図		土器	深鉢	胴部	縄文時代	縄文を地文とする
39	第12図		土器	深鉢	胴部	縄文時代	粗い条線をもつ
40	第12図		土器	深鉢	胴部	縄文時代	粗い条線をもつ
41	第12図		土器	深鉢	胴部	縄文時代	粗い条線をもつ
42	第12図		土器	深鉢	胴部	縄文時代晩期終末	植物系条痕文を施す
43	第12図		土器	深鉢	胴部	縄文時代晩期終末	植物系条痕文を施す
44	第12図		土器	深鉢	胴部	縄文時代	無文
45	第12図		土器	深鉢	胴部	縄文時代	縄文を施す
46	第12図		土器	深鉢	胴部	縄文時代	沈線文を施す
47	第12図		土器	深鉢	口縁部	縄文時代	無文
48	第12図		土器	深鉢	胴部	縄文時代	沈線文を施す
49	第12図		土器	深鉢	胴部	縄文時代	沈線文を施す
50	第12図		土器	深鉢	胴部	縄文時代	沈線文を施す
51	第12図		土器	深鉢	胴部	縄文時代	並行する沈線文を施す
52	第12図		土器	深鉢	底部	縄文時代	無文
53	第12図		土器	深鉢	底部	縄文時代	底面に網状痕を残す
54	第12図		土器	深鉢	底部	縄文時代	無文
55	第12図		土器	深鉢	口縁部	縄文時代晩期終末(氷I式)	口縁直下に凹線を巡らす
56	第12図		土器	深鉢	口縁部	縄文時代晩期終末(氷I式)	口縁直下に凹線を巡らす
57	第12図		土器	浅鉢	底部	縄文時代晩期終末(氷I式)	底部がわずかに窪む
58	第12図		土器	深鉢	胴部	縄文時代晩期終末(氷I式)	植物系条痕文を施す
59	第12図		土器	深鉢	胴部	縄文時代晩期終末(氷I式)	植物系条痕文を施す
60	第12図		土器	深鉢	胴部	縄文時代晩期終末(氷I式)	植物系条痕文を施す
61	第12図		土器	深鉢	胴部	縄文時代晩期終末(氷I式)	植物系条痕文を施す
62	第12図		土器	深鉢	胴部	縄文時代晩期終末(氷I式)	植物系条痕文を施す
63	第12図		土器	深鉢	胴部	縄文時代晩期終末(氷I式)	植物系条痕文を施す
64	第12図		土器	深鉢	胴部	縄文時代晩期終末(氷I式)	植物系条痕文を施す
65	第12図		土器	壺ないし甕	胴部	弥生時代前期末～中期初頭	細かい縄文を施す
66	第12図		土器	壺ないし甕	胴部	弥生時代前期末～中期初頭	細かい縄文を施す
67	第12図		土器	壺ないし甕	口縁部	弥生時代前期末～中期初頭	細かい縄文を施す
68	第12図		土器	壺ないし甕	胴部	弥生時代前期末～中期初頭	細かい縄文を施す
69	第12図		土師質土器	環	口縁部	中世	横方向の整形痕
70	第12図		土師質土器	環	口縁部	中世	横方向の整形痕
71	第12図		土師質土器	環	口縁部	中世	横方向の整形痕
72	第12図	土師質土器	環	口縁部	中世	横方向の整形痕	
73	第12図	土師質土器	環	底部	中世	底部条切り痕	
74	第12図	土師質土器	環	底部	中世	底部条切り痕	
75	第12図	土師質土器	環	底部	中世	底部条切り痕	
76	第13図	磁器(肥前)	碗(丸碗)	底部と高台	18世紀後半～19世紀初頭	呉須絵(外面は草花紋、高台内に一重圏線巡る)	
77	第13図	磁器(瀬戸美濃?)	碗(筒碗)	口縁部	19世紀～	呉須絵(口縁内側に格子目文+草文)	
78	第13図	磁器(産地不明)	碗(丸碗)	底部	19世紀～	呉須絵(外面は草文?、底部みこみに一重圏線巡る)	
79	第13図	磁器(肥前)	皿(小皿)	口辺	18世紀後半～19世紀	呉須絵(外面に草文、底部みこみに一重圏線巡る)	
80	第13図	磁器(肥前)	碗?	体部破片	19世紀～	呉須絵(外面に草文、内面に草花文)	
81	第13図	陶器(産地不明)	鉢または甕	体部破片	不明		
82	第13図	陶器(京焼系)	碗	底部・高台	19世紀～	底部外面中央に刻印あり	
83	第13図	磁器(産地不明)	碗	体部破片		呉須絵(文様不明)	
84	第13図	磁器(産地不明)	碗または猪口	口辺部	時期不明	口縁外面に一条の圏線文様	
85	第13図	磁器(肥前)	猪口	口辺部	19世紀～	呉須絵(内外面とも雨降文)	
86	第13図	磁器(瀬戸美濃)	皿	口辺部	時期不明	口縁内面に呉須絵(文様不明)	
87	第13図	磁器(瀬戸美濃?)	鉢または碗	口辺部	昭和	口縁外面に二重圏線巡る。	
88	第13図	磁器(瀬戸美濃?)	猪口?	口辺部	大正～昭和	内面に二重圏線	
89	第13図	陶器(西洋)	筒形		不明	外面に「Pra」の図案化	
90	第13図	磁器(瀬戸美濃)	皿	口辺部	時期不明	内面にプリント転写の呉須絵。文様は日の丸を記した扇文の連続文様	



第11図 第1～第3トレンチ出土遺物

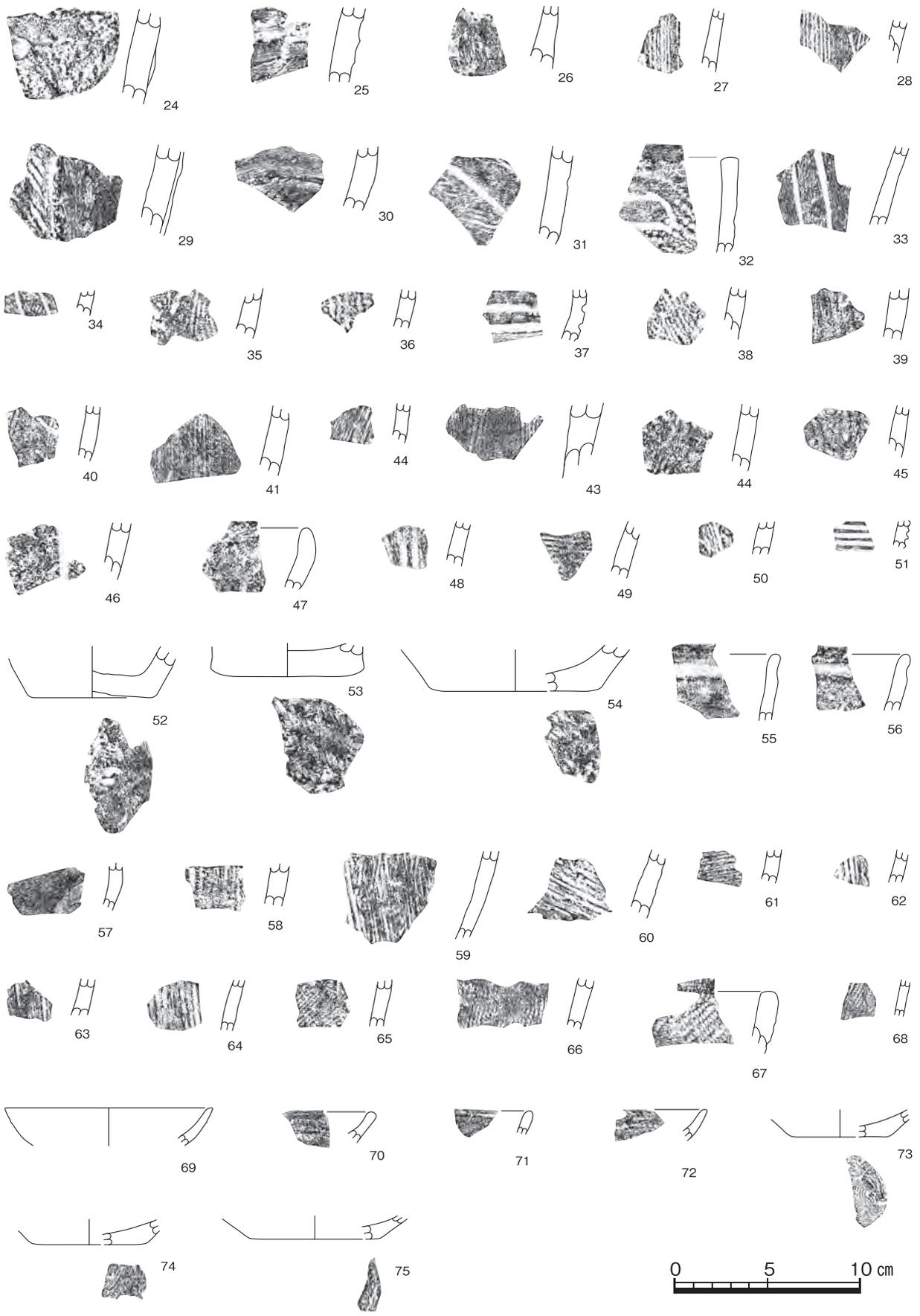
③石製品

第14図91は、長さ12.4cm、幅7.2cm、厚さ1.6cmの短冊型の打製石斧で、片側長辺中央部にやや挟りが認められる。92は、長さ5.8cm、幅3.0cm、厚さ0.8cmの小型打製石斧である。93、94は両端部が欠損しているが、打製石斧の一部と判断される。第14図95、97～99、101は黒曜石の剥片である。

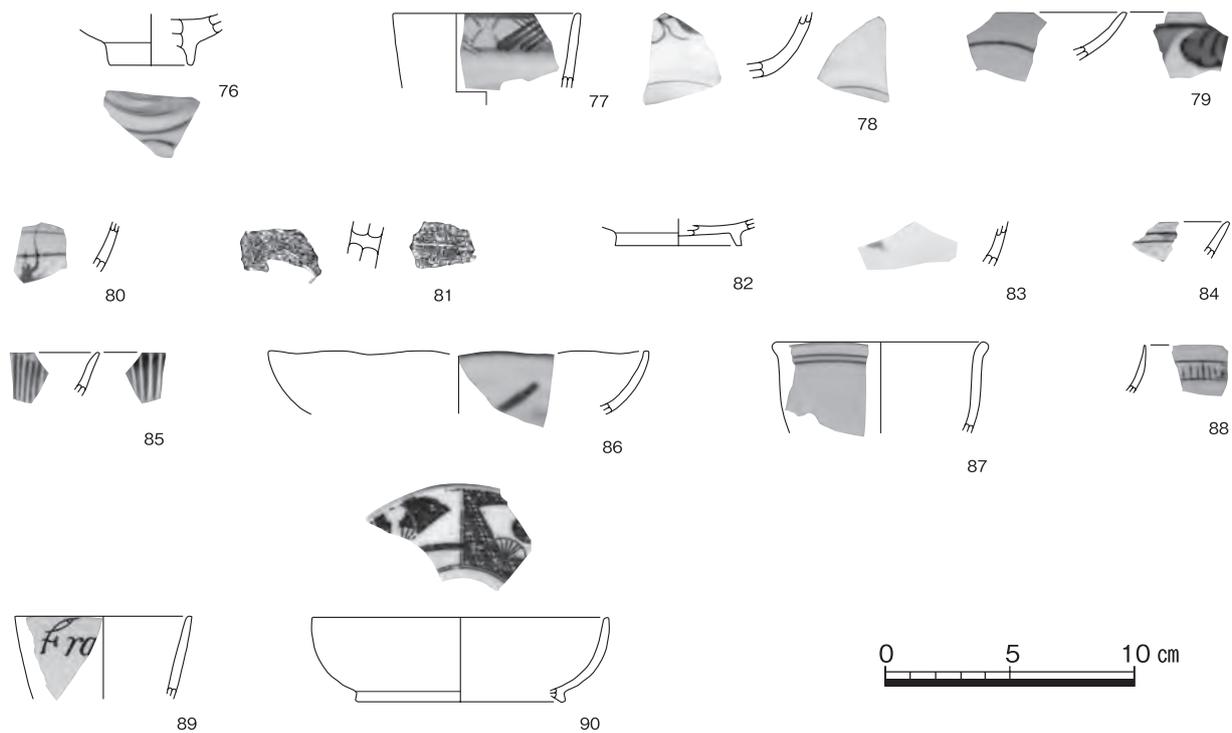
いずれも、縄文時代に帰属する石製品と考えられるが、詳細な時期は不明である。

④古銭

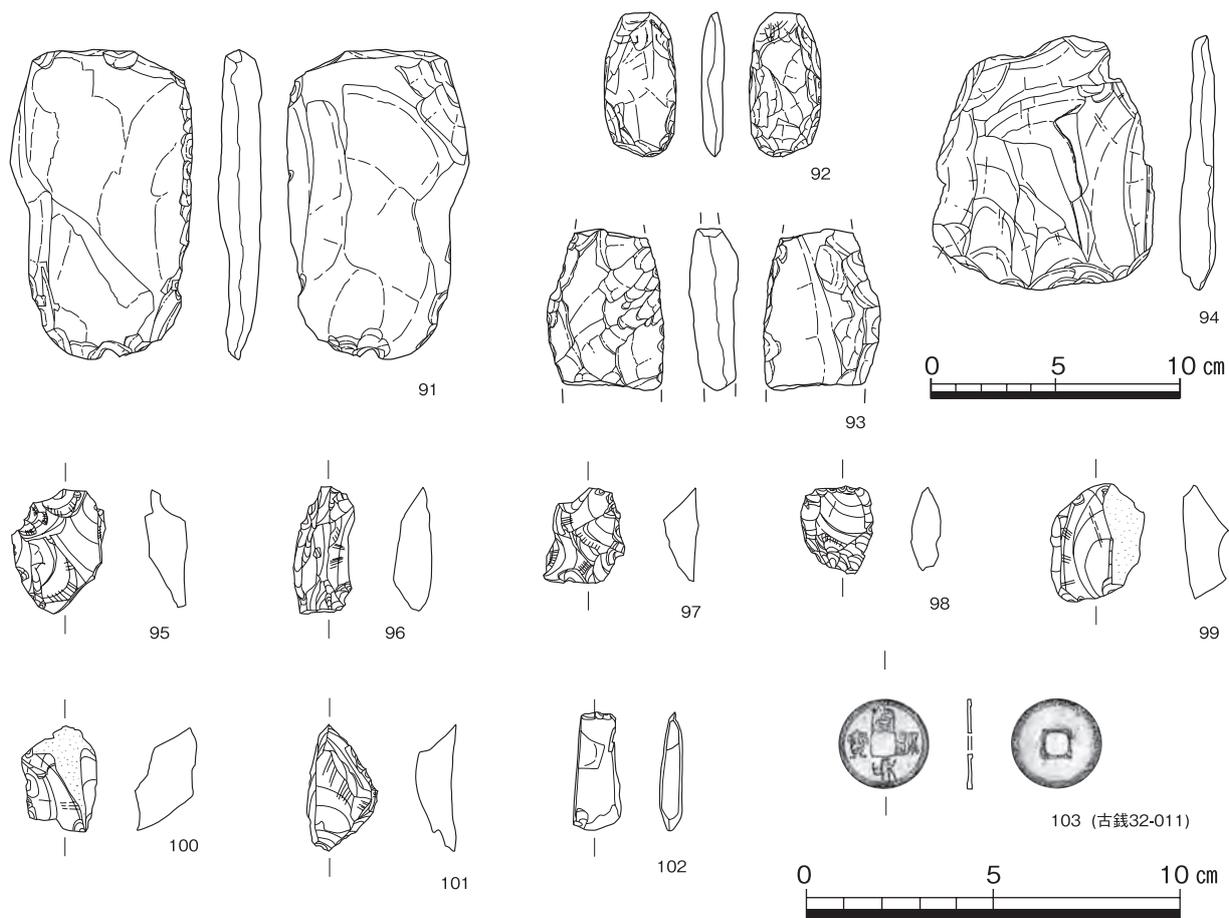
4号トレンチ東側にあるSK2の上層から古銭が1点出土している（第14図103、図版3・5）。本資料は、「宣和通寶」で昭和46（1971）年に発見された古銭群の一つと推定される。



第12図 第4トレンチ出土遺物



第13図 第4トレンチ出土遺物



第14図 石製品・金属製品

第5章 既存の福寺遺跡出土銭貨

福寺遺跡では、昭和46（1971）年に耕作時に金貨20点と渡来銭約6000点が出土している（第2図）。渡来銭は、発見以降順次散逸したとみられ、現状では今回出土した古銭を含め2936点が残されていることが確認された¹⁾。これらの資料は、現在一括して山梨県立博物館所蔵資料となっている。以下、それらの概要および金貨の自然科学的な分析結果を報告する。

1 金貨（写真3、第15図）

金貨の出土地点は、発見当時の証言や本発掘調査をもとに、第4トレンチ西側のSK1ないしSK3の周辺であった可能性が高い。

この地点は日川の崖線が迫り、北側は一挙に低くなる。発見時の状況と同様にこの地点には黒色土層と多量の巨礫、小礫が確認されているが、SK3内では黒色土中の礫が比較的少ない状況が看取された。花崗岩の巨礫は、黒色土下面の黄色砂層中に伴う自然礫で、扇状地形成の際に土石流によって運ばれた転石と見られ、礫の上部が黒色土中に突き出ている。これらの礫は石列ないしは礎石であった可能性が指摘されているが（山梨県教育委員会2004）、本調査においてはそれらを特定の遺構と判断することはできなかった。また、今回の調査面積も極めて制約されていたためSK3の全体形状や性格を明らかにすることはできない。大量の渡来銭貨出土地点から2～3m地点に金貨が出土していることからみると、この付近の第7層黒色砂質土中に埋設されたものと判断される。

金貨は蛭藻金2点、碁石金18点があり、その詳細については次章の分析に譲る。

2 渡来銭貨（第16図～第42図、表2）

本発掘調査で第4トレンチ東側の攪乱坑（SK2）の上面から、1971年発見の銭貨の一部と考えられる「宣和通寶」が出土していることから（第14図103、図版3）、渡来銭貨の出土地点がこの攪乱坑、またはその近接した地点の第7層黒色砂質土掘削に伴うものであると考えられる。出土時には、これらの銭貨は100枚程度を単位とする緡銭で木箱に納められていたとされるが、現状では緡銭を束ねていた縄や箱は失われ、銭貨のみがばらばらの状態となっている。

渡来銭貨は、唐時代の開元通寶、乾元重寶、後漢時代の漢通元寶、北宋時代の宋通元寶、太平通寶、淳化元寶、至道元寶、咸平元寶、景德元寶、祥符元寶、祥符通寶、天禧元寶、天聖元寶、明道元寶、景祐元寶、皇宋通寶、至和元寶、至和通寶、嘉祐元寶、嘉祐通寶、治平元寶、治平通寶、熙寧元寶、元豊通寶、元祐通寶、紹聖元寶、元符通寶、聖宋元寶、大觀通寶、政和通寶、宣和通寶、南宋時代の紹興元寶、淳熙元寶、紹熙元寶、慶元通寶、嘉泰通寶、開禧通寶、嘉定通寶、大宋元寶、紹定通寶、淳祐元寶、皇宋元寶、景定元寶、咸淳元寶、金時代の大定通寶、明時代の大中通寶、洪武通寶、永楽通寶、宣徳通寶の49種類の中国銭貨、ヴェトナム地域の前黎時代の天福鎮寶、朝鮮李朝の朝鮮通寶、判読不明銭貨などで構成される²⁾。

これらの一括銭貨は、初鑄年が最も古いもので開元通寶の西暦621年、最も新しいもので宣徳通寶の1433年のいずれも7世紀～15世紀前葉の銭貨に限定され、それ以降の銭貨はまったく含まれていない。このことから、銭貨の埋納された時期は、江戸時代以前の15世紀中葉から16世紀代であったと推定される。金貨と渡来銭貨は出土地点や土層からみて極めて近い時期に埋設されたと考えられ、金貨の埋設時期を特定する上でも非常に重要である。

表2 福寺遺跡出土銭貨一覧

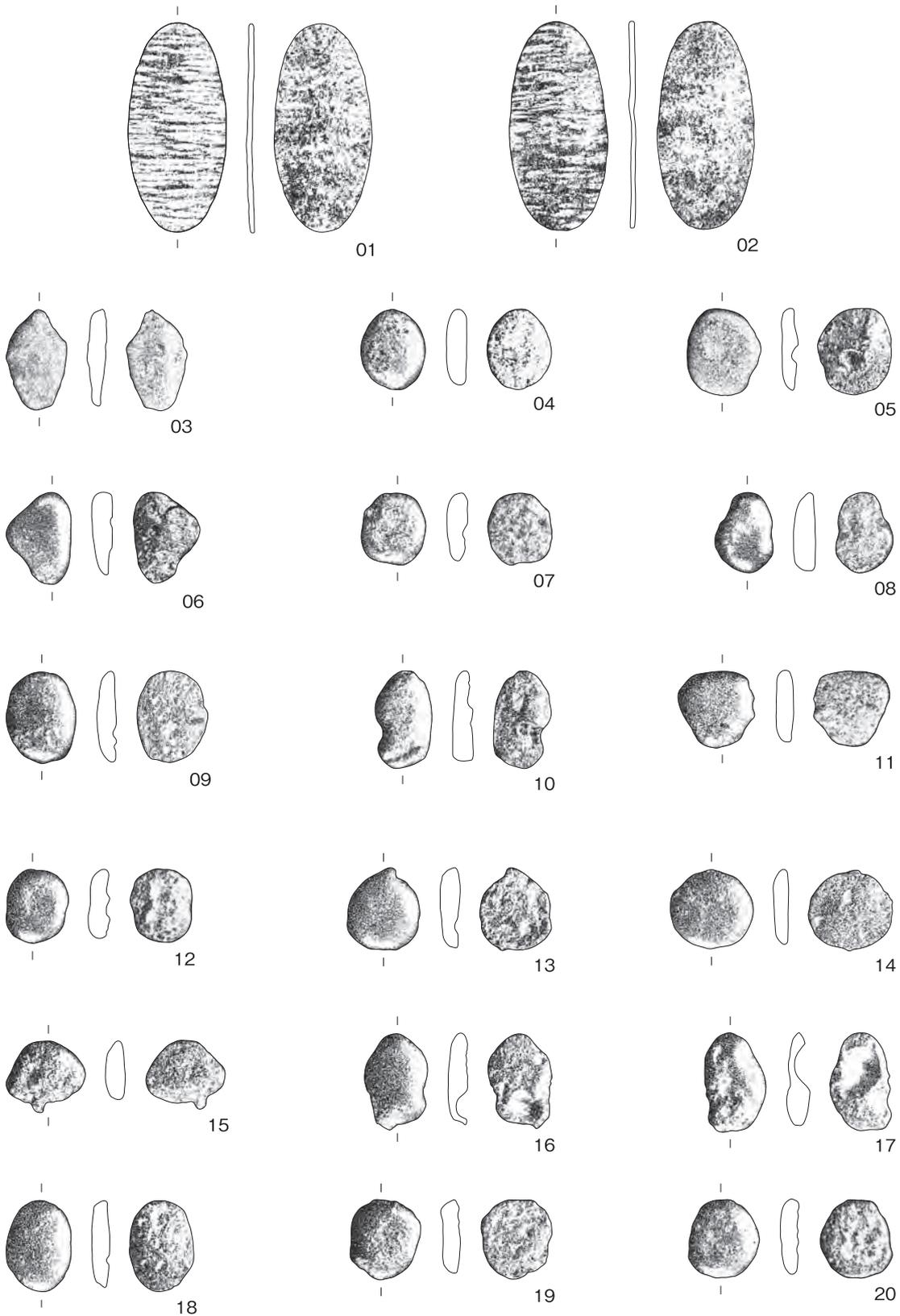
No	銭貨名	国名	初鑄年	枚数	No	銭貨名	国名	初鑄年	枚数
1	開元通寶	唐	621	210	27	紹聖元寶	北宋	1094	134
2	軋元重寶	唐	758	7	28	元符通寶	北宋	1098	57
3	漢通元寶	後漢	948	1	29	聖宋元寶	北宋	1101	120
4	宋通元寶	北宋	960	2	30	大觀通寶	北宋	1107	30
5	太平通寶	北宋	976	20	31	政和通寶	北宋	1111	64
6	天福鎮寶	前黎	984	1	32	宣和通寶	北宋	1119	11
7	淳化元寶	北宋	990	22	33	紹興元寶	南宋	1131	1
8	至道元寶	北宋	995	41	34	淳熙元寶	南宋	1174	10
9	咸平元寶	北宋	998	43	35	紹熙元寶	南宋	1190	3
10	景德元寶	北宋	1004	57	36	慶元通寶	南宋	1195	2
11	祥符元寶	北宋	1009	74	37	嘉泰通寶	南宋	1201	2
12	祥符通寶	北宋	1009	45	38	開禧通寶	南宋	1205	3
13	天禧元寶	北宋	1071	54	39	嘉定通寶	南宋	1208	14
14	天聖元寶	北宋	1023	118	40	大宋元寶	南宋	1225	1
15	明道元寶	北宋	1032	11	41	紹定通寶	南宋	1228	3
16	景祐元寶	北宋	1034	31	42	淳祐元寶	南宋	1241	4
17	皇宋通寶	北宋	1038	411	43	皇宋元寶	南宋	1253	3
18	至和元寶	北宋	1054	33	44	景定元寶	南宋	1260	1
19	至和通寶	北宋	1054	6	45	咸淳元寶	南宋	1265	3
20	嘉祐元寶	北宋	1056	22	46	大定通寶	金	1178	1
21	嘉祐通寶	北宋	1056	57	47	大中通寶	明	1361	1
22	治平元寶	北宋	1056	43	48	洪武通寶	明	1368	100
23	治平通寶	北宋	1064	7	49	永樂通寶	明	1408	154
24	熙寧元寶	北宋	1064	258	50	朝鮮通寶	朝鮮	1423	2
25	元豐通寶	北宋	1068	347	51	宣德通寶	明	1433	4
26	元祐通寶	北宋	1078	236	52	判読不能			51
合計									2936

注

- この内、2639点についてはすでに山梨県埋蔵文化財センターによる調査によって明らかにされている（山梨県教育委員会 2004）。新たに確認された銭貨については既存資料と色調やさびの状態が若干の異なるものもあるが、銭種構成が一致しておりここでは一括して報告を行うこととする。
- 『埋蔵銭貨出土遺跡群詳細分布調査報告書』では、模鑄銭の存在が報告されている。該当する銭貨は全体的に薄手であることや銭貨銘が不明瞭ではあるが、これらの特徴のみを根拠に模鑄銭と明確に断定することは困難であるため、本報告では渡来銭貨として扱い、後の研究に委ねることとする。

引用文献

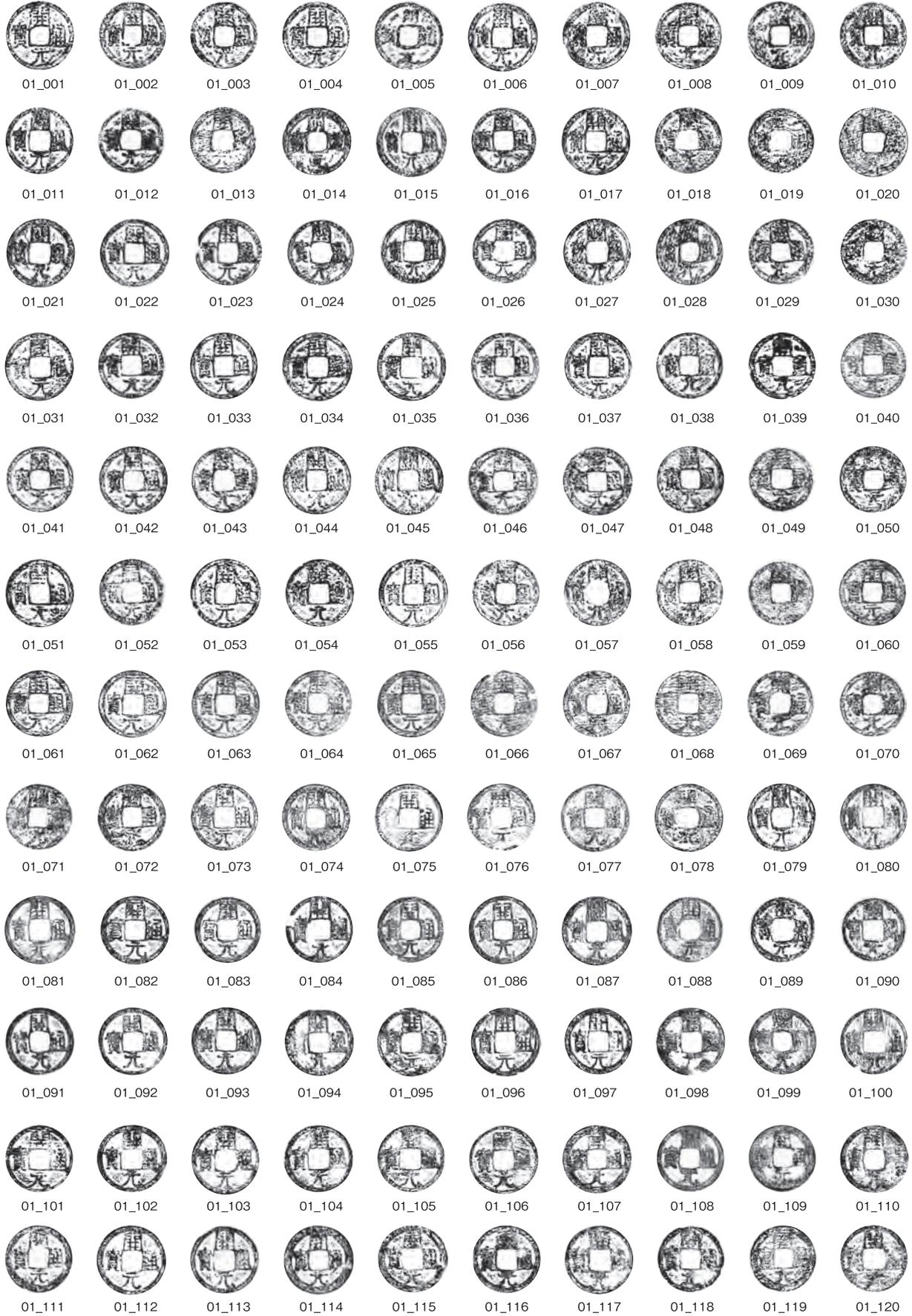
山梨県教育委員会 2004 『埋蔵銭貨出土遺跡群詳細分布調査報告書』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第217集



1・2 蛭藻金
3～20 基石金

第15図 福寺遺跡出土金貨

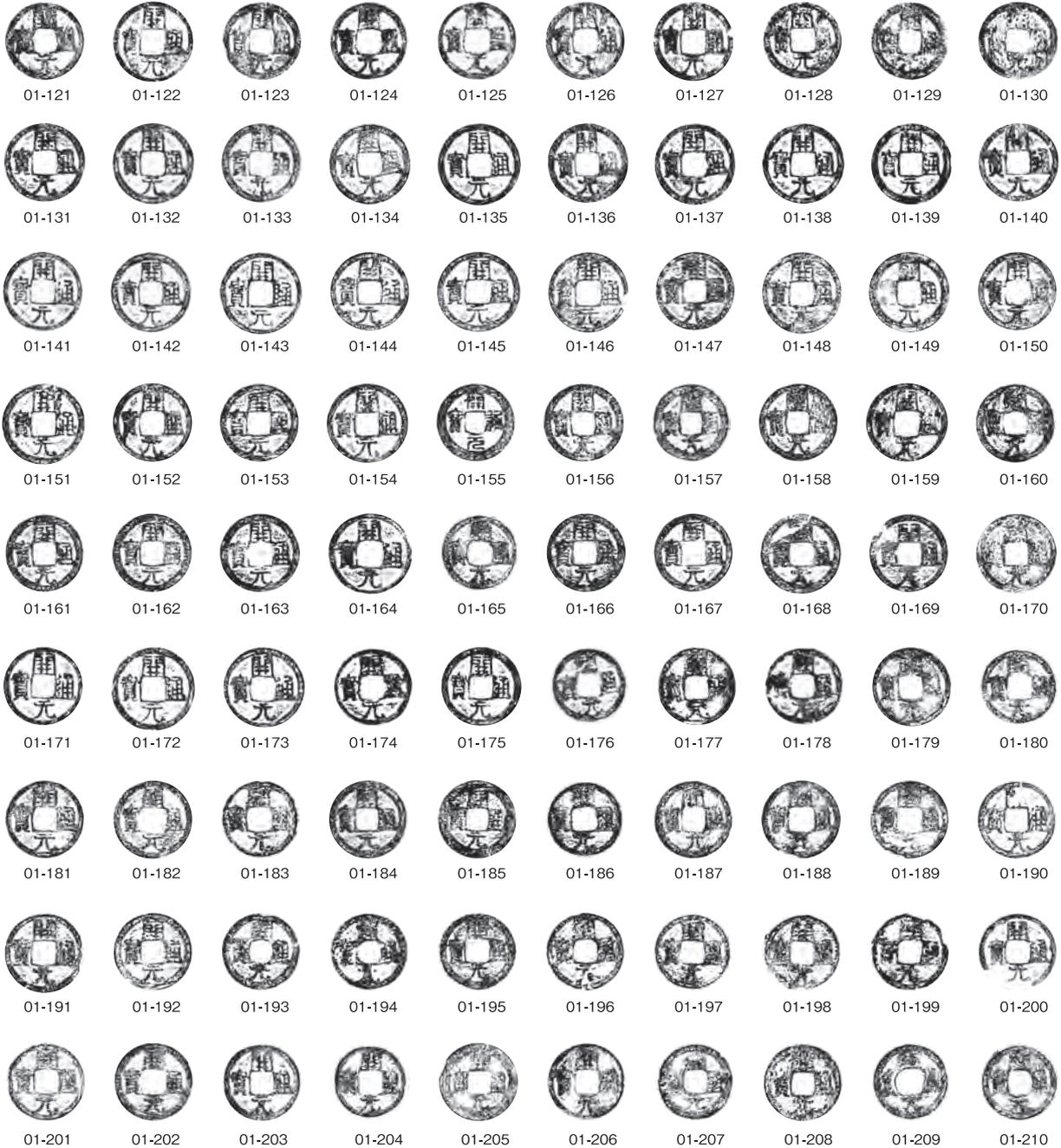
開元通寶



第16圖 出土波來錢貨



01 開元通寶



02 乾元重寶



03 漢通元寶

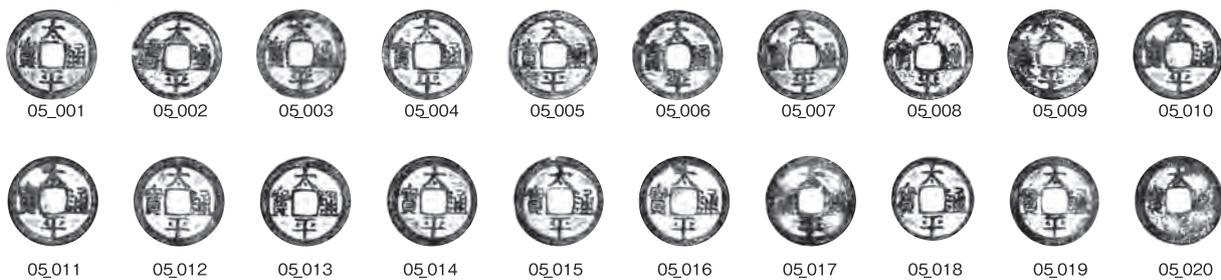


04 宋通元寶



第17圖 出土渡来銭貨

05 太平通寶



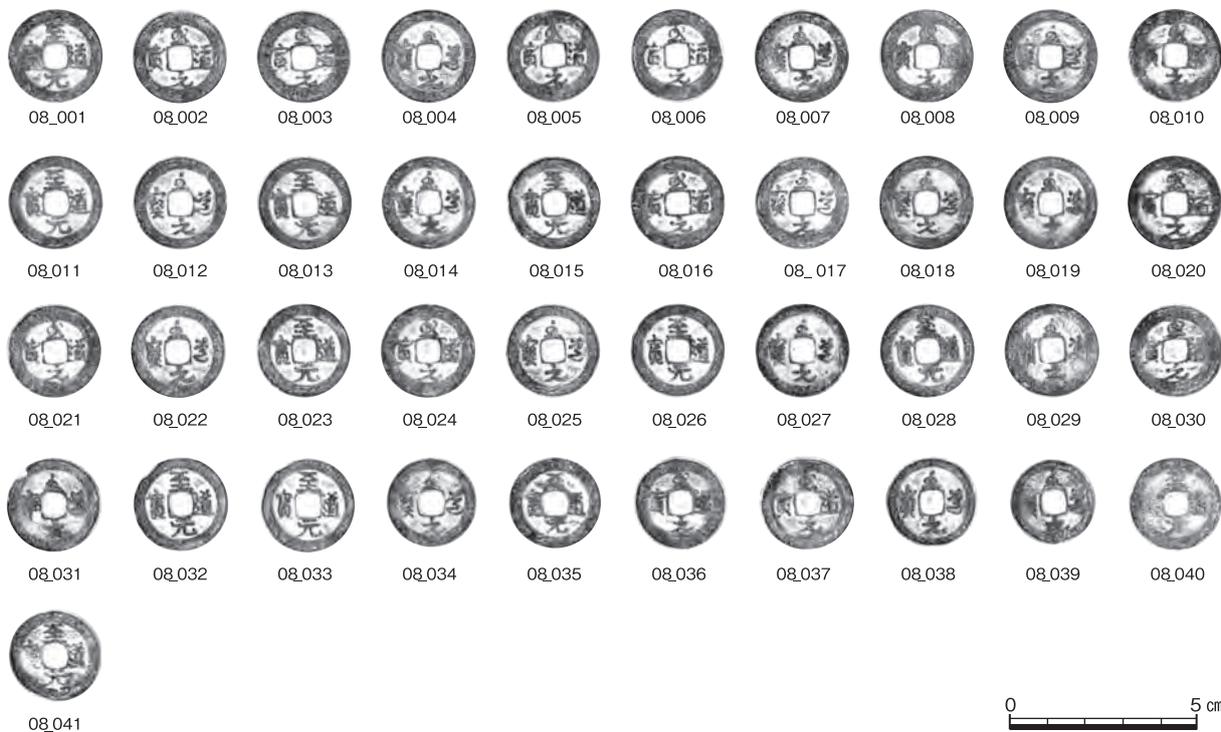
06 天福鎮寶



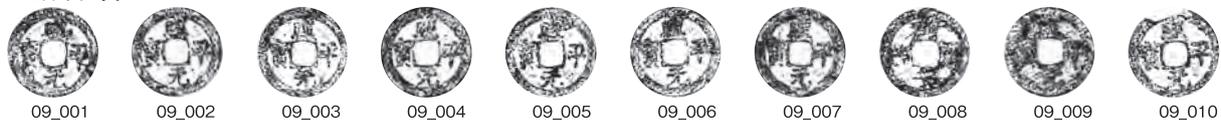
07 淳化元寶



08 至道元寶

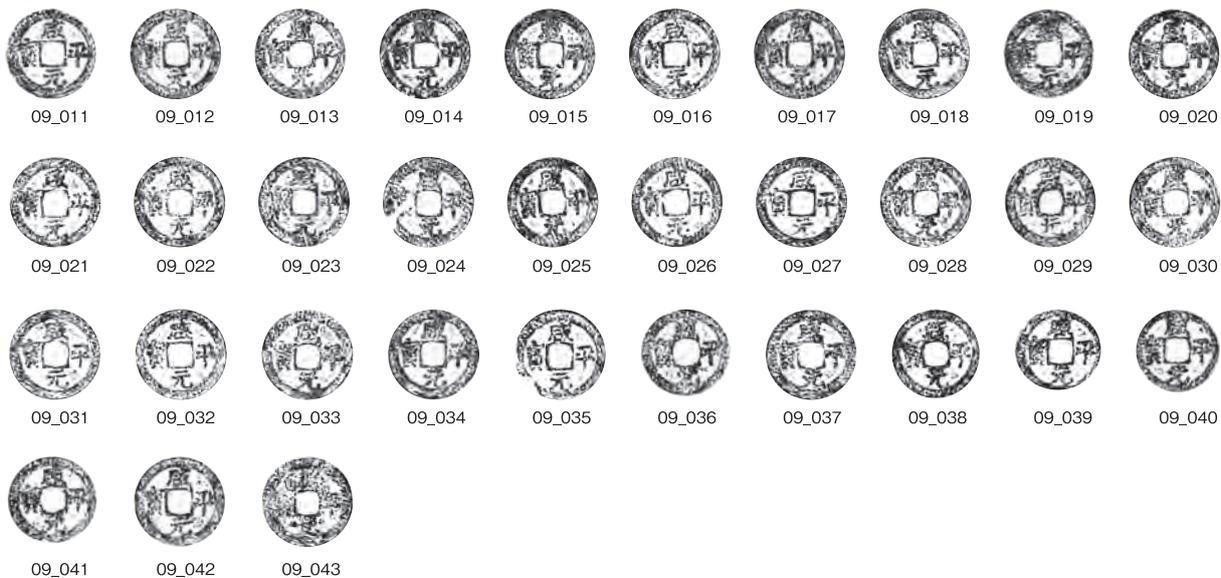


09 咸平元寶

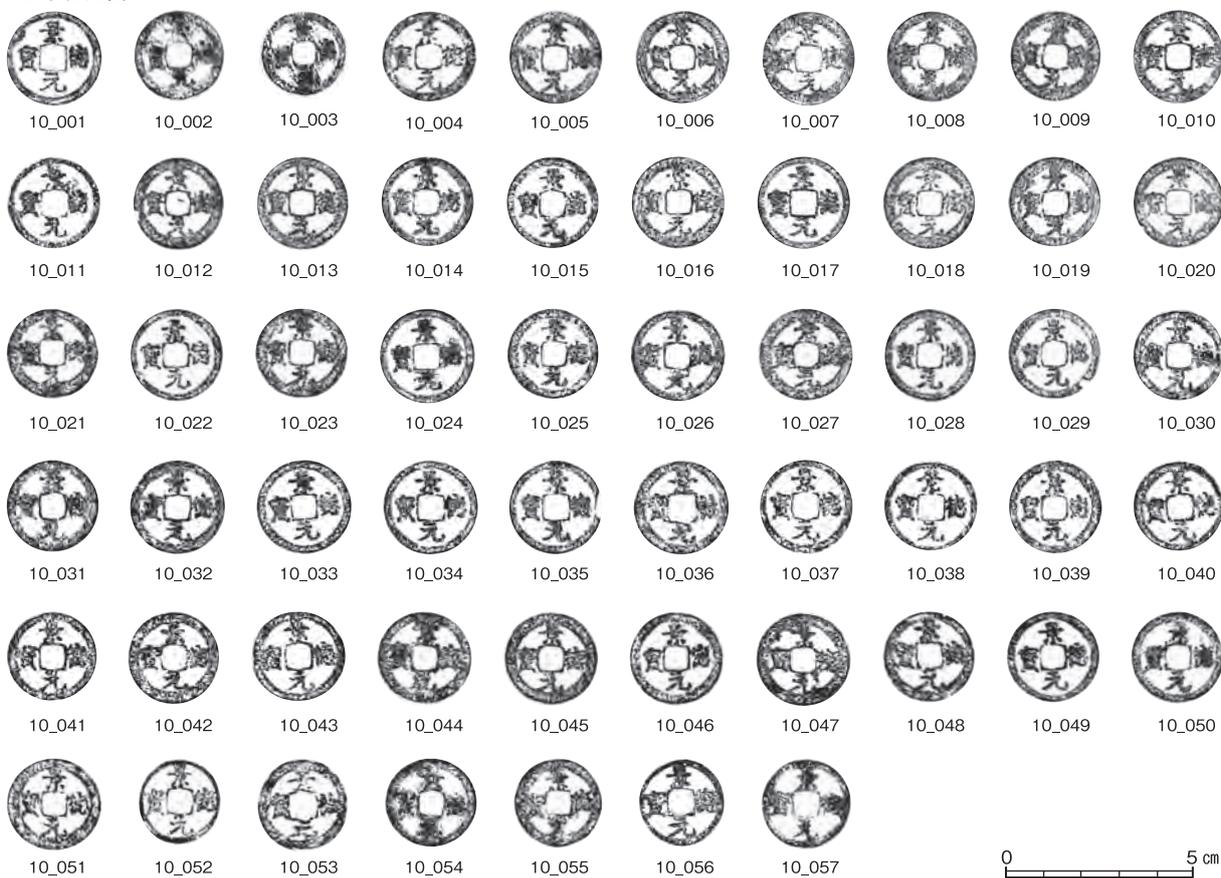


第18圖 出土渡來錢貨

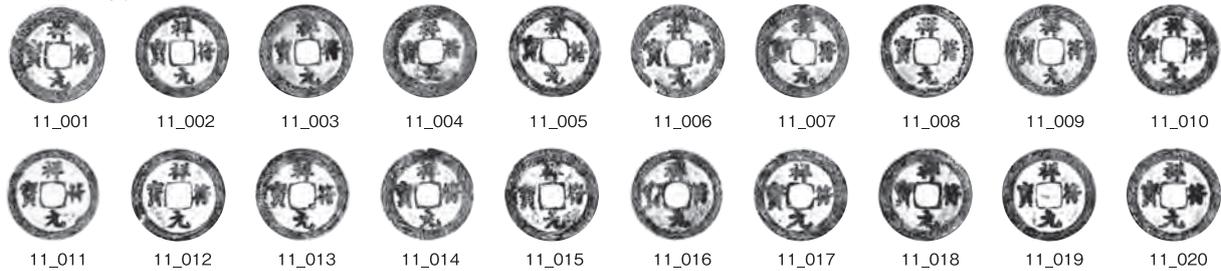
09咸平元寶



10景德元寶

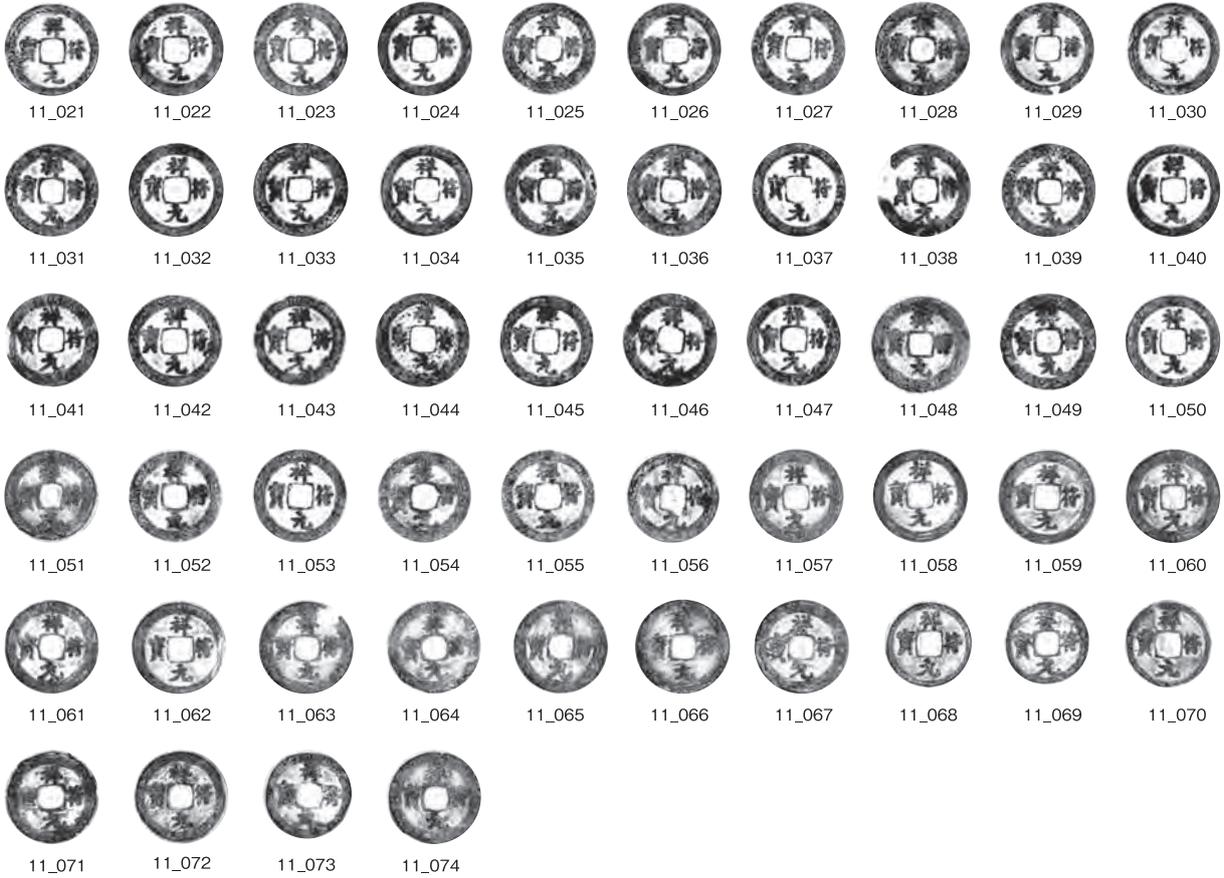


11祥符元寶

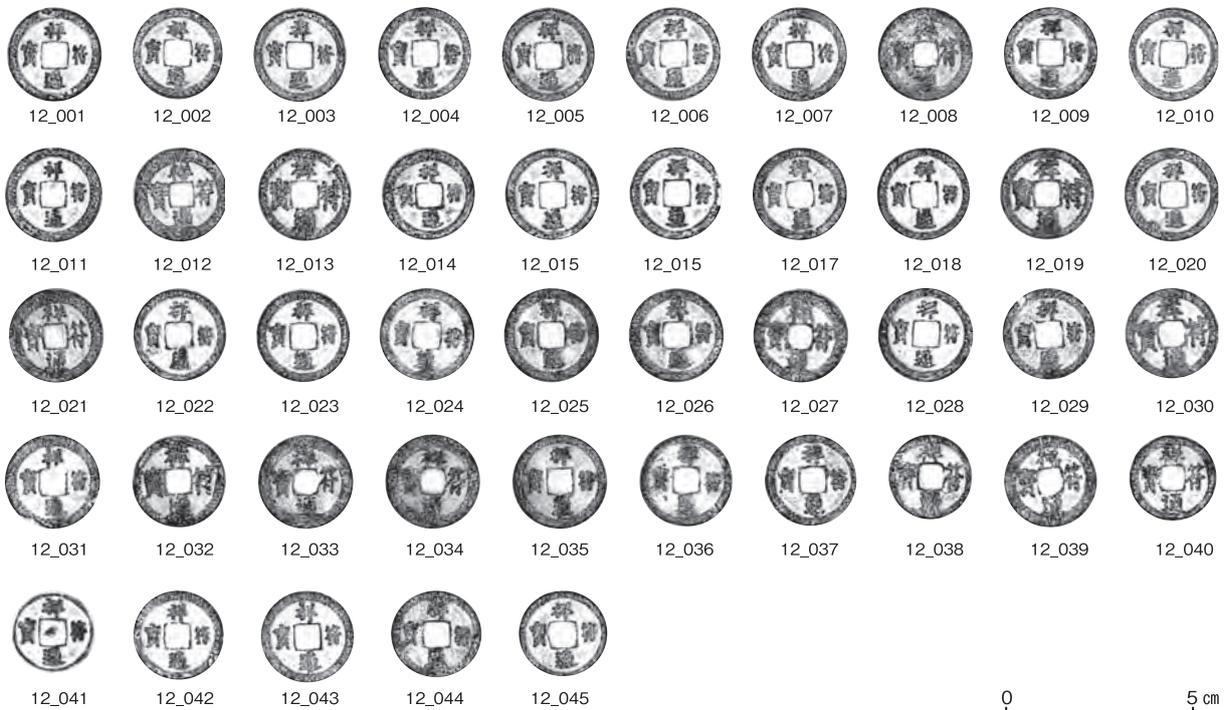


第19圖 出土波來錢貨

11 祥符元寶



12 祥符通寶

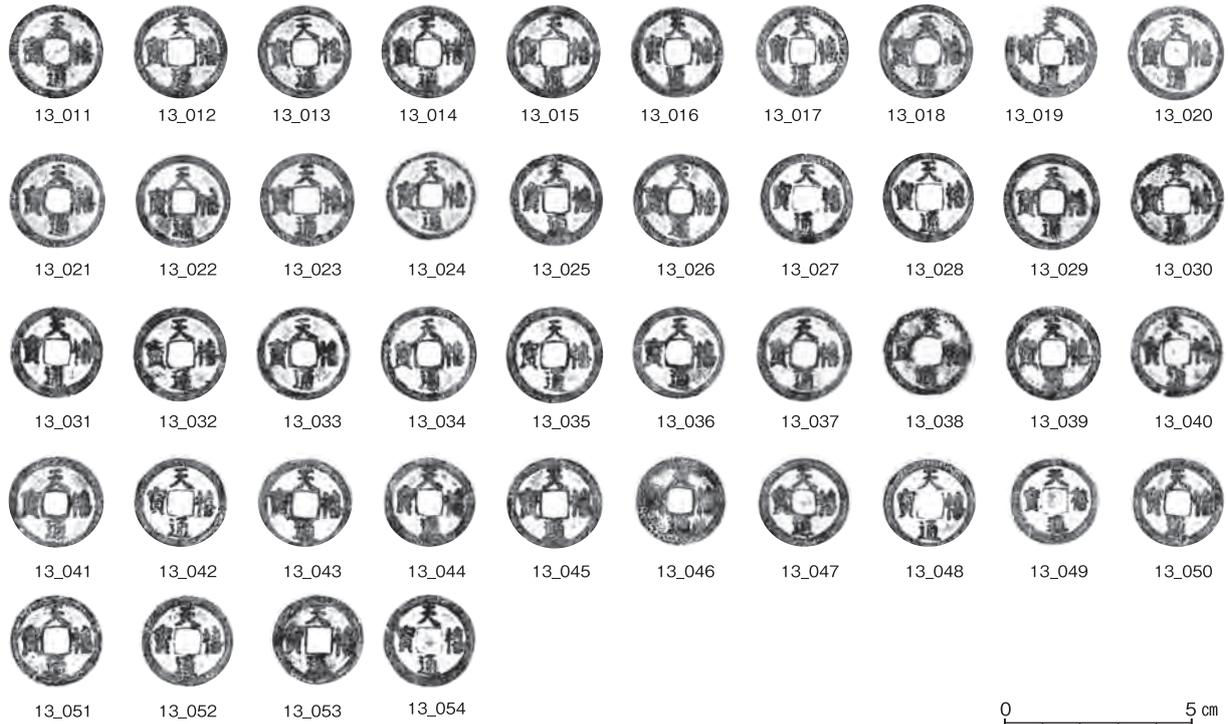


13 天禧元寶

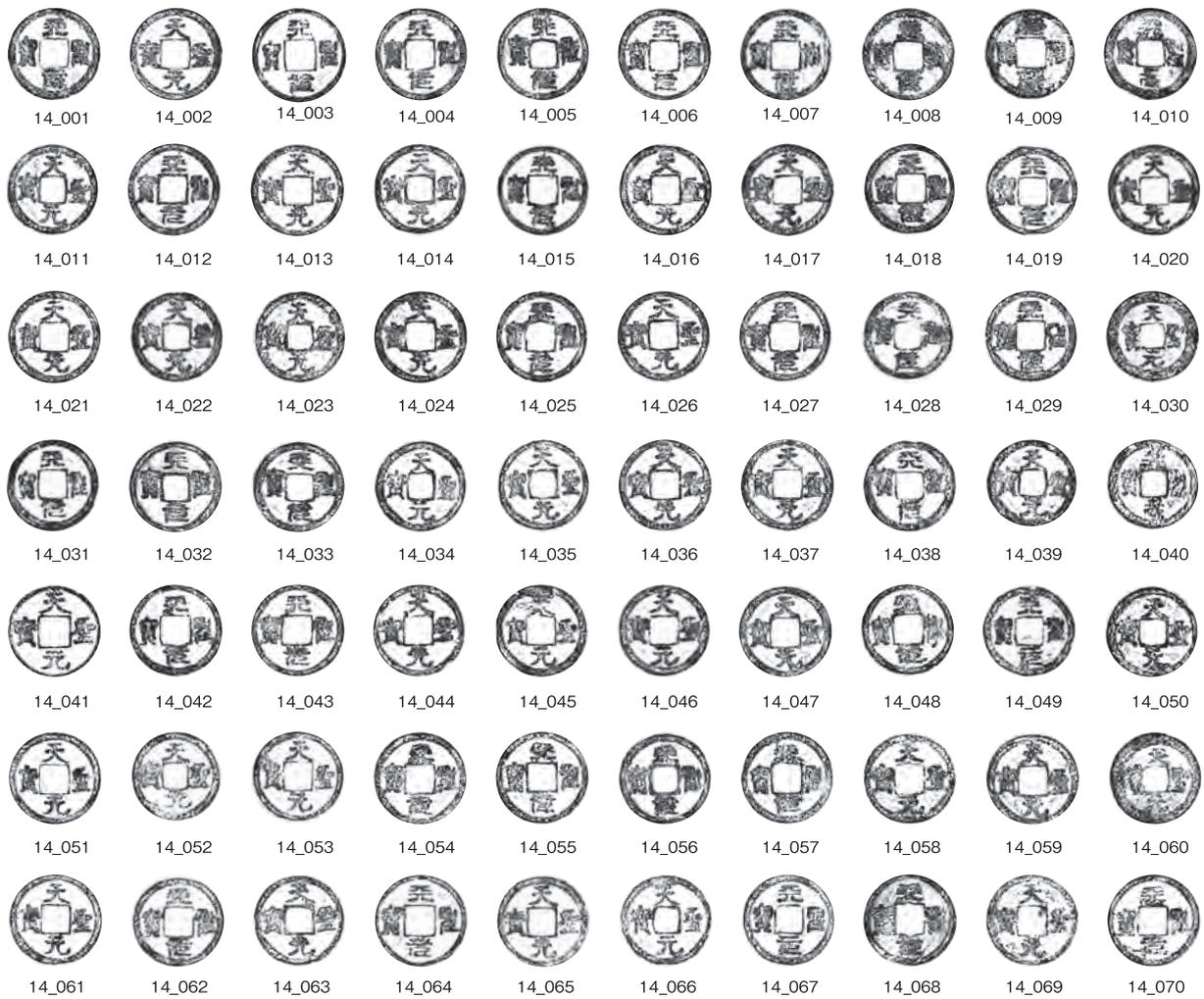


第20圖 出土波來錢貨

13 天禧元寶

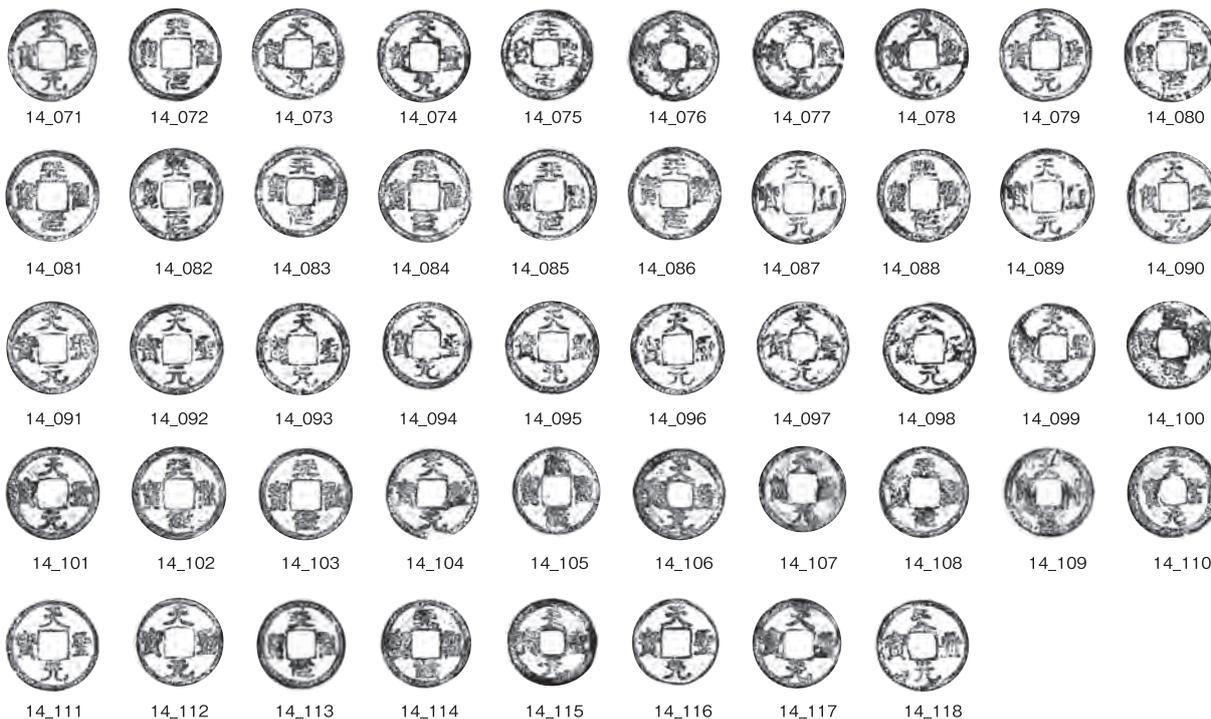


14 天聖元寶

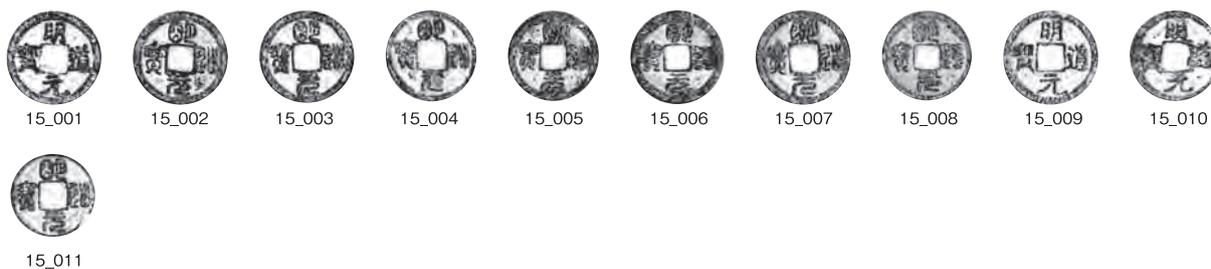


第21圖 出土波來錢貨

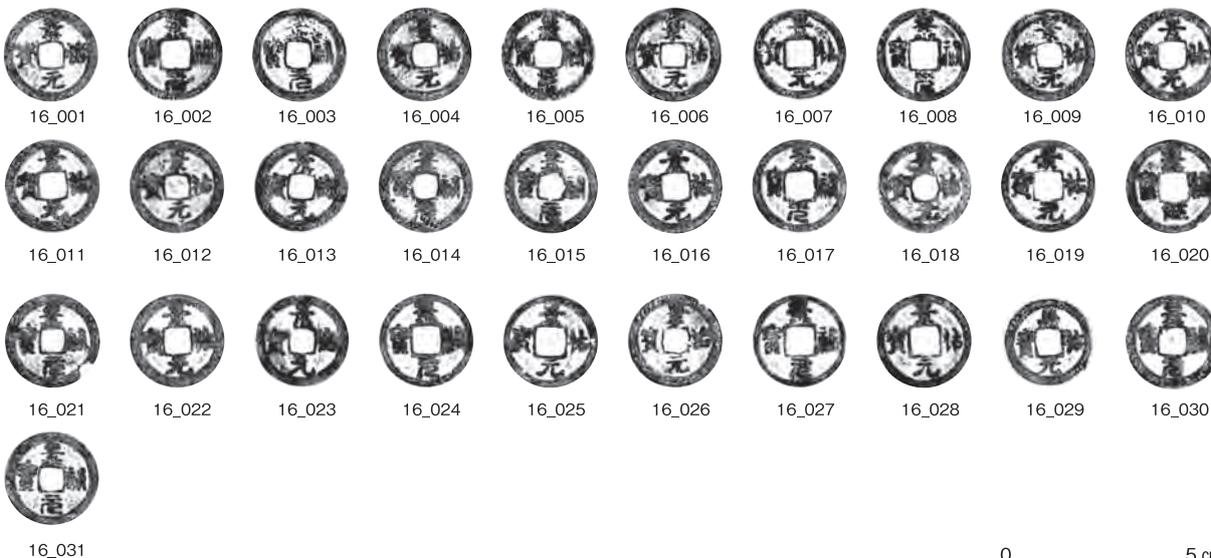
14 天聖元寶



15 明道元寶



16 景祐元寶

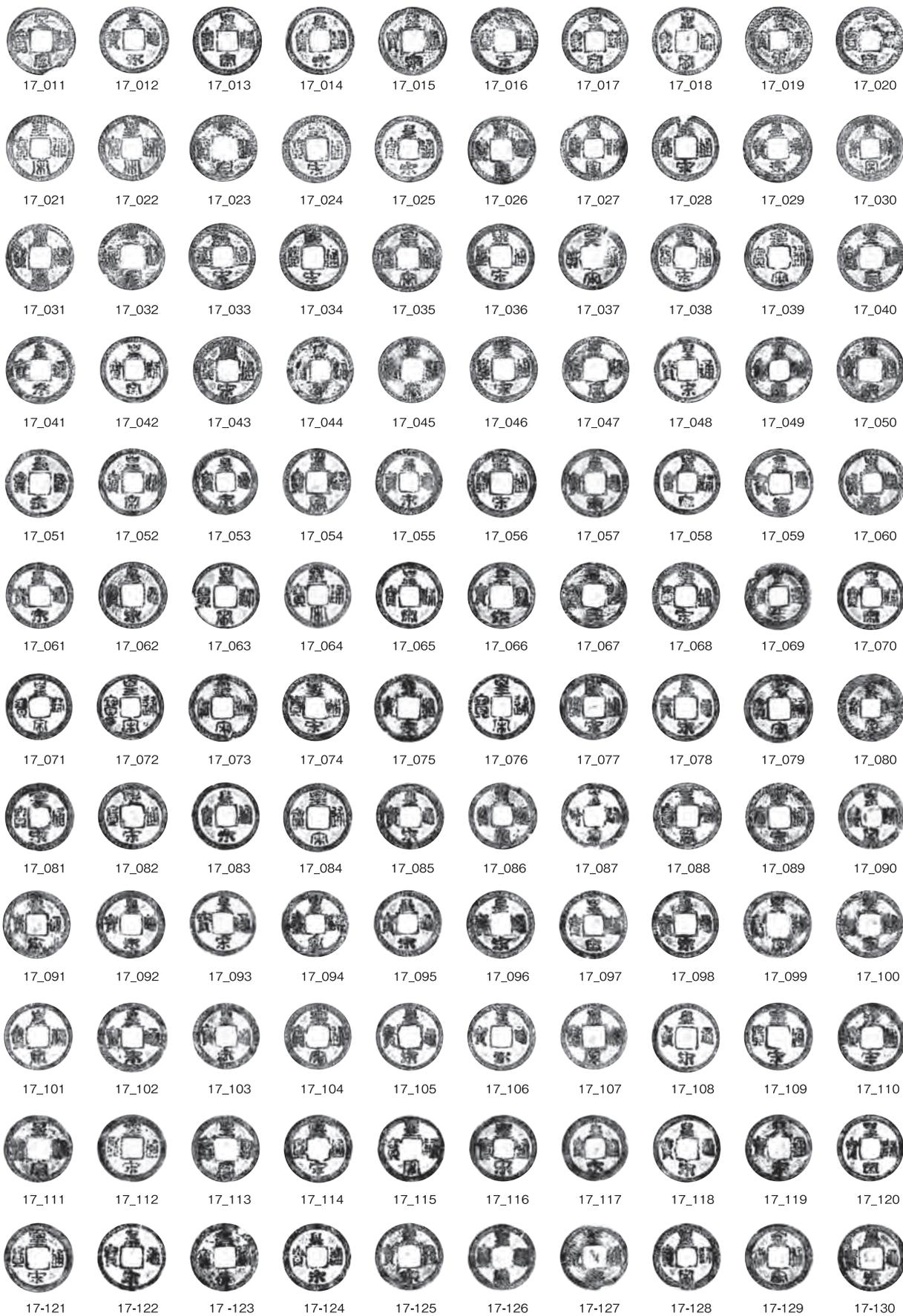


17 皇宋通寶



第22圖 出土宋錢貨

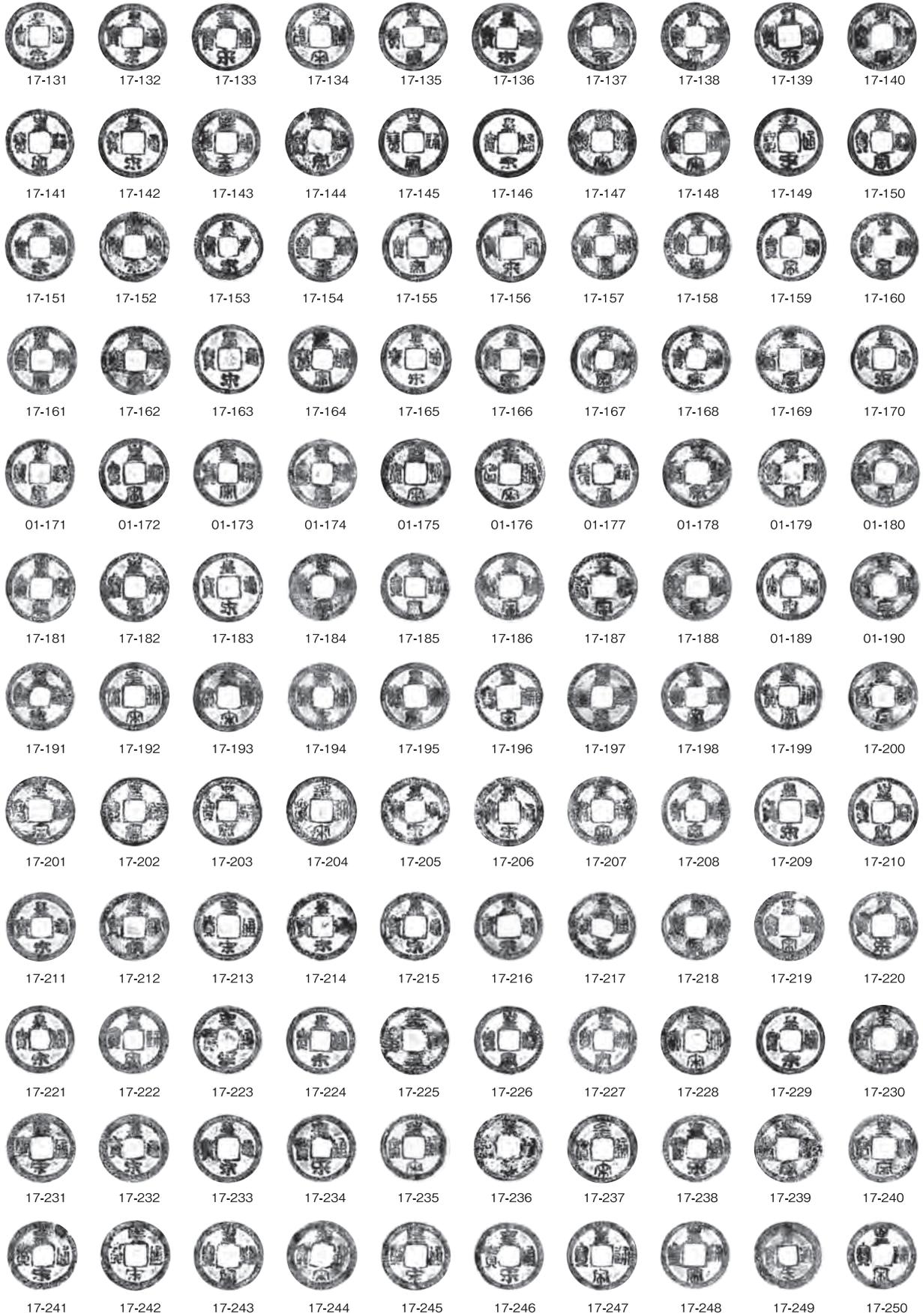
17 皇宋通寶



第23图 出土渡来钱貨



17 皇宋通寶



第24图 出土渡来钱货



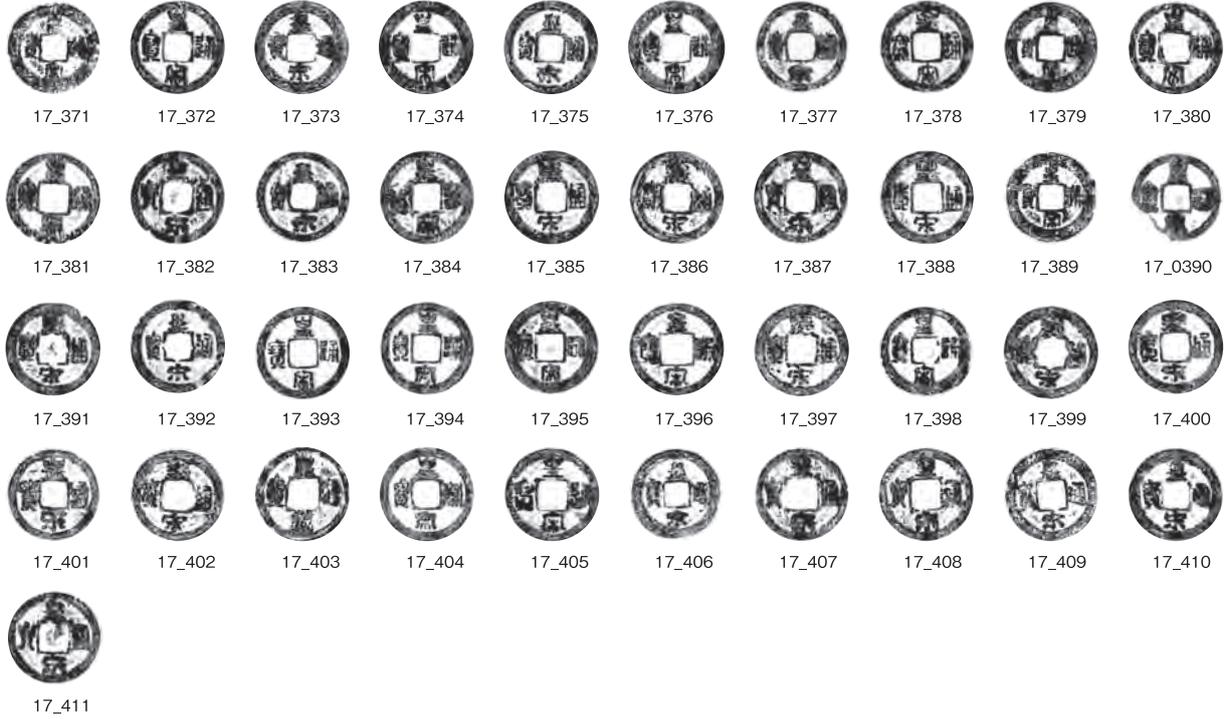
17 皇宋通寶



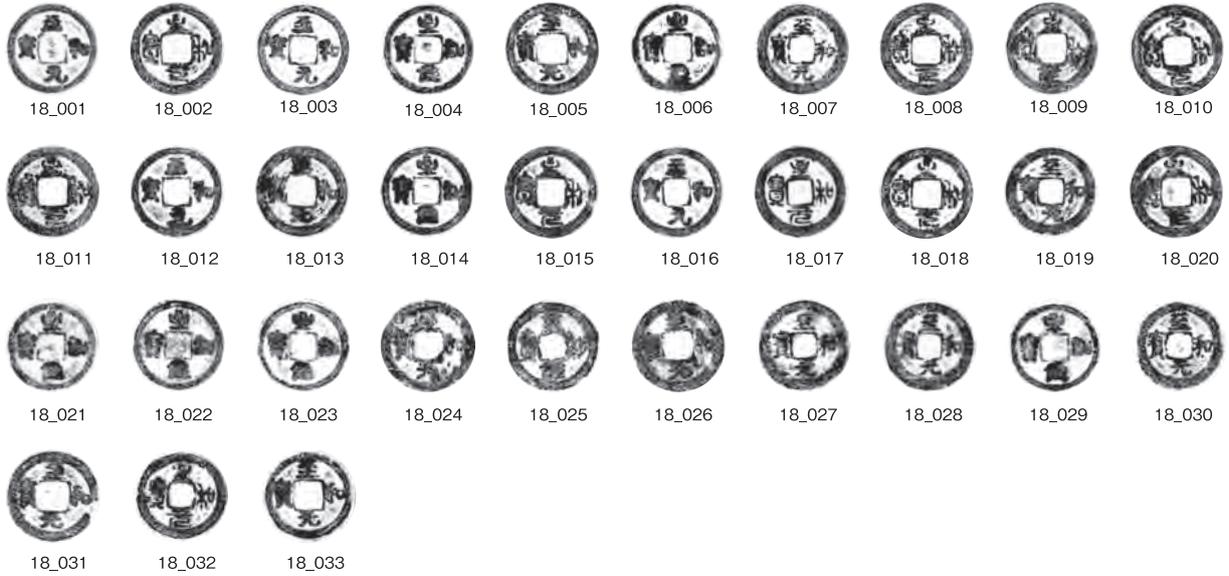
第25图 出土渡来钱貨



17 皇宋通寶



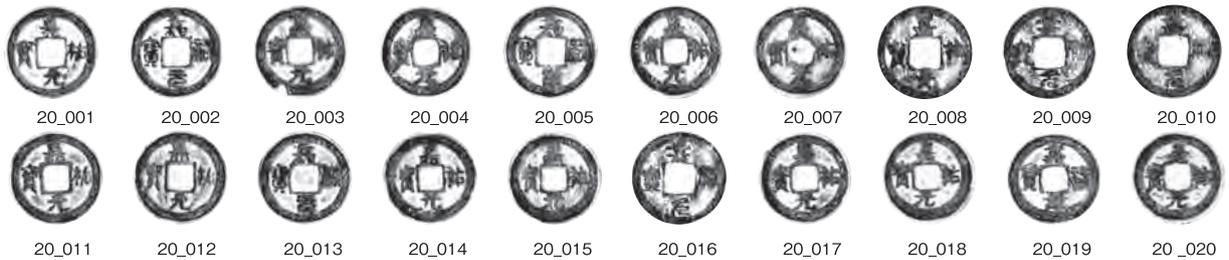
18 至和元寶



19 至和通寶



20 嘉祐元寶



第26圖 出土渡來錢貨

20 嘉祐元寶



20_021

20_022

21 嘉祐通寶



21-001

21-002

21-003

21-004

21-005

21-006

21-007

21-008

21-009

21-010



21-011

21-012

21-013

21-014

21-015

21-016

21-017

21-018

21-019

21-020



21-021

21-022

21-023

21-024

21-025

21-026

21-027

21-028

21-029

21-030



21-031

21-032

21-033

21-034

21-035

21-036

21-037

21-038

21-039

21-040



21-041

21-042

21-043

21-044

21-045

21-046

21-047

21-048

21-049

21-050



21-051

21-052

21-053

21-054

21-055

21-056

21-057

22 治平元寶



22_001

22_002

22_003

22_004

22_005

22_006

22_007

22_008

22_009

22_010



22_011

22_012

22_013

22_014

22_015

22_016

22_017

22_018

22_019

22_020



22_021

22_022

22_023

22_024

22_025

22_026

22_027

22_028

22_029

22_030



22_031

22_032

22_033

22_034

22_035

22_036

22_037

22_038

22_039

22_040



22_041

22_042

22_043

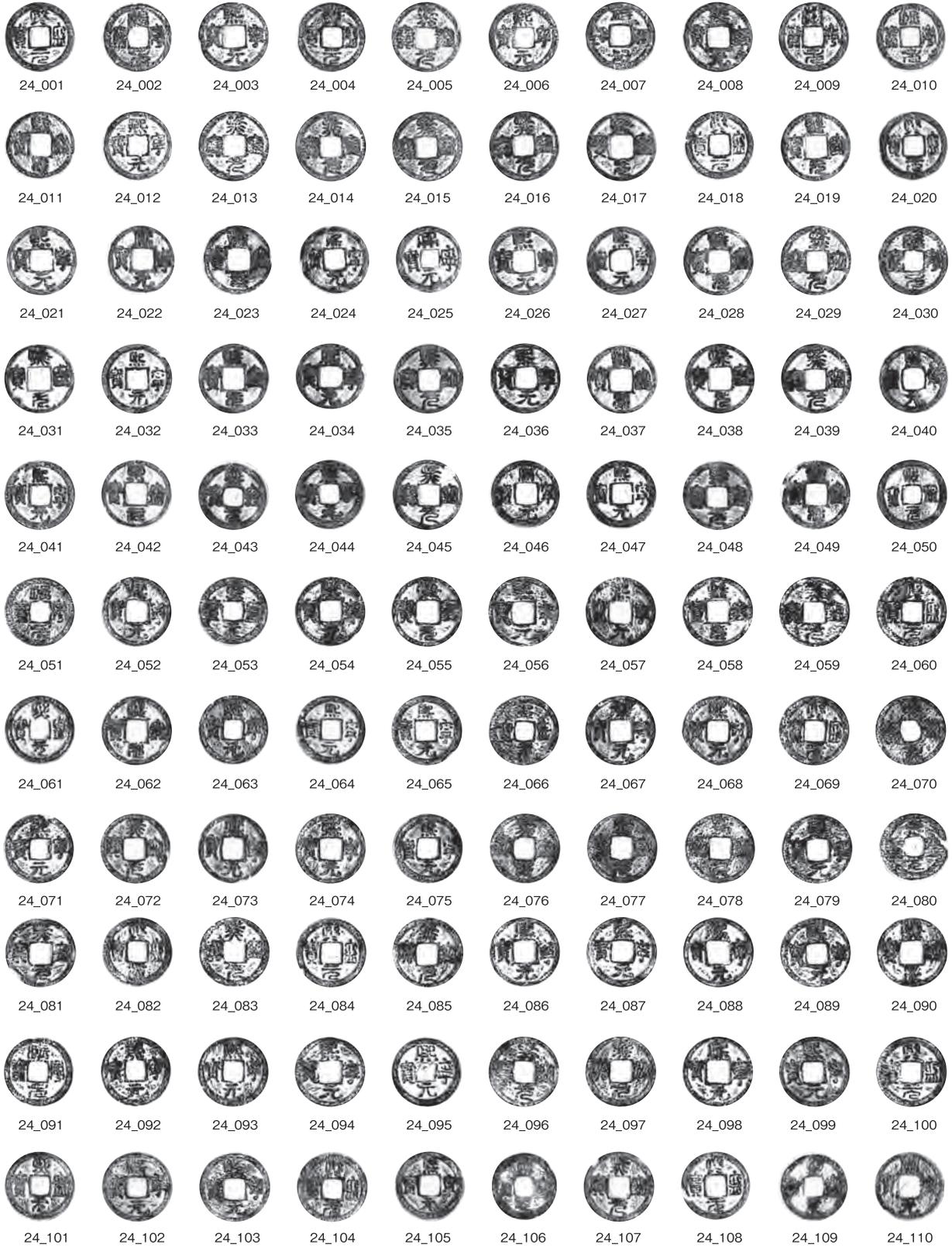


第27圖 出土渡來錢貨

23 治平通寶



24 熙寧元寶



第28圖 出土渡來錢貨

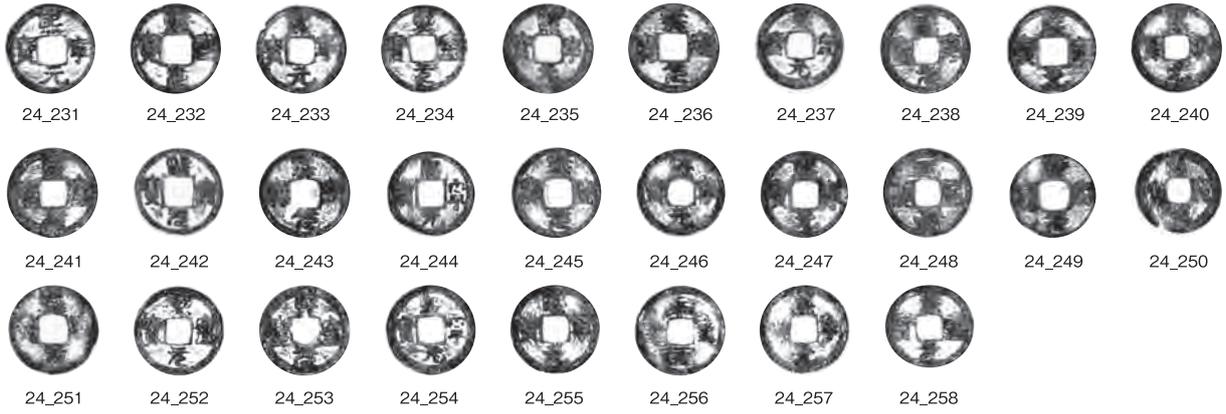
24 熙寧元寶



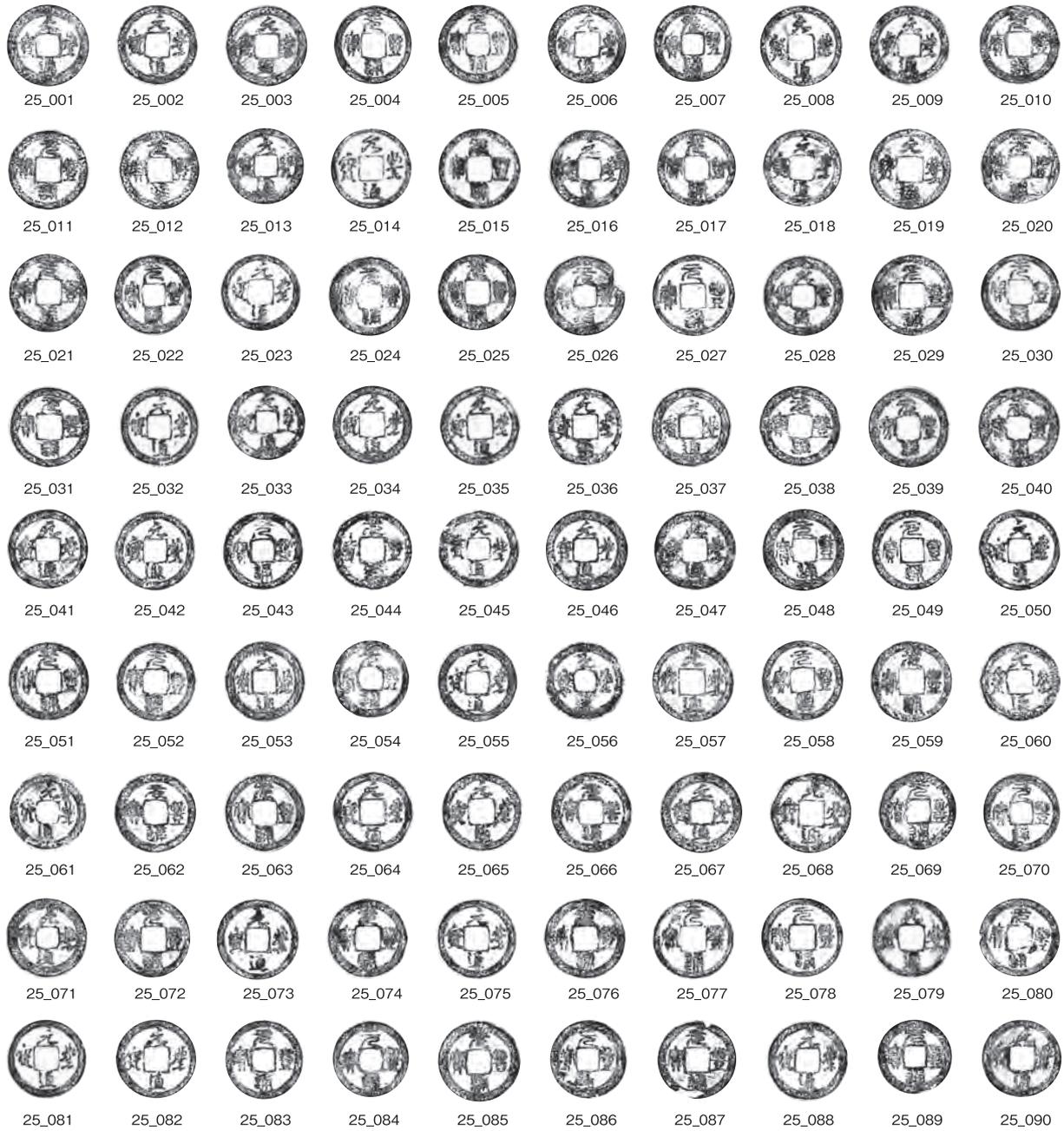
第29圖 出土波來錢貨



24 熙寧元寶

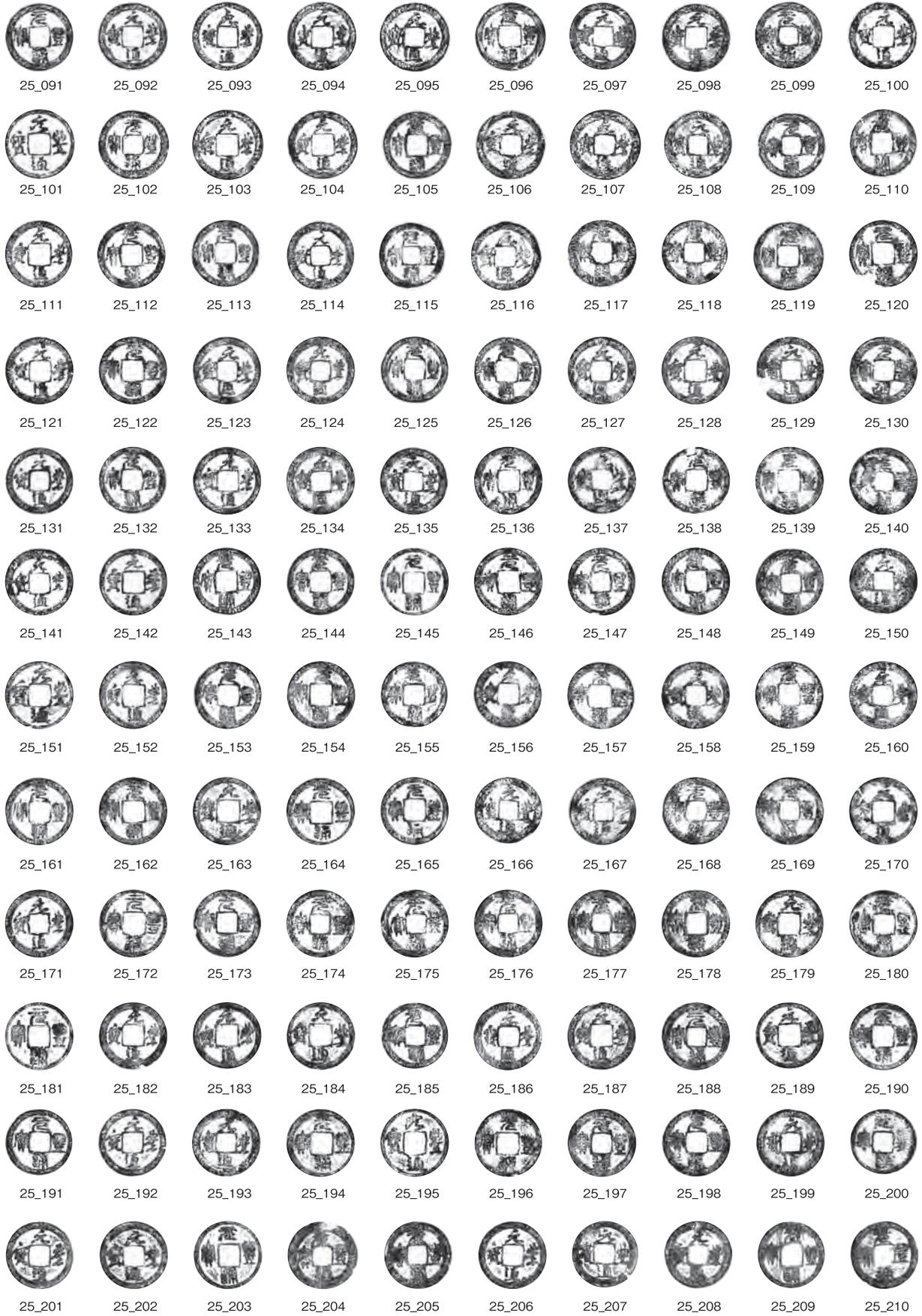


25 元豐通寶



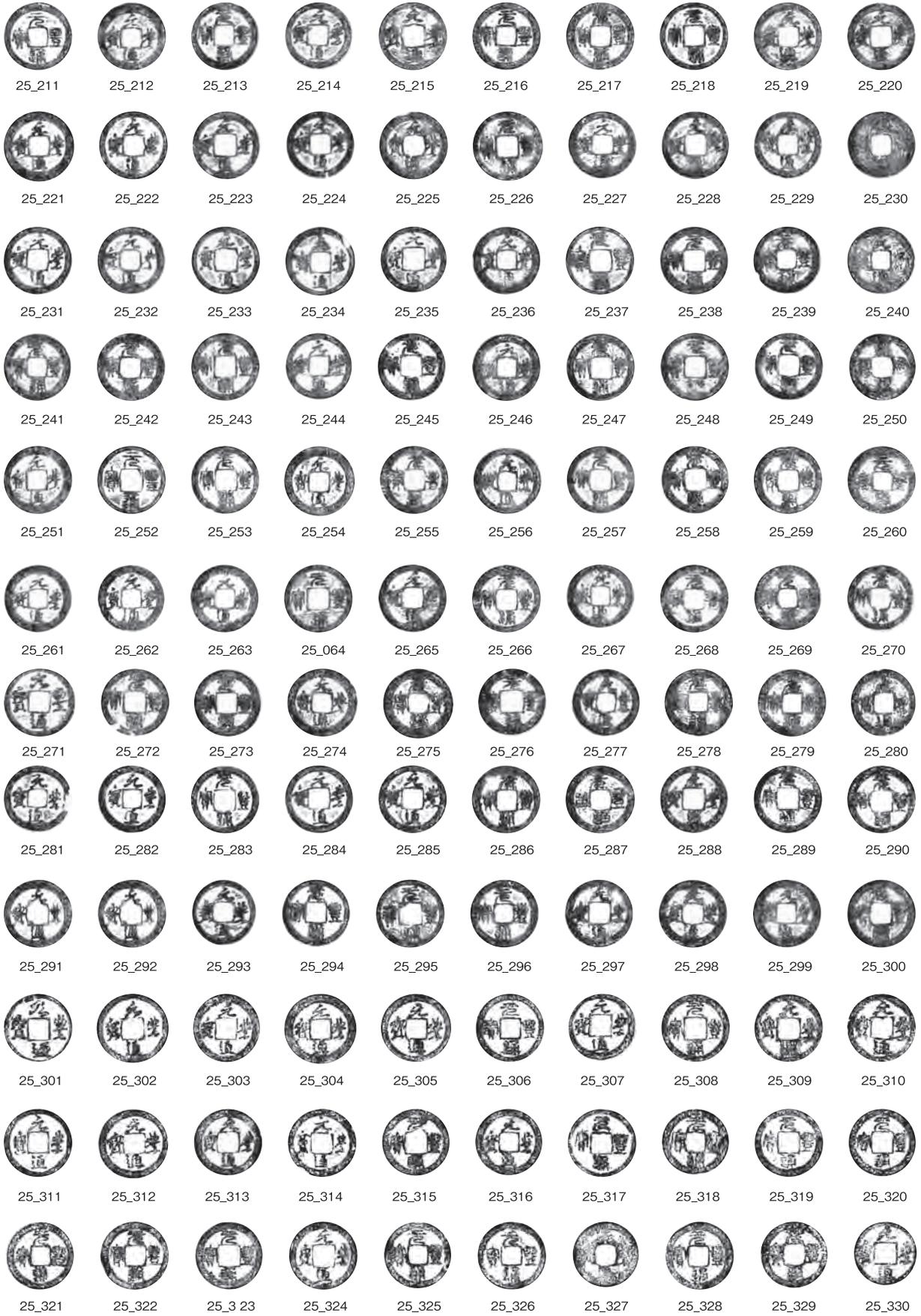
第30圖 出土波來錢貨

25 元豐通寶



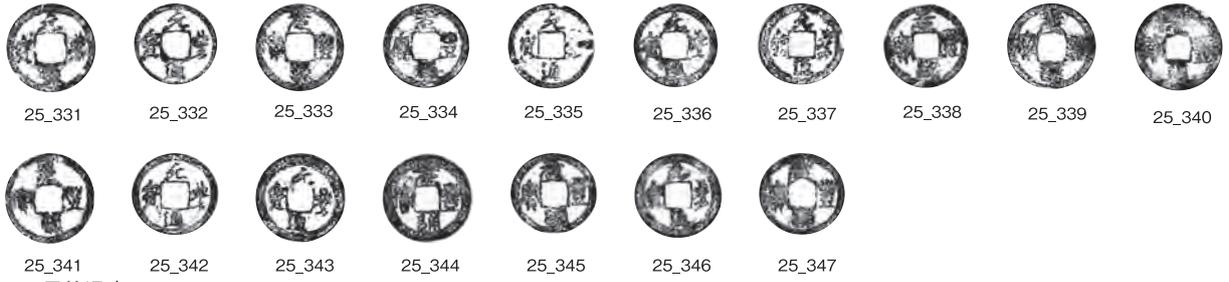
第31圖 出土波來錢貨

25 元豐通寶



第32圖 出土波來錢貨

25 元豐通寶

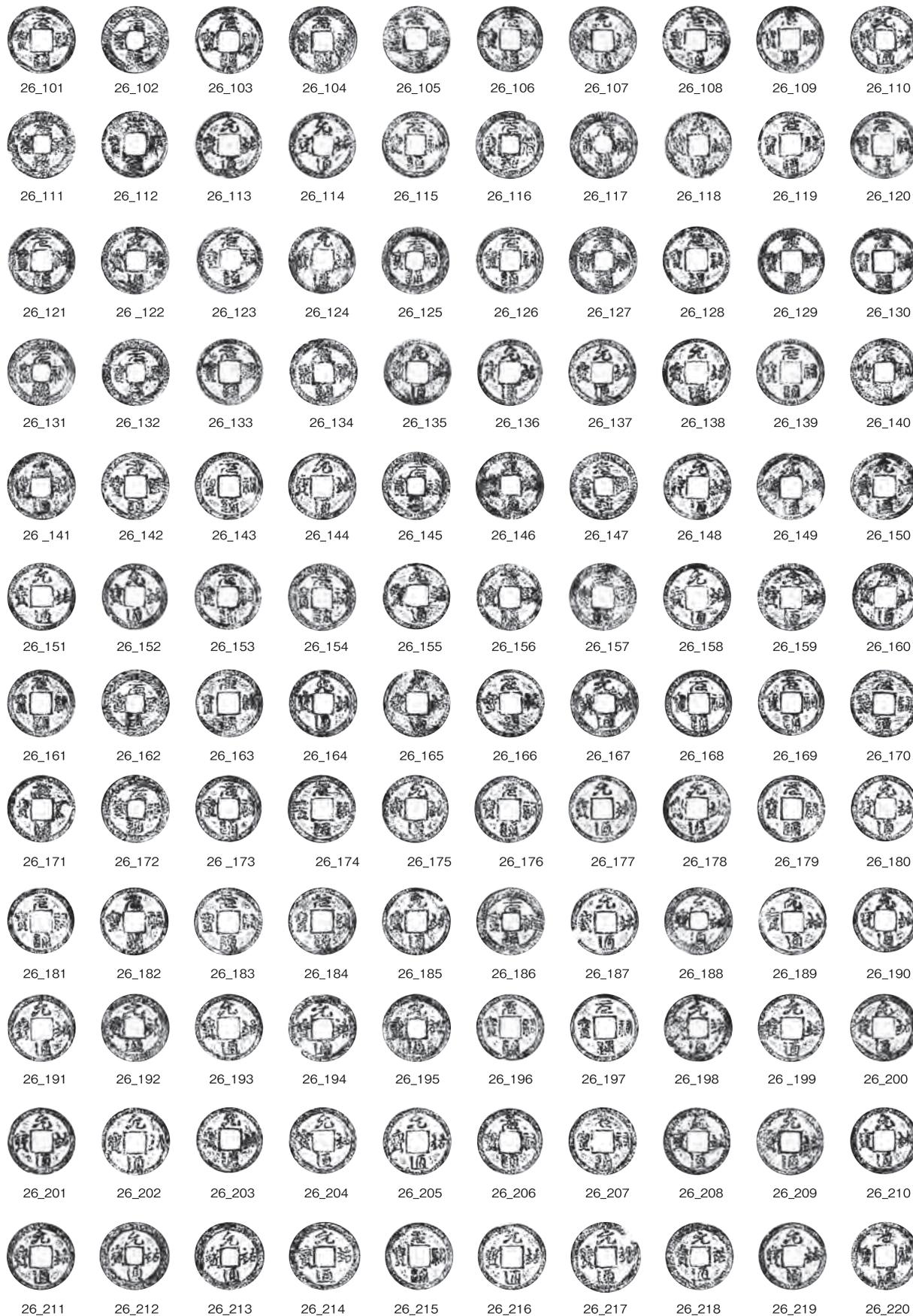


26 元祐通寶



第33圖 出土波來錢貨

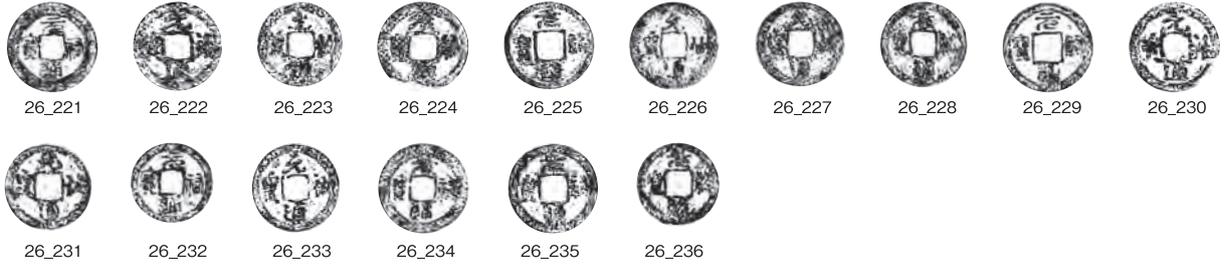
26 元祐通寶



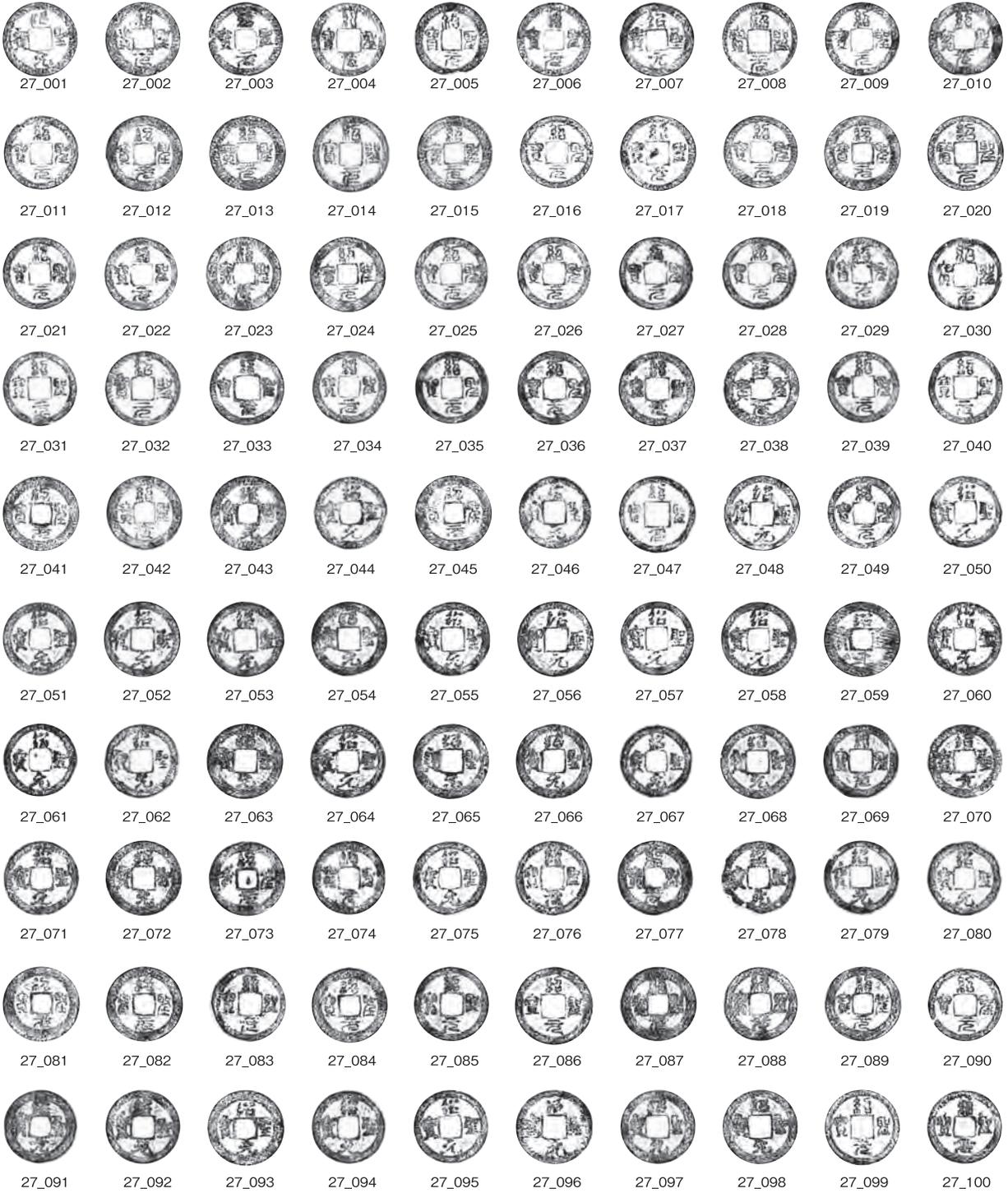
0 5 cm

第34圖 出土波來錢貨

26 元祐通寶

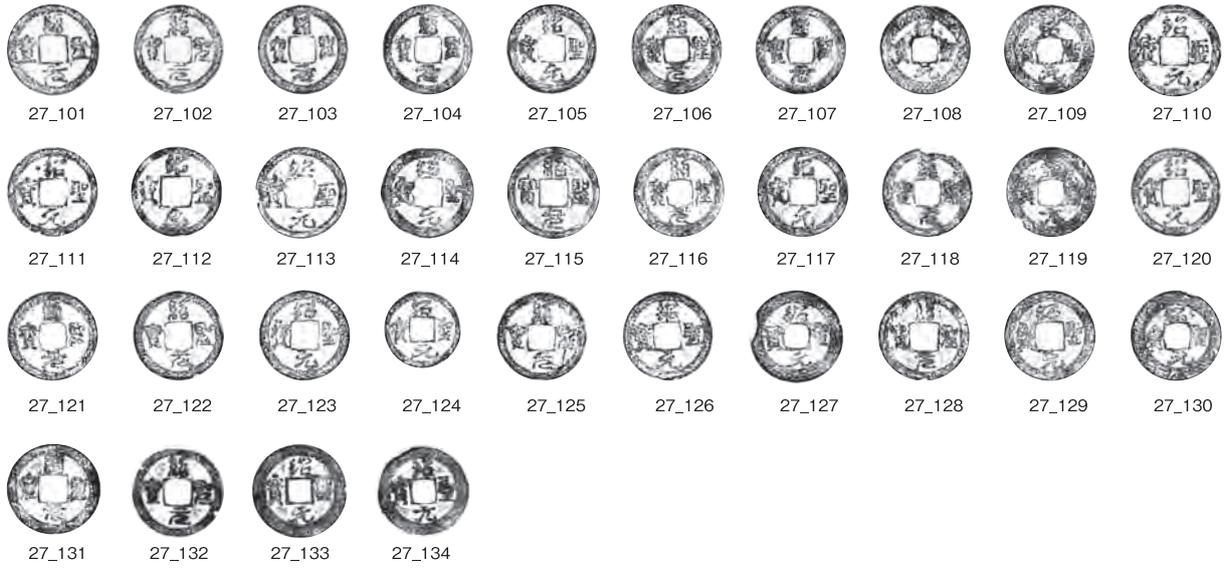


27 紹聖元寶

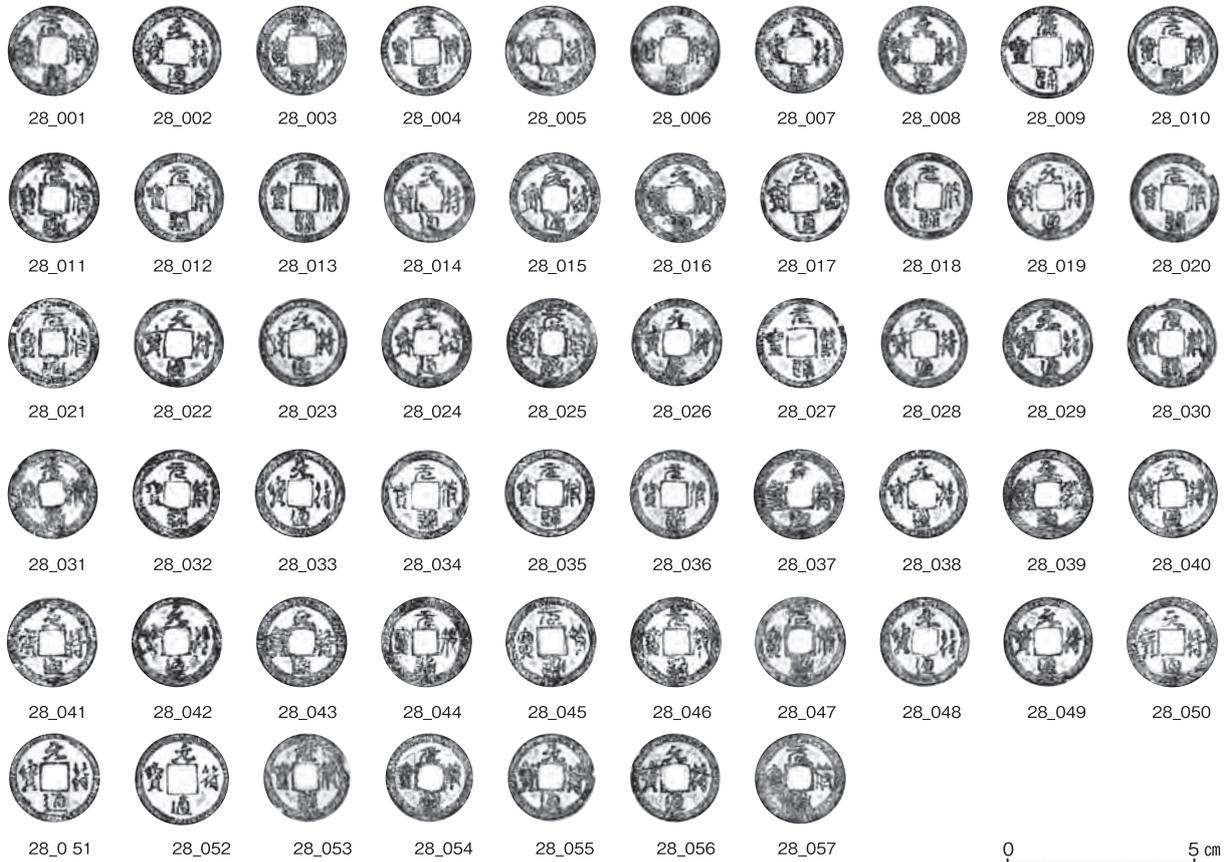


第35圖 出土波來錢貨

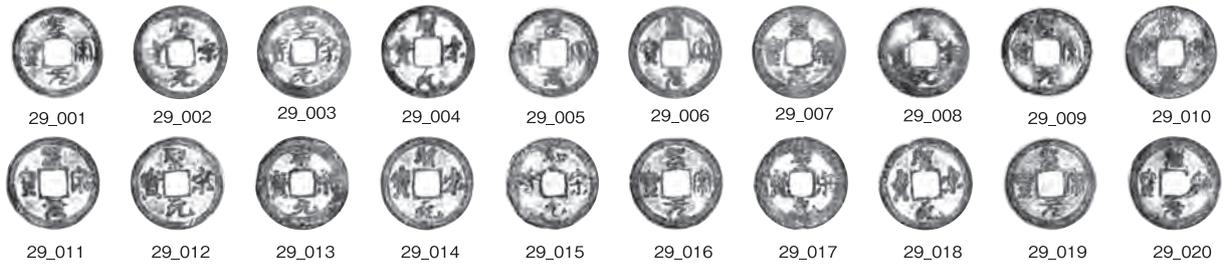
27 紹聖元寶



28 元符通寶

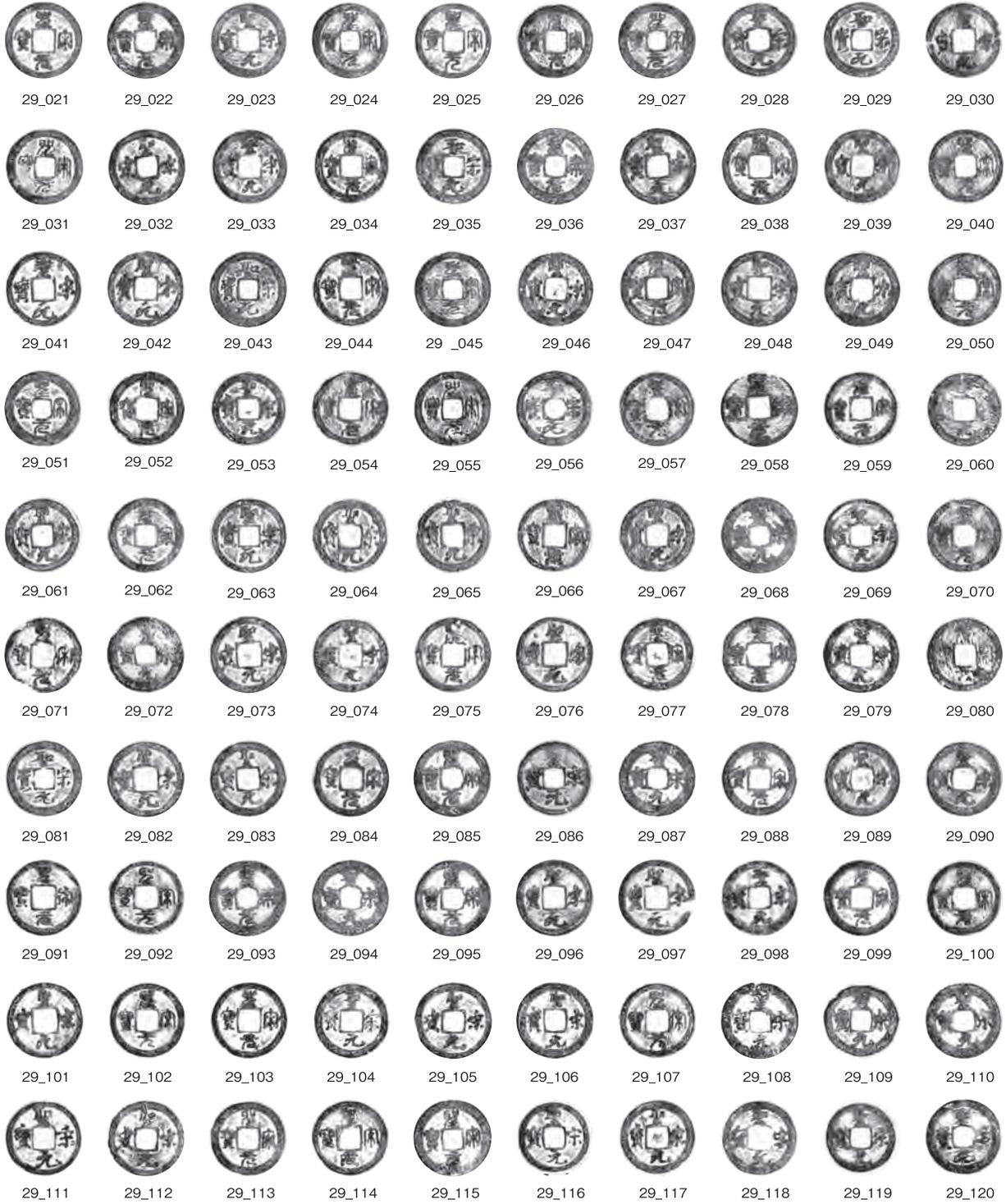


29 聖宋元寶

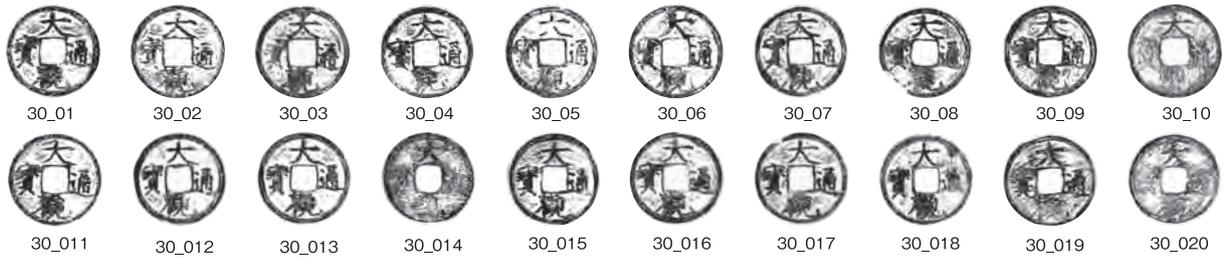


第36圖 出土波來錢貨

29 聖宋元寶



30 大觀通寶

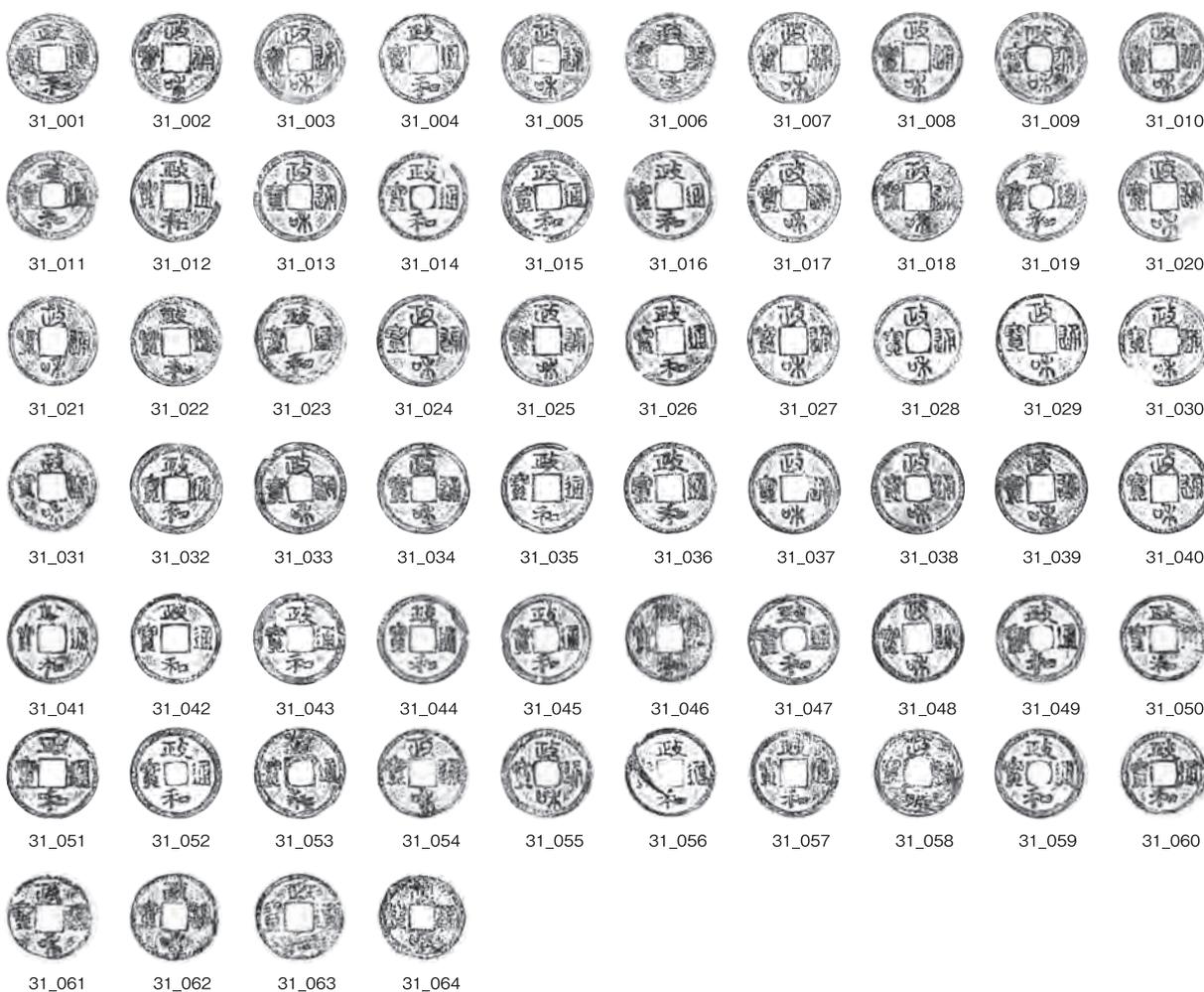


第37圖 出土波來錢貨

30 大觀通寶



31 政和通寶



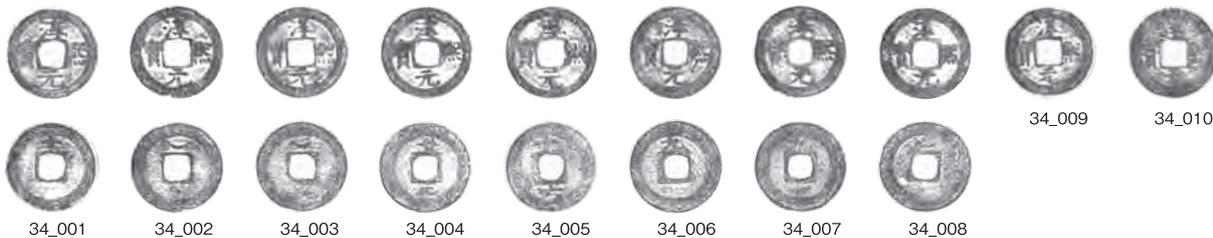
32 宣和通寶



33 紹興元寶



34 淳熙元寶



第38圖 出土波來錢貨

35 紹熙元寶



35_001

35_002

35_003

36 慶元通寶



36_001

36_002

37 嘉泰通寶



37_001

37_002

38 開禧通寶



38_001

38_002

38_003

39 嘉定通寶



39_001

39_002

39_003

39_004

39_005

39_006

39_007

39_008

39_009

39_010



39_011

39_012

39_013

39_014

40 大宋元寶



40_001

41 紹定通寶



41_001

41_002

41_003

42 淳祐元寶



42_001

42_002

42_003

42_004

43 皇宋元寶



43_001

43_002

43_003



第39圖 出土渡來錢貨

44 景定元寶



44_001

45 咸淳元寶



45_001



45_002



45_003

46 大定通寶



46_001

47 大中通寶



47_001

48 洪武通寶



48_001



48_002



48_003



48_004



48_005



48_006



48_007



48_008



48_009



48_010



48_011



48_012



48_013



48_014



48_015



48_016



48_017



48_018



48_019



48_020



48_021



48_022



48_023



48_024



48_025



48_026



48_027



48_028



48_029



48_030



48_031



48_032



48_033



48_034



48_035



48_036



48_037



48_038



48_039



48_040



48_041



48_042



48_043



48_044



48_045



48_046



48_047



48_048



48_049



48_050



48_051



48_052



48_053



48_054



48_055



48_056



48_057



48_058



48_059



48_060



48_061



48_062



48_063



48_064



48_065



48_066



48_067



48_068



48_069



48_070



48_071



48_072



48_073



48_074



48_075



48_076



48_077



48_078



48_079

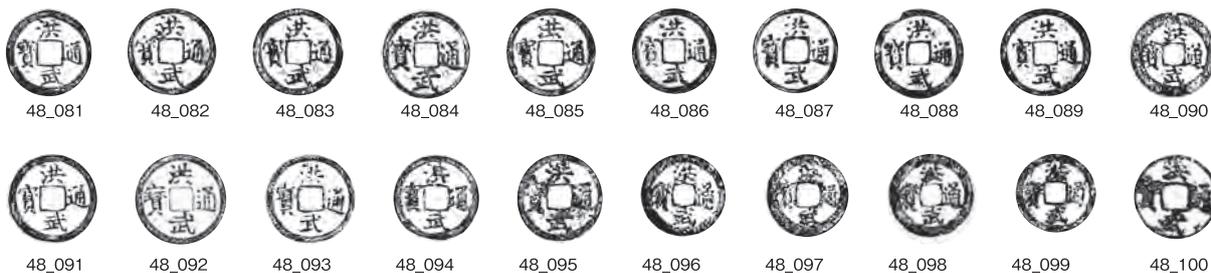


48_080

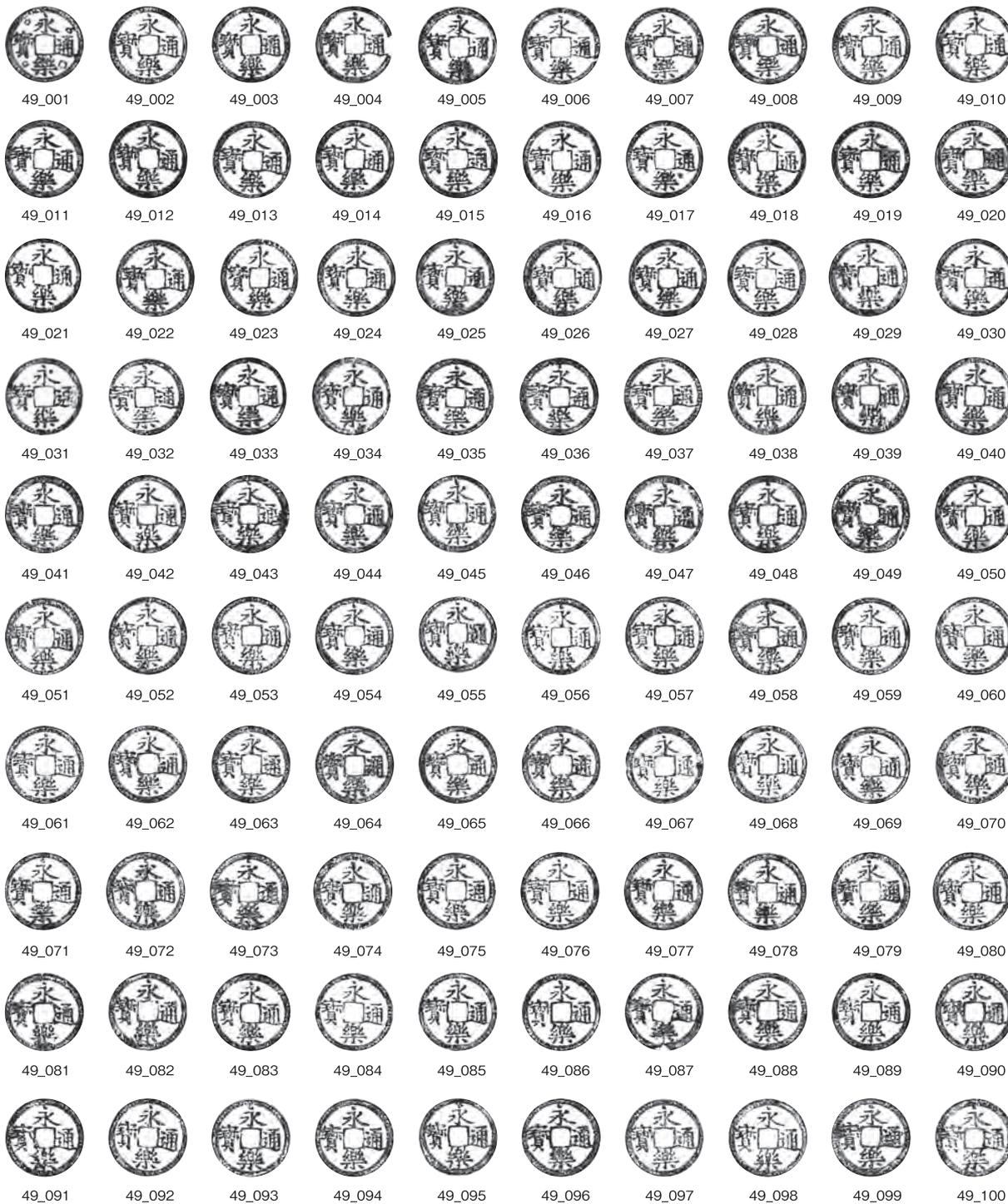


第40圖 出土渡來錢貨

48 洪武通寶



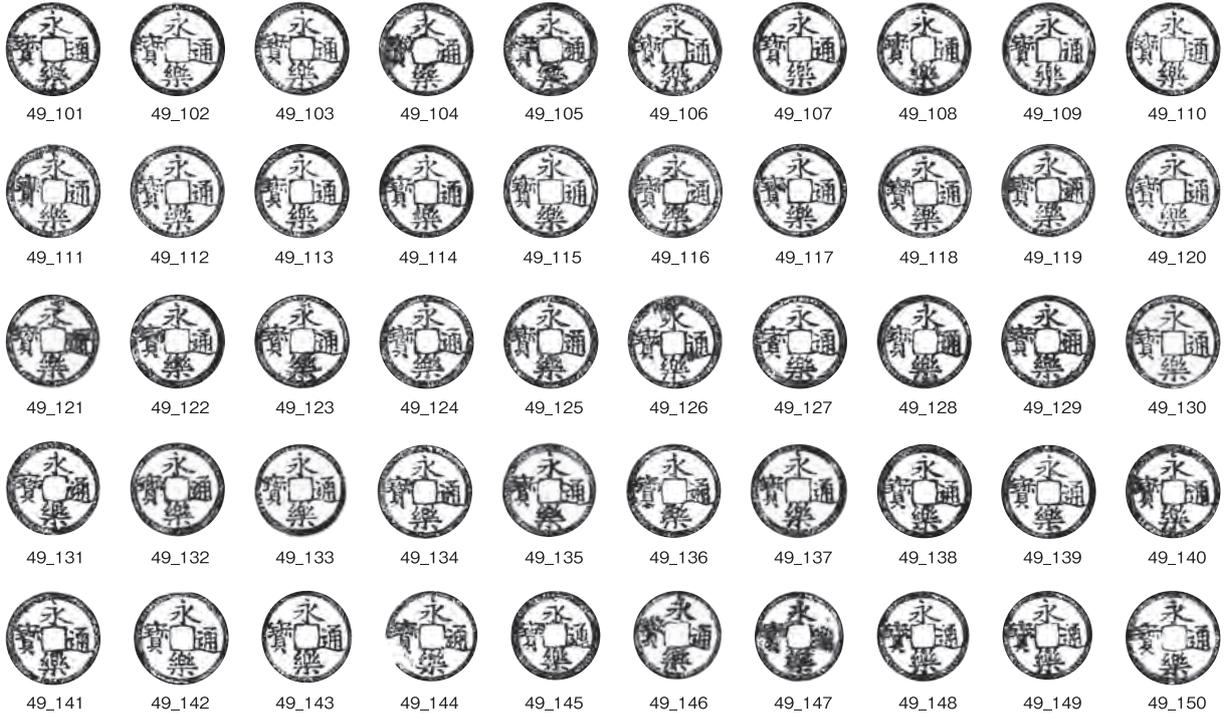
49 永樂通寶



0 5 cm

第41圖 出土渡來錢貨

49 永樂通寶



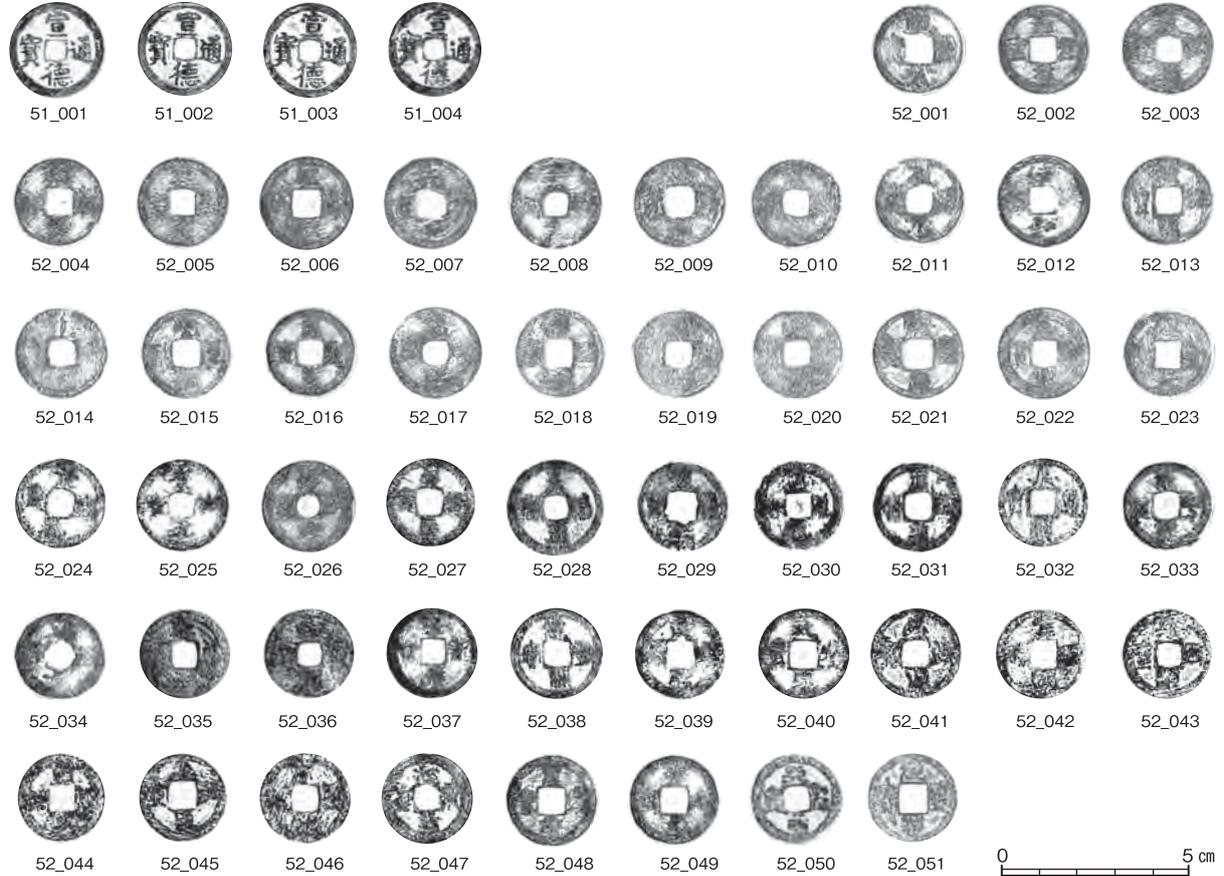
50 朝鮮通寶



51 宣德通寶



52 判読不能



第42図 出土渡来銭貨

第6章 蛭藻金、碁石金の科学調査

1 はじめに

福寺遺跡からは、昭和46年5月に蛭藻金2点、碁石金18点が出土し、現在当館所蔵となっている。

周辺の調査では、日川を挟んだ勝沼氏館跡内郭部において金の生産関連遺物が確認され、その科学調査から金鉱石から金生産を行っていたことや、その不純物が黒川金山遺跡出土の金生産関連遺物に付着した不純物と類似することなどが、現在までに明らかとなってきた¹⁾。

本資料は、甲州金のみならず我が国における金貨幣の成立を考える上で極めて重要な資料であり、重量や金品位、その生産技術などについて、解明する必要がある。

今回、その詳細な科学調査を実施した結果について報告する。

2 調査資料（写真3、第15図）

蛭藻金 2点、碁石金 18点（福寺遺跡出土）

3 調査機器

今回の詳細調査には、下記の山梨県立博物館設置の機器類を使用した。

- ・蛍光エックス線分析装置（XRF）：SEA5230HTW（エスアイアイ・ナノテクノロジー製）
- ・走査型電子顕微鏡（SEM）：Quanta600（日本FEI製）
- ・エックス線マイクロアナライザー（EDX）：EDAX Genesis2000（アメテック製）

4 調査方法

（1）資料の寸法計測

資料の寸法計測を、ミットヨ製ノギスCD-S15Cで縦、横、厚さを各5回計測し、平均を算出した。

（2）密度法による金品位測定

資料を金-銀2成分の合金と仮定した場合、その密度が判明すれば、金の密度 19.32g/cm^3 、銀の密度 10.50g/cm^3 を用いて、金品位の算出が可能である。

そこで、ザルトリウス社製電子天秤CP224Sを用いて質量を5回測定し、その平均値とした。密度は、同天秤に自作の密度計測治具を取り付け、液体に水を使用して測定を5回行い、平均を算出した。密度は、両平均値から算出している。金品位は、西脇らの文献に基づき算出した²⁾。

（3）蛍光エックス線分析による金部分の成分分析

密度法と異なる金の品位測定として、蛍光エックス線分析による資料の定量分析を行った。

分析条件は、管電圧：50kV、管電流：自動、測定時間：300秒、測定範囲：1.8mmφ、表裏面合計5ヶ所に実施した。金品位の定量は、金-銀-銅標準試料RAuA5（ランドリファイナリー社製）を標準試料に使用し、ファンダメンタルパラメータ法により行った。

（4）資料に付着する不純物の成分分析

資料には、その製造過程で分離できなかった不純物の付着を表裏面に確認する。この部分について、蛍光エックス線分析を用いた定性分析を行った。

分析条件は、管電圧：50kV、管電流：自動、測定時間：60秒、測定範囲：1.8mmφ、0.1mmφ、である。

（5）資料に付着する不純物の分布状態の調査

（4）で確認した元素の分布状態を調査するため、SEM-EDXを用いてマッピング分析を行った。

分析条件は、加速電圧：30kV、測定環境：高真空である。

（6）製作技法の解明

江戸時代の小判や大判の製造技術の一つに、色付と呼ばれる技法がある。これは、金-銀合金である金貨において表面付近の銀を薬剤により除去することで、表面付近の金濃度を上げて金貨の色味を高める表面処理技術である³⁾。

今回、本資料における色付技法の有無について、走査型電子顕微鏡により調査した。観察は、加速電圧：15kV、測定環境：高真空、の条件下で行っている。

5 結果及び考察

(1) 資料の寸法計測

各資料の計測値を、表3に示す。

蛭藻金は、その名のとおり蛭藻草の葉の形状に鍛造で加工されている。2点共に、長辺50mm強、短辺24mm前後、厚さ0.8mmである。碁石金は、その形状から型などを用いず固化したとみられる。そのためすべての形状は異なり、厚さにも幅がある。詳細は、写真図版及び表1を確認頂きたい。

(2) 密度法による金品位測定

蛭藻金はほぼ同じ形状であるが、碁石金はすべて異なる。しかし表3のとおり質量は、蛭藻金が共に13g前半、碁石金は13.63～15.75gである。本資料が製造された戦国時代は、各地で量目換算が異なる田舎目であり、甲斐では1両=4匁であった。当時は1匁=3.73gであり、甲斐では1両=14.92gとなる⁴⁾。碁石金の平均は14.58gであり、甲斐での1両にはほぼ等しい。蛭藻金は、平均13.28gのため3.56匁となる。

資料の金品位は、密度法により行った。ただし20点のうち5点については、裏側などの凹みに土壌が付着しており、密度測定で水に浸すと外れる可能性があり、密度計測は実施していない。

その結果、蛭藻金は共に金90wt%以上の高品位の金であり、碁石金も86.1～89.5wt%と品位の高い金であることが判明した。現在までに同様の金貨について比重による調査事例は、西脇らによる騎西城武家屋敷跡出土の上字蛭藻金、方形判金、露金についての調査事例では、上字蛭藻金が84.5wt%以上、方形判金86.8wt%以上、露金90.5wt%以上と報告されている²⁾。

(3) 蛍光エックス線分析による金部分の成分分析

(2)では密度による金品位の計測を行ったが、他の方法として蛍光エックス線分析により、定量分析を行った。

Au-Ag-Cu標準資料を元にファンダメンタルパラメータ法を用いた定量分析結果を、表3に示す。蛭藻金は2点とも90wt%以上、碁石金も86.8～93.9wt%（平均90.7wt%）の高品位の金であることが確認された。分析では、残りはほとんど銀であり、銅は1wt%も含まれていない。

江戸時代の小判は金-銀合金であり、大判は金-銀-銅合金である。大判・小判とも、その成分比は幕府によって管理され、大判には銅が少量添加されていた。本資料に含まれる銅は、不純物として混入したものと考えられる。

(4) 資料に付着する不純物の成分分析

各資料の表裏面には、様々な物質が付着する。特に、碁石金の裏面に付着する黒色を中心とする不純物質は、碁石金の製作過程で分離できなかったものである。この物質は、原料の金に由来に影響するものと考えられその不純物の元素を調査することで、金の入手方法やその産地情報などの解明の手がかりとなる可能性や、生産における添加物の情報を得る可能性が考えられた。そこで、蛍光エックス線分析で不純物の定性分析を行った。その結果を表3に示す。

金は、川の土砂に含まれる砂金、土中の金である柴金、金鉱石から分離する山金に区分される。砂金では、含まれる不純物は水や酸素の影響により分離されるため、純度の高い金が獲られやすい。そのため砂金に付着する不純物は、主に石英や砂鉄などである。山金では、金鉱石には様々な鉱物が不純物として含まれるため、その分離が必要となる。この工程を、一般に製錬と呼ぶ。本資料の中でも碁石金は、この工程にかなり近い状態と考えられ、不純物が一部金に付着すると考えられた。不純物は不均一であり、部分ごとに含む元素が異なるとみられる。そこで各資料の不純物を数ヶ所分析し、確認した鉱物由来とみられる特徴的な元素を、表3に示した。

蛭藻金の両面（鋳目、石目）に付着する物質を調査した結果では、鉄以外に目立った元素は確認できなかった。一方、碁石金では鉱物由来とみられる元素を確認した。中でも共通して確認する元素は、ビスマスである。他にも、タングステンや鉛、テルルなどを一部分から確認する。これら元素は鉱物由来の元素

類であり、本資料が金鉱石から生産された有力な証拠となりうるものである。

筆者は、黒川金山遺跡と梓久保金山遺跡出土の生産関連遺物に付着する金粒子の分析により、前述の元素を確認している。特にビスマスは多数の資料で共通して確認しており、山梨県北部から長野県にかけての金峰山周辺の金山に共通する元素として認識している。他の元素も共通性がみられるため、碁石金は金峰山周辺から産出した金から製造された可能性が高いと考えられた¹⁾。

(5) 資料に付着する不純物の分布状態の調査

各資料の不純物付着部分における元素分布状態について、SEM-EDXのマッピング分析によって調査した結果を写真4～23に示す。カラー顕微鏡画像とSEMによる二次電子像と反射電子像、EDXを用いた各元素のマッピングを示すが、不純物物質では基本元素として鉄やケイ素を確認する。また、多くの資料とその部位でその周辺にビスマスの付着が確認されている。特徴的な元素の一つがタングステンであり、この物質は高融点のため当時の技術では熔融できず粒子状態が確認された。同じ部位にカルシウムを確認し、タングステンカルシウムとみられた。鉱物では灰重石と呼ばれ、金峰山周辺の鉱山で産出する鉱物として知られている。

不純物部位には様々な元素が付着しており、この状態からも金生産においては入手段階に近い資料と考えられた。

(6) 製作技法の解明

筆者は、これまでに天正大判の前身といわれる金貨である上代判金（東京大学経済学図書館蔵）の調査で、表面処理の一つである「色付」を確認し、報告した⁵⁾。その資料より時代が遡る本資料の調査結果では、蛭藻金2点で色付となる証拠を確認した（第43図）。蛭藻金の両面に数ミクロンの極微小な穴を多数したことは、紛れもない証拠である。一方、碁石金では同様の跡は確認されない。

蛭藻金は碁石金と共に出土したが、同じ場所で製造されたかは判断できない。（2）において、蛭藻金の両目が碁石金と異なる点でも、碁石金と異なる地域で製造された可能性が伺われる。さらに、不純物の分析では碁石金と異なる状態であることが今回明らかとなった。

よって、本資料が甲斐で生産された資料か、他で製造され持ち込まれた資料か検討の必要があろう。

6 おわりに

今回、福寺遺跡から過去に出土した重要資料である蛭藻金2点、碁石金18点について、科学調査を行った結果について報告した。その調査から、資料の金品位が非常に高いことや、質量に対する基準の存在が伺われた。

不純物の分析では、碁石金が金鉱石から生産された金を基に製造されており、不純物を多く含むことから、生産の初期状態を示すことや、その金の生産源が山梨県北部地域とみられる可能性を示唆する結果となった。これは、勝沼氏館跡出土金生産関連遺物との共通性からも今後更なる検討が必要と言えよう。

また、金貨の製作技法では「色付」と呼ばれる技法が蛭藻金に行われていることを確認した。本技法が確認された現時点における極初期の事例と考えられる。本技法の日本への導入時期などは不明確であり、今後同様の事例を増やし、検討を重ねる必要がある。

本調査から、本資料は戦国期の金生産に係わる極めて重要な資料として、改めて認識した次第である。

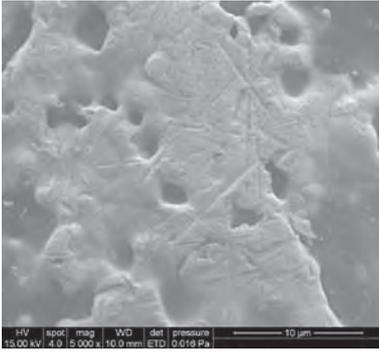
注

- 1) 山梨県立博物館 2011 『甲斐金山における金生産に関する自然科学的研究』
- 2) 西脇 康、今村 徹 2004 「小判品位の完全非破壊分析法」『計量史研究』26(1)
- 3) 伊藤博之 2003 「小判の製法と復元」『鉱山金属文化』2
- 4) 岩田重雄 1979 「近世における質量標準の変化」『計量史研究』1(1)
- 5) 杓名貴彦 2013 「東京大学経済学図書館蔵の古金銀貨幣の科学調査について」『東京大学経済学部資料室年報』3

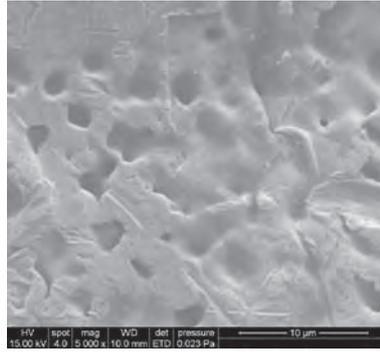
表3 甲州金の調査結果一覧

資料 NO.	1. 各計測値			2. 密度法による金品位測定結果				3. 蛍光エックス線分析による 定量分析結果			4. 蛍光エックス線分析で確認した 付着不純物に含まれる特徴的な元素
	長辺長 (mm)	短辺長 (mm)	厚 (mm)	質量 (g)	密度	金品位* (wt%)	Au (wt%)	Ag (wt%)	Cu (wt%)		
01	51.1	23.8	0.8	13.41	17.84	90.1	91.3	8.5	0.2	鉄	
02	51.5	24.2	0.8	13.15	18.39	94.0	94.1	5.7	0.2	鉄	
03	24.6	14.7	4.5	13.64	17.75	89.5	91.6	8.1	0.3	タングステン、カルシウム	
04	19.6	15.6	5.1	15.75	17.56	88.1	89.6	10.0	0.4	ビスマス、鉛、タングステン、ヒ素	
05	21.5	17.9	3.8	14.31	17.29	86.1	92.2	7.6	0.2	ビスマス、テルル	
06	22.3	15.9	4.8	15.17	17.61	88.4	91.2	8.7	0.1	ビスマス、ヒ素	
07	17.0	15.5	4.6	13.92	不明**	**	91.3	8.4	0.3	ビスマス、鉛、	
08	19.4	14.0	6.0	13.63	17.53	87.8	89.3	10.4	0.3	ビスマス、テルル	
09	22.3	17.0	4.1	14.53	不明**	**	86.8	12.9	0.3	ビスマス、タングステン、テルル	
10	23.7	13.6	5.1	14.47	不明**	**	90.7	8.9	0.4	ビスマス、タングステン、鉛	
11	18.9	18.1	4.3	14.87	17.46	87.3	90.7	9.0	0.3	ビスマス、鉛	
12	18.1	15.0	5.5	14.18	不明**	**	89.1	10.7	0.2	ビスマス、鉛	
13	20.1	17.1	4.1	14.31	17.44	87.2	91.1	8.6	0.3	ビスマス、テルル	
14	20.5	19.1	3.5	15.09	17.52	87.7	93.9	5.9	0.2	ビスマス	
15	19.2	17.4	4.7	13.75	17.68	88.9	90.7	9.1	0.2	ビスマス、タングステン、トリウム	
16	23.5	15.1	4.4	14.77	17.44	87.2	90.5	9.4	0.1	ビスマス、タングステン、ヒ素	
17	23.6	14.8	5.2	14.73	17.62	88.5	91.7	8.1	0.2	ビスマス、タングステン、ヒ素	
18	22.1	15.4	4.3	15.26	不明**	**	89.3	10.4	0.3	ビスマス	
19	19.2	17.0	4.2	14.43	17.43	87.1	90.4	9.1	0.5	ビスマス、鉛、テルル	
20	19.1	17.0	4.2	15.64	不明**	**	92.1	7.7	0.2	ビスマス、タングステン、ヒ素	

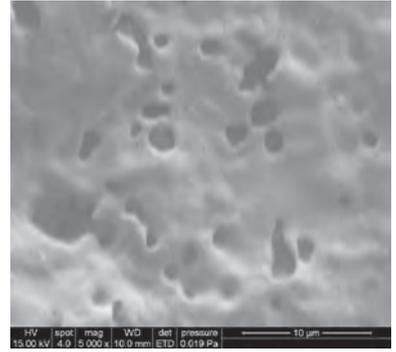
* 密度を元に、金-銀の二元合金として算出した。
 ** 碲石金表面に土砂等の付着物が存在したため、密度は計測せず。



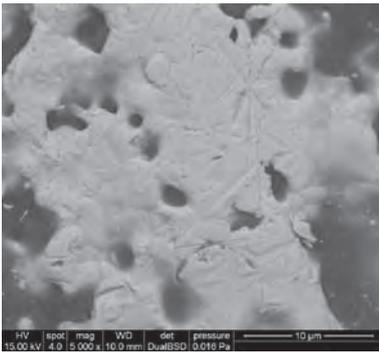
二次電子像



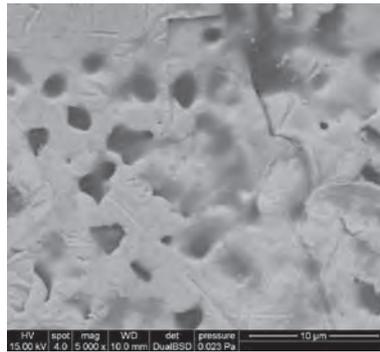
二次電子像



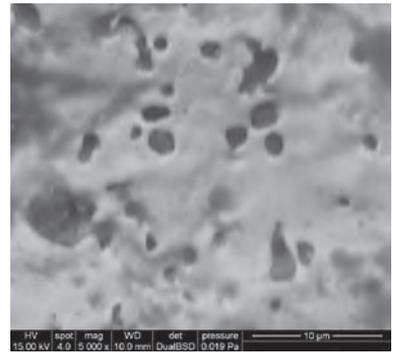
二次電子像



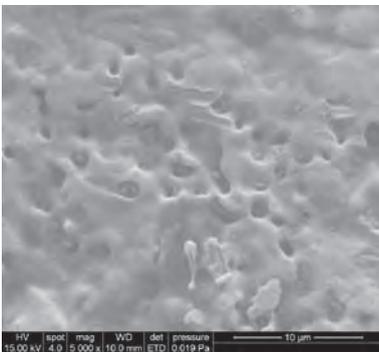
反射電子像
(a) 資料01石目



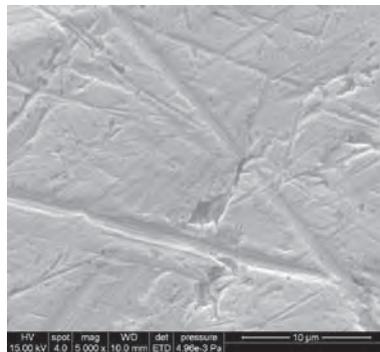
反射電子像
(b) 資料01鋸目



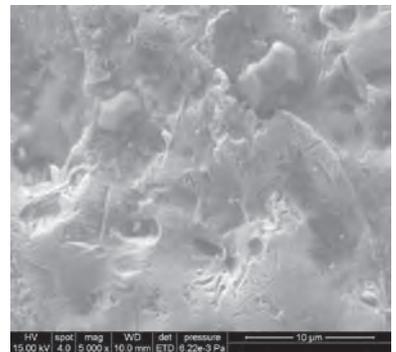
反射電子像
(c) 資料02石目



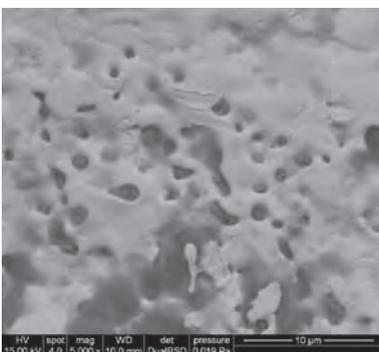
二次電子像



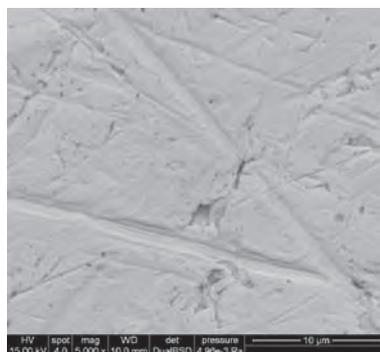
二次電子像



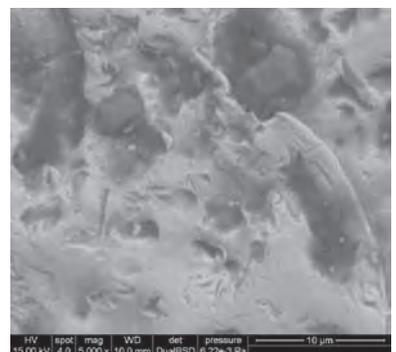
二次電子像



反射電子像
(d) 資料02鋸目



反射電子像
(e) 資料03表面



反射電子像
(f) 資料03裏面

第43図 蛭藻金・碁石金の表面状態

第7章 まとめ

1 発掘調査のまとめ

福寺遺跡の調査は、昭和46（1971）年に発見された金貨20枚と渡来銭貨の出土地点や出土状況を確認する目的で、今回実施された。

調査面積が極めて限定されており、本調査のみをもって所期の目的に十分応えることは困難であるが、調査によって明らかにされた点について整理し、まとめとしたい。

- (1) 福寺遺跡は、縄文時代中期、後期、晩期、弥生時代前期～中期初頭、中世、近世、近代以降の時期の遺物が認められ、長期間にわたる周辺地域の利用が考えられるが、ピット、土坑以外には明確な遺構は確認されなかった。
- (2) 中世段階の遺物は、第3トレンチ出土の青磁碗1点と第3・第4トレンチ出土の土師質土器のみであり、第1・第2トレンチでは出土していない。したがって、この時期の遺構が展開するとすれば、今回の調査地点よりさらに東側の地域であった可能性がある。
- (3) 金貨は第4トレンチ西側、渡来銭貨は第4トレンチ東側の地点の第7層黒色砂質土層内から、攪乱坑の掘削にともなって出土した可能性が高い。この地点は、日川の段丘崖上の縁辺に位置し、対岸の勝沼氏館跡を臨む地点にある。
- (4) 金貨と渡来銭貨の出土地点は近接した同一層位から出土したと見られ、両者がほぼ同時期に埋設された可能性は否定できない。
- (5) 渡来銭貨の年代構成は7世紀～15世紀前葉段階であり、それ以降の銭貨は全く認められない。このことから、渡来銭貨の埋設時期は、15世紀第2四半期から江戸時代以前の16世紀代に限定される。この時期の遺物としては、小破片であるが第3トレンチ、第4トレンチ出土の青磁片および土師質土器が存在する。

2 金貨の歴史的な位置づけについて

福寺遺跡における今回の発掘調査および既存の出土品の整理を通して、金貨が埋設された時期は、渡来銭貨の埋設時期とほぼ同時期の15世紀第2四半期から江戸時代以前の16世紀代に限定されると考える。

福寺遺跡とほぼ同じ構成を示す諏訪大社下社秋宮の金貨は、15世紀前半～中葉の古瀬戸香炉に納められていたとされ、ほぼ同時代のものと推定されている（永井 2003）。

そこで注目されるのが、福寺遺跡の対岸にある勝沼氏館跡の存在である。この館跡は武田信虎の同母弟で、勝沼氏を称した信友とその子信元の居館に比定されている。発掘調査では、16世紀の遺構の下に15世紀中葉の遺構が存在し（甲州市教育委員会 2009）、福寺遺跡の金貨や埋蔵銭貨の推定年代に合致している。勝沼氏館跡においては、昭和48（1973）年からの調査で館跡内郭部南西部にある水溜と周囲に水路が巡らされた炉をもつ土間状の遺構から、高い温度で被熱した溶融物付着土器が数多く出土している。近年の沓名による化学分析の結果、これらの土器に金の粒子が付着していることが明らかにされ、金生産に関わる遺物であることが明らかになった（沓名 2013）。詳細分析の結果、勝沼氏館跡の金付着土器には金鉱石由来の不純物が認められ、その不純物が黒川金山遺跡出土遺物で確認された元素と共通点があることも明らかになってきた。したがって、勝沼氏館跡内郭部において、黒川金山で産出された金の生産に関わ

る工房があったことになる。これらの不純物構成元素は、福寺遺跡出土の金貨とも非常に近似する。これらの事実から、福寺遺跡の金貨は、黒川金山、勝沼氏館跡と極めて関連性が強いものであったと考えられる。

永井氏は、これらの「無極印の碁石金」に対し初期の甲州金とし、刻印を持つ計量貨幣としての甲州金の前段階の金貨として位置づけている（永井 2003）。杓名が実施した分析では、福寺遺跡出土の碁石金は、重量13.63g～15.75gで、平均14.58gである。一方、蛭藻金は13.15g、13.41gとそれぞれ4匁（14.92g）前後の値が示され、秤量貨幣としての位置づけがなされる。この重量は、4匁を1両とする後世の古甲金にも引き継がれるものであり、永井氏の指摘とおりの無刻印の碁石金が古甲金の前身であった可能性は極めて高いと考える。

古文書等の資料からはどのような歴史的な評価がなされるであろうか。有名な『甲陽軍鑑』の中には、武田信玄が合戦で戦功をあげた武士に対し、褒美として信玄自らの両手で「碁石金」を三すくいとして与えたという記録がある。つまり、少なくとも江戸時代初頭には、甲州の金貨イコール碁石金というイメージが成立していたことを示す史料といえる（山梨県立博物館 2009）。

近年、海老沼真治氏らが注目した史料に、京都天竜寺塔頭臨川寺文書の「開山国師真前奉物子母銭帳」があり、戦国時代にさかのぼる甲州金に関わる記載がなされているという（海老沼他 2010）。この文書は、京都天竜寺の塔頭臨川寺に伝わった出納記録帳簿で、開山夢窓疎石の真前に奉納された金品として「甲州運上黄金」の存在が記されている（「黄金の国」展実行委員会他 2012）。この奉納者は定かではないが、同じ夢窓派寺院である恵林寺が有力視されている。

母銭帳に記された黄金には、「小板」「大板」「ツカ」「星」などのいくつかの種類があったこと、またそれらを売却した際の代価がそれぞれ異なることが示されている。県内出土の実際の金貨をみると、笛吹市春日居町岩下出土の大判金、角判金が「大板」、福寺遺跡や大柴氏屋敷の出土の蛭藻金が「小板」、福寺遺跡出土の碁石金が「星」に該当するものと推定される。したがって、福寺遺跡の金貨は、戦国時代においてはこのように呼称された金貨の一部であったのであろう。また、当時の金貨が実際の運用にあたっては「銭」に換金されていることは、秤量貨幣の利用実態を知る有力な手がかりともなりうる。

以上のことから、福寺遺跡出土の蛭藻金や碁石金は、刻印をもつ計数貨幣としての甲州金と貨幣制度が成立する以前の金貨の姿を示すものであり、秤量貨幣の段階における「初期甲州金」とも言うべき存在であったと理解される。本遺跡出土の金貨は、日本の貨幣史を考える上でも極めて重要な意味をもつ資料とすることができる。

引用・参考文献

網倉邦生 2011「山梨県から出土した大量一括銭貨についての検討」『山梨県考古学協会誌』第20号 pp.73-86 山梨県考古学協会

海老沼真治・平山優 2010「戦国期甲州金に関する一史料 —京都天竜寺塔頭臨川寺文書の紹介—」『山梨県立博物館研究紀要』

第4集 pp.64-75 山梨県立博物館

勝沼町誌刊行委員会 1962『勝沼町誌』 勝沼町役場

杓名貴彦 2013「甲州市勝沼町出土の甲州金について」『出土銭貨』第32号 pp.69-74 出土銭貨研究会

甲州市教育委員会 2009『史跡勝沼氏館跡』 甲州市文化財調査報告書第3集

永井久美男 2003「甲州金から慶長小判へ」『金山史研究』第4集 pp.153-165 甲斐黄金村・湯之奥金山博物館

山梨県立博物館 2009『甲斐金山展』

「黄金の国々」展実行委員会・山梨県立博物館・新潟県立歴史博物館 2012『黄金の国々—甲斐の金山と越後・佐渡の金銀山』



福寺遺跡上空写真



福寺遺跡上空写真



第1トレンチ



第1トレンチ攪乱坑



第2トレンチ (南から)



第2トレンチ (南東から)



第2トレンチ西側セクション



第2トレンチ北側セクション



第2トレンチ (南から)



第2トレンチ (東から)



第2トレンチ北側ピット群



第2トレンチ北側ピット群



第2トレンチ作業風景



第2トレンチ作業風景



第3トレンチ (北から)



第3トレンチ (西から)

図版 3



第4トレンチ上面(東から)



第4トレンチ SK2 古銭出土状況



第4トレンチ SK2 古銭出土状況



第4トレンチ SK1,Pit2(東から)



第4トレンチ SK2 断面



第4トレンチ(北側から)



第4トレンチ(東から)



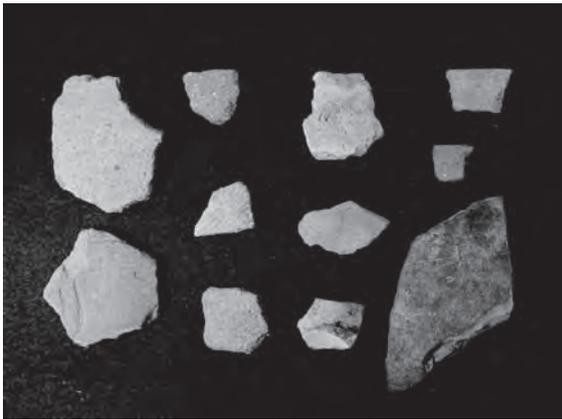
第4トレンチ SK3



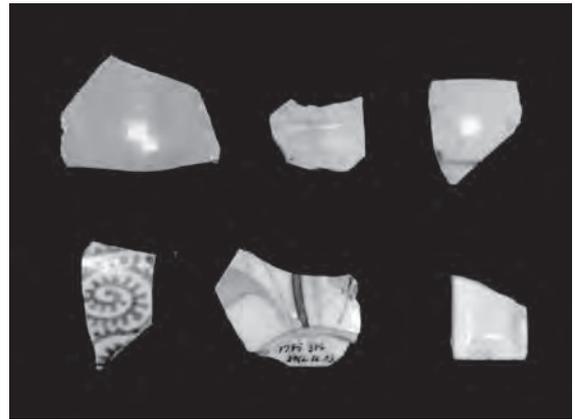
第1・2 トレンチ出土遺物



第2 トレンチ出土陶磁器



第3 トレンチ出土遺物



第3 トレンチ出土陶磁器



第4 トレンチ出土遺物



第4 トレンチ出土遺物

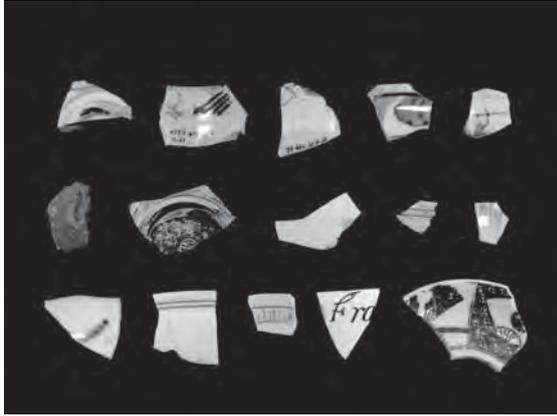


第4 トレンチ出土遺物



第4 トレンチ出土土師質土器

図版 5



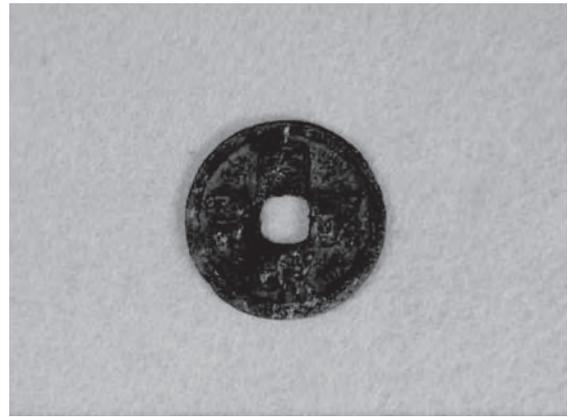
第4トレンチ出土陶磁器



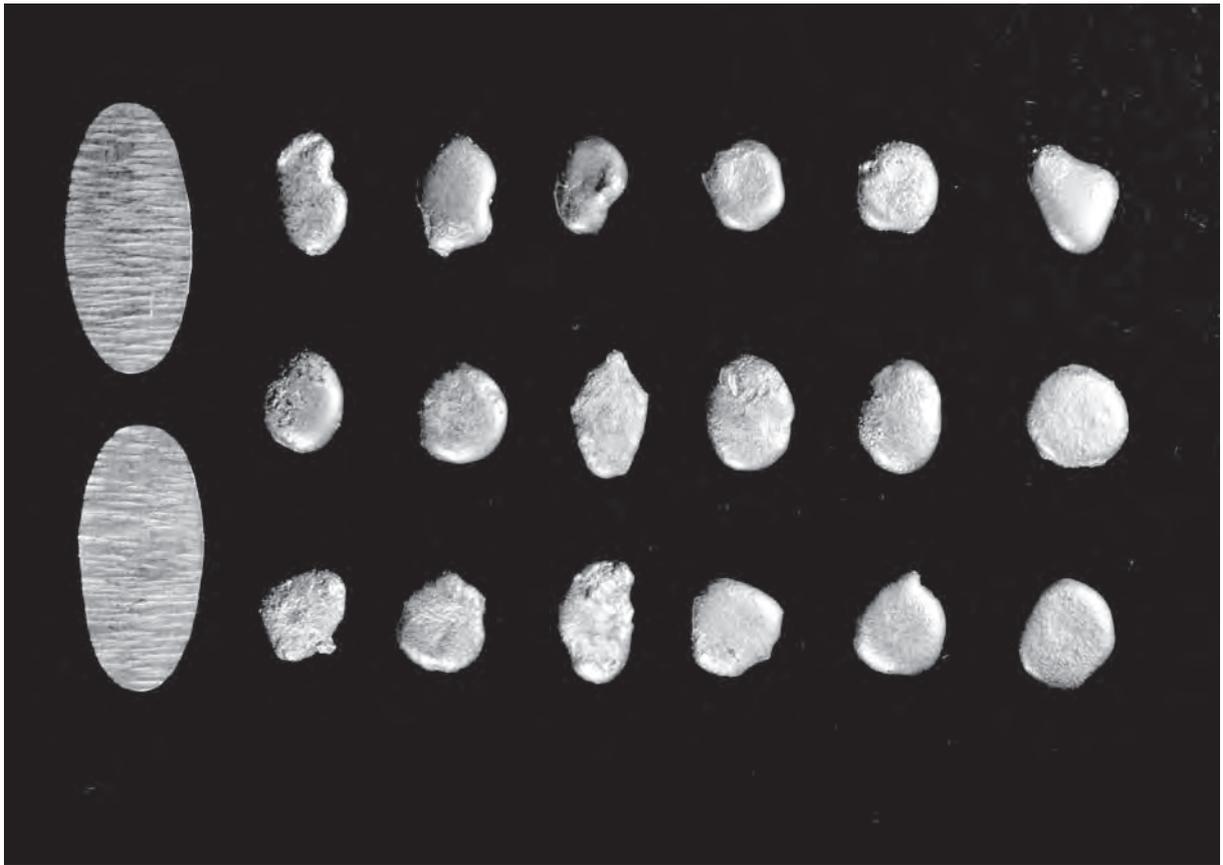
出土石器



出土石器



第4トレンチ出土古銭（宣和通寶）



表面



裏面

福寺遺跡出土金貨（1971年出土）

福寺遺跡報告書抄録

ふりがな	ふくてらいせき	
副書名	埋蔵金貨及び渡来銭貨発見地点の発掘調査報告書	
シリーズ名	山梨県立博物館調査研究報告	
シリーズ番号	8	
著者名	中山誠二・高野玄明・植月学・沓名貴彦	
発行者	山梨県立博物館	
編集機関	山梨県立博物館	
住所・電話	〒406-0801 山梨県笛吹市御坂町成田1501-1 TEL.055-263-2631	
印刷日	2016年3月24日	
発行日	2016年3月30日	
所在地	山梨県甲州市勝沼町上岩崎	
地図名	25000分の1地形図 石和	
市町村コード	19213	
調査原因	学術調査	
調査期間	2012年11月15日～12月15日	
調査面積	70㎡	
遺跡概要	主な時代	縄文時代、中世
	主な遺構	ピット、土坑
	主な遺物	縄文土器、中世陶磁器・土師質土器、近世以降の磁器等
	特殊遺構	戦国時代の金貨、渡来銭貨の出土地点の再調査

山梨県立博物館調査・研究報告 8
福寺遺跡
埋蔵金貨及び渡来銭貨発見地点の発掘調査報告書

発行日 2014（平成26）年3月30日
 編集・発行 山梨県立博物館
 〒406-0801
 笛吹市御坂町成田1501-1
 TEL 055（261）2631
 印刷 港北出版印刷株式会社
 山梨県甲府市高室町155
